明治二十九年九月五日發行

女鑑



第百拾六號

東京國光社

女鑑第百十六號

目録

女鑑

家庭教育上の急務……一

論説

賤女……坂本鼓山……五
女子教育一班(二十四)三輪田眞佐子……五

史談

阿梁……塘井ふく子……一一
蜂屋貞次の母……永石滿風……一四

家政

たちぬひ……西山たい子……一六
造花(三)……伏見藤三郎……一八
たいさころ……二三

學園

日本文典(十七)……塘井正男……二四

漫録

またぬ青葉……故人香川景樹……二九
貝原先生息女の返書……小塚きう子……三二
老人教戒の歌……こさん……三三
おきの玉藻(十二)……永石徳文……三五
荒木田麗女著述目録……あ・ま……三七
雨月物語(つゞき)……故人上田秋成……四〇
紋帳圖式綱目(續)……井上頼文……四三
宇都山記……故人宗長……四六
鹽原みやげ……草の屋主人……五一

文林

東京二十四景(六)……菊の屋女史……五三
死不瀕……石傳千亦……五五
朴平(つゞき)……白魚女史……六一
歌……近衛忠煕……六四
仝……前田利鬯……六四
仝……高崎正風……六五
仝……本多忠貫……六五
仝……池田政禮……六五
仝……長谷信成……六五
仝……諏訪忠元……六五
仝……宮地嚴夫……六五
仝……小出粲……六五
仝……阪正臣……六五
仝……植松有經……六五
仝……松本高明……六五
仝……遠山英一……六六
仝……三浦千春……六六
仝……師岡正胤……六六
仝……林甕臣……六六
仝……三輪義方……六六
仝……伊藤祐賢……六六
仝……安濟篤敬……六六
仝……黒崎仙太郎……六七
仝……石原均……六七
仝……水庭芳香……六七
仝……岡本秀晴……六七
仝……蜂須賀隨子……六七
仝……前田朋子……六七
仝……大河内鉦子……六七
仝……柳原愛子……六七
仝……千種任子……六七
歌……姉小路良子……六七
仝……稅所敦子……六八
仝……北島以登子……六八
仝……日野西廣子……六八
仝……三宅龍子……六八
仝……諏訪晴子……六八
仝……山本富士子……六八
仝……小池道子……六八
仝……海上蕣子……六八
仝……清水たつ子……六八
仝……内田遊獻子……六九
長歌……海上蕣子……六九

雜報

常宮周宮兩殿下の御舟遊……六九
阿佛尼の古跡……七〇
鈴木梅仙翁の製墨……七一
石川訓導の義擧……七一
工女の風儀につきて……七二
第四十俗會……七四
世界第一の長壽者……七五
一家族五十人……七五
鳥獸壽命談……七六

敎の庭

兼題　歌　數首
　　　文　數十章

口繪……高崎松亭
插畫……[illegible]女史

阿栗



家庭教育上の急務

吾人は、さきに、家庭教育の方針と題して、家庭教育の方法の大綱を、あらく〳〵かい說けり。やがて、家庭の教訓は、智育を本とせず、學術技藝の指南は末なるをいへり。さなくて、家庭の教訓は、心意上の教養を本旨とすべきものなるをいへり。されば、家庭の教訓は、學者が講壇に登りて、かゝるべしかゝるべきものなりと、單に學理を講說してきかするやうにては、可ならず。さりとて、また、將官が馬上に叱咤して、斯く進め斯くせよと、三軍を命令するやうにても、可ならず。而して、法律の如く、しか〴〵すべからずと、規則を以て束縛するのみにては、もとより不可なり。さはいへ、なか〳〵に、自然にまかせて放任なるも、いかでか家庭の教養ならむ。家庭の教養は、感情的ともいふべき教導の道によらざるべかからざるをいへり。そは、やかて、母たる者が躬ら美を行ひ、實に美を

踐み、以て兒童の手本と成り、兒童の自らこれに感染して、自ら美を行ひ美を踐むやうにならむ事を要す。殊更に理を説かざるも、あながちに命令せさるも、強て束縛せざるも、自ら母の美言美行に感動心染しゆきて、よく美をいひ美を行ふやうならむ事を要すといへり。實に母たる者が躬行實踐、知らず〳〵兒童の手本となり、善良なる國民を養ひあぐるが、家庭教育の本旨なり。而して、母たる者が、家庭教育の主任者たるべき事は、吾人もしば〳〵これをいへれば、またこゝにいふことを好まず。

これを、家庭教育の本旨として、さて、こゝに、この家庭教育の主任者たる母たる人、及び母たるべき令孃に向ひて、吾人が云はまくほしく、つげまくほしく思ふ事も望みも、いと多かるが中に、第一に、一願を願ふべき急務こそあれ、そは、まづ、我が國の人は朝夕起臥の兎角に不規則なる弊風あり、昨日はしのゝめの光くらきに、疾く起き出でしと思へば、今朝は空ゆく日かげ高うなるにもなほめさむることをせず。昨夜は、夜半の月いつか傾かむと見るまでも、いねずと

見れば、今日は、夕月の影をも知らで、はやもねぶりこくるなど、起臥の時、露ばかりだも定めなし。或は、もとより、人々のきはにより、或は止むを得ぬ事によりゝさせでは適はぬ事も折もあらんなれど、故なきに、事なきに、さらむ不規則の起臥するが、大概の弊風なる如し。また、我が國の人は、其の業務を勉むるに當りても、やゝ不規則なる風あり。昨日は終日終夜孜々として、手もとめず、眼もやすめず。息みもせず、いねもせず、ひたすらに勉め勵むと思へば、今日は、終日終夜爲すことも無く明かし暮らして、我が業務は更に忘れたらむが如く、或は、午前の間ばかり業務につく日ありと思へば、午後ばかり業務につく日あり。或は、日ある間ばかり勉め勵む日ありと思へば、燈火の下にのみ勉め勵む日あり。風のまに〳〵山の端の雲のかゝるばかりにて、みだらなること、いふばかりなし。されば、また、運動を爲すにも、遊樂を爲すにも、おなじやうに定めなく不規則なり。一日幾里の山河を踏み、或は一日、舞ひつ、謠ひつ、とびつ、かけりつ、非常の運動遊樂を爲すかと思へば、數月の久しき、更に門をも出でずといふやうな

るあり。運動遊樂、もと身體精神を保養すべき道なれど、かくては、いかでか其の功あらむ。

斯の如き不規則は、もとより人の身體を健康ならしむる道にあらざるのみならず、人の精神をも、おなじく不健康に不精に墮落せしむるものなり。一例もて其の理を説かば、人の身體精神は、なほ工業上の器械の如し。器械は精なるも妙なるも、これを用ふるに取り扱ふに、不規則ならむには、やがて破れもくるひもはてむ。人の身體精神も斯の如きなり。

この弊は、たゞに一個人の身體精神の不健康に止まず、大にしては、やがて、一國の不健康、一社會の不健康と成すものなり。如何となれば、國家社會は、この個人の團結なればなり。此の器械の結合なればなり。

かゝる弊風を正さむは、今後の家庭教導にこそあれ。而して、この家庭の教導の主任者は世の母たる人々なり。母たるべき令孃たちなり。而してこれを導くは、感情的教導にあり。賢良なる我が同胞婦人たち、願くは一顧せられよ。

論說



賤女

阪本皷山

暑氣甚し、何れの處か涼風を得ん。高樓月に對して、侍女側にありて扇す。然れども一味の涼、身に冷かならず。去て香山箱根に遊浴す。山紫に水清し、一浴して欄干による。快は或は快なるべし。然れども是また一味の涼、身に冷かなるを覺えず。寧月宮に遊び、氷窟に入らざれども、彼れ等は涼を知らず。快を覺えず。何ぞ人間世界の涼味を知らんや。是今日貴婦令孃と稱する人の境ならんか。

學窓の下、朝夕學科に對し、學科倦みて、近傍の緑陰に遊び、親友と涼を納れ、以て快となすものは、學舍にある諸孃なるべし。朝に校に登り、夕に家に歸り、晩來父母兄弟と一浴して、夕蟬の聲を聞き、庭前に笑語涼を取るは、通學の諸孃なるべし。此れ等の人は、夏時の暑さを解し、また涼の如何を解する人なることは、貴婦人令孃より、深からん。然れども學の園に遊びて、藝を學び、技を研く、實に得難きことにし

て、父母存し、兄弟あり、而して嬢等をして、學藝の園に遊ばしむ。食飽きて、衣清し、孃等の境は、實に人生の樂土なり。尙暑の苦しきを訴ふるが、涼の眞味は孃等未だ解せざるべし。

吾人は山間の一市街に卜居す。朝來妙齡の處女、薪を荷ひ、露を帶ぶる菜蔬、花菓を賣り來る。嬌聲戸々を叩いて買はんことを求む。朝に星を戴いて出で、焦土を踏て、傘せず、顏色黎黑、手足胼胝す。夕に月を見て去り、髮幾日か梳らずして、蓬々、彼等は何ぞ行くに露多きを知らんや。何ぞ桑中相待の事を知らんや。唯盈々たる露中の蔬菓、鮮是れ潔がんとし、桑を摘み、父母の命是れ奉せんとする良女佳孃なり。之を世の貴婦人と比し、女學諸孃に對せば、寒の苦、暑の烈、果して如何ぞや。而して彼等の擔を息へて、松陰に一憩する涼味、嗚呼前の二者は知らさるべし。

吾人に一老母あり。曉來日々花を購て、祖先の靈位に供す。購ふ所の一女子、齡僅に十六七歲、厨房に來りて、毎旦花を贈り、且つ小憩して去る。彼云ふ、妾に一老父あり、病で且盲す。一弟あり、十三歲、今春小學を卒業す。妾弟と拮据わずかに父を養ふ父老且盲すと雖ども、妾等をして。今日生成せしめたる者は、一に父母の賜なり、故に其の万一を父に報せんとして、身を委して、日夕菜菓花草を賣る。知らず、此の如

き小報恩、猶幾分か、子たる者の道を盡すと云ふべきや、否やと、語々眞摯、一丁字を解せざる野孃、至誠切々人を動かす。老母常に慰諭して往かしむ。嗚呼是何人の子野に生ふる女郎花、自然にして此の色香あり。澗畔亭々の松、小なりと雖ども、千歳の緑を含む。若し貴孃高樓に棲み、温泉に遊び、或は學舍暑を苦しみて、涼を欲する人をして、此の賤女に對せしめむ、始めて夏の暑き所以を知らん。涼の快なる所以を知らん。人生は欲望の社會なり。無望の社界にあらず。高に達せんとするは、下よりせざるべからず。故に人世の社界は下層の夏を知り、寒を知り、併せて秋と春とを知り、春夏秋冬の際、下層の艱苦如何を知らむ、始めて夏の涼味、美食の甘き、重衣の煖きを知らん。

今や暑氣酷にして、矮屋殆んど居るべからず。然れども小女の事を一念す。涼風腋下に生じて、端坐して肅然たらしむ。讀者諸孃は、學で道を知るもの。理に於いて、疾に人生の苦の如何を了知せん。然れども其の想像を去れ、想像なるものは、所謂耳に聽て、口に說く弊に陷る。女子の最戒むべきことに屬す。幾多女子に對して、論說するものは、上流の人に向て敎へ、或は戒しむる言多くして、顧みて貧若くは賤なることに於いては、之を論談するを避く、貧賤豈人の望む所ならんや。然れども貧賤は世

の多數なるを如何せん。貧賤の眞味を了し得て、始めて一家の主婦たるべく、一家の良母たるべし。八九月の暑天、都門の熱を避て、靈山名勝に優遊する貴孃、或は家に在て氷塊を含みて、尚は暑を苦しむ人、願はくは吾人をして、賤女の言行を左右に容れしめよ。賤女の夜來家にかへりて、父母を省し、虫鳴く清非の邊に僅かに身を清め、父母に添て眠れる夢は、吾人其の果して如何なるを問はん。噫。

女子教育一班（二十四）

三輪田眞佐子

そもく人能く五尺の短身もて、虎豹を倒し、牛馬を御するを得る所以のものは、蓋し力彼等に秀づるがためにあらず。唯智彼等に優るればこそ。若し人にして智彼等に及ばざらむか、彼等わが肉を食ひ、わが血を吸ひ、あはれ人類は漸々消滅するに至るならむ。それと等しき理にして蟻だにわれ等より、非常に勝る智識あらしめんには、寧ろわれを倒し、われを御せんも知るべからず。としれもへど、智識の効はいみじきも造化の配合は、妙なるものにて、魚に鰭あり、鳥に翼あり、以て各その身を保ち、あるは獸も牙あり、角あり、以て長能く短を補ひ、將た人は智ありて、以て生命を安ずる如く、凡ろ天地の間に、生きとし生けるものは、悉く生存のよすが備るめり。今こ

の天然法を人類に適せんか。たをやかなる婦女、強健なる男子、相待ちて、世に立たんとならば、その體力の及ばざる所は、智力を以て補はずして可ならん。されば比較上女子は男子より、智育を重くすべくも、輕くすべからざるものぞ。なほ舊慣を改めざるものは、男子こそ相當の智育をなすこと、必要なれど、女子の教育は、牝雞の晨に鳴く基なれば、せずもがなと曰ふ。希くは、思一思そのひがごとを悟れよかし。たまく今日女子の智育に、心を用ゐる人も、智育の目的を誤るものあり。そは今日女子を學校に入るゝものは、娘の容貌美ならざるため、あるは嫁裝に代ふるためにするものありとかや。果して然らば、その目的は某女學校卒業てふ人爲の虚名を得るに過ぎざるなり。既にその素志虚飾のために止らんか、從ひて智を養ひ、身を益するに於いて、毫も効なかるべし。諸葛武侯子を戒むる書に曰く、それ學は須く靜なるべし。才は須く學ぶべきなり。學ぶにあらざれば、以て才を廣むることなく、靜なるにあらざれば、以て學をなすことなし。慆慢なれば精を研くこと能はず、險躁なれば性を理むること能はじ。と、されど父母虚名を得せしめんと、娘を學に就かしめ、自身虚飾を爲さばやとおもひて、校に入るものは、慆慢乎、險躁乎。つねに心収らず、氣動くを以て、晝は唯々と音讀せんも、眞に腦髓に智識を蓄ふること能はず。夜は獨り三

年の星霜を夢に長しと、かてつむかりにこそ。

亦智識は、生活上、直接に必要なるものを先にして、間接に有用なるものを、後にするころ、教育の順序なれ。(スペンサー)はその教育論に、處女は讀書、作文、數學、及び裁縫を以て、生存上、直接に有用なるものとものしぬ。わが國の女子もなほ右の學科により、根本の智識を養ひ、以て一家の人倫を正し、經濟を調へ、及び兒童を養育する智識を以て、直接に必要なるものとぞ思ふなる。然るに現今物質上、文明に趣きし影響にや、一般女子は智識を養ふを忘れ、茶花あるは音樂など、優美の技を先きにする傾あり。元來これ等の藝は、女子のため有用ならんも、物の本末輕重を辨へてよ。かくなん女子教育が虛飾に流れ、あるは末技に馳する所以のものは、何ぞや、他にあらず、未開の時代には、何れの國も、女子は殆ど男子の翫弄物と扱はれしを以て、れのづから女子は遊戲の藝のみをつとむれぞ足りけん遺風ならむか。現に今も三弦を以て、自活する賤女多きにあらずや。且つ人智の進ざる時代は、物の眞相を察せずして、徒らに外觀を尊びしかむ、ろの餘影にて、なほ虛飾のため末技に汲々たるものあるならん。兎まれ角まれ、今や智識なきものは、世に立つことを能はず。外觀は長く世を欺くことを能はじ、あゝ。



史談

阿粟

鹽井ふく子

雲井に高き富士の山のそがひにはさまれる國柄にや、甲斐の國には、烈女も少なからぬが中に、賤しき身ながらも、志を芙蓉八朶の巓の高きに比べ、節を富士千秋の雪の淸きに爭ふ女子こそあれ。阿粟、やがて、其の人なり。

阿粟は、甲斐の國のあやしき農家に生れて、はやう二親をさへうしなひたるものなりけり。村長、その孤にして、かつ貧しきをあはれみ、何にくれと心をつくし、物など與へて、同じ村の人安平と云ふものに嫁せしめぬ。

阿粟は、村長のなさけにて、たのみなき身の、杖をも柱をも得たる思ひ、村長の厚きなさけ、ゆめ仇にはなすまじ、幼より養はれざりし身、何卒過ちのあらぬやうにと、天にいのり、心に求め、たゞ／＼夫に、舅に、やさしう、まめやかに、心の限りをつくしてかしづきぬ。しかるに、たのまれぬは人生、天とも地ともたのみにたのみたる夫

安平、程もなく惡疾に罹りて、次第〳〵におもり行くに、阿栗は、かつおどろき、かつかなしみたれど、さばかりは氣をもくじかず、力をもおとさず、躬ら鋤き、躬ら耕して、夏の長き日、汗をもぬぐふひまなく、ふゆのみじか夜も宵よりはうちまどろまず、夫の看病、云へば更なり、舅にかしづく事、衣食の事など、よろづ身にひきうけて、朝夕怠らず、心をつくす事、數年に及べり。
折りも折り、ほろ〳〵と露も木の葉もちりまどふ秋の暮、阿栗も心細く涙ながらに、夫を介抱なしけるに、一天俄にかきくもり、甍をとばす大風、松の戸をうちくだく大雨、ふきすさび、ふりしきり、屋も垣も破れぬるに、家々、人々、わなゝきさやぐほどに、何處ともなく囂々と聞ゆるもの音、なきさけぶ人聲、何事ならんと、阿栗もいそぎ戸を開き見るに、山の如き激浪、地を卷いて押しよせ來り、凄まじき水音、大水至らん、早う人々逃れよとさけぶ人の聲にたぐひて、天を動かすばかりなるに、阿栗はあわてて、內に入りて、夫と舅を助け出さんとす。時に夫安平、體肉はや爛潰して起つ事能はず、栗に向ひて謂ふやう、我れ逃れしとて何かはせん。幸に此處に溺死せんのみ。汝はよろしく速に去るべし、さるにても、汝の吾を醜とせず、年久しくいたはりくれし誠心、肝肺に銘して忘れず。これを思ひ出に心安くよみぢにまかるべし。今ははや時

なり、我を置きて去るべし。早う〳〵と云ふに、栗はかなしく、涙にかきくれて、云ふやう、妾、初め、村長のなさけにて、思ひがけず和殿にかしづく身となり侍りてより、此處に幾年、たゞ一身一體とこそ思ひたれ。今難にのぞみたれどとて、いかでか御身をすつべきと云ふ言葉も未だ終らざるに、大波はや、門外に逼り、後るゝものは死せんと、人のさけぶ聲の急なるに、阿栗はあわてて門を出でゝ、舅をも人に託して去らしめ、己れは内に入らんとするに、舅も省て、諸共に去れよと云ふを、大人は歩みれそけれど、まづ早う逃れ玉へ、已れは良人と共に、あとより追ひ及びんとて、内に入り、夫の側に侍し、妾夫と同じく死せん、共に溺れんと天に誓ふ貞女の心のゆかしき。千引の石は動くとも、ひとり動かぬ節婦の心、道を守り、義を思ひ、女の道、妻の道をつくしにつくさんとするものを、何を怒りてか怒濤、何を恨みてか狂水、ますますあれにあれ、たけりにたけりて、磯をも巖をもれし流すばかりなれど、いかでささやかなる檜皮葺の小屋のさゝうへうべき。さながら木の葉の如く、もくづの如くに、家ながら押し流して、巖にうちよせて、うちくだくほどに、可憐なる節女、腐れたる夫を抱きたるまゝ、小家もろともに、波底の藻屑と消え果てぬ。

あはれ、阿栗は病夫に殉して、むなしく溺死しぬ。大水は其の清きむくろを流しき。

清きの名は千代の末までもながれゆかむとすらむ。

蜂屋貞次の母、

永石薫風

蜂屋貞次の母、其の氏は傳はらず。貞次は德川家康に事ふ。心をゝしくて、勇ましかりしかば、其の名軍中に高し。戰に臨むごとに、必身をぬき出でゝ、さきがけせずといふことなし。永祿の七年といふに、家康騎兵五千ばかりを率ゐて、吉田の城を攻め陷さんとして、ひそかに覘ふをりしも、吉田城の勢、かくとさとりて、急に出でゝ戰ふ。時に本多忠勝いち早く槍をとりて、先登してけり。貞次これを見ていふやう、われ忠勝が槍に次ぎて第二たらんこと、心よからんやはとて、携へたりける槍をなげ棄てゝ、帶びたる太刀をふりかざしつゝ進み戰ふ。たちまちにして敵二人をうち倒せり。こゝに一人の、銃をもて貞次を射んとするものあるに、貞次急に進みよりて、左手をもて、其の銃の口をふたぎ、右手には太刀をうちふりて、その膝をきり斷ちてけり。しかれどもはやく銃丸にうち貫かれしかば、遂に打死してけり。母家にありて、このさまを聞きて、いさゝかもかなしげなるけしきもなく、うち喜びていへらく、かくてこそ我が兒なれ、我が兒うせたりといへども、そもゝゝ武夫の屍を戰の庭にさらさ

んこと、さるべき分なり。いかでかも深くうちなげかんや。とし我が見はしたなくて、敵に後を見せ、謗を世に傳へたらんに、妾まで何の面目ありてか、此の世に生きながらふべけんや。今このうれしき報をきくを得て、妾が願かなへりとて、憂かる面もちもなし。世これを傳へ聞きて、かゝる母ならでは、かゝる子はね生まじとて、口々にいひはやせりきとなん。

戰國の世には、世の中いたく亂れて、古よりの大義はやくすたれ、群雄各處に割據して、互に相爭ひ、強きものは弱きものを打ちなびけつゝ、思ふがまゝにふるまひしかど、近くおのが隷屬する主君あることを知りて、高く天皇のましますことを知るものすくなし。かゝる際にも武夫の魂はふるく古の餘風をつぎて、おのが主君とあふぐ人の爲には、身をもかへりみざりしは實にめでたし。今の大御代は畏くも天皇陛下大御みづから萬の政をすべさせ給ひ、このありがたき御代にうまれあひて、限りなき恩賴を蒙る。平時はおのも〳〵業をつとめ、事あらん折には、身をすてゝも君を守り、國をたもたざるべからず。むかしは兵農別れたりしこともありしかども、今の世は然らず。かりそめにもこの神州に生れたらん人、誰かは兵ならざらん。されど武夫たらん心は誰れも忘るべからざるなり。平時には御惠の露にうるは

ひながら、事あらん折に、にげまどふが如きふるまひあらんに、その心賤しくして、恥も亦この上もなかるべし。女の身なりとて、この心がまへなくてよかるべし。

家政



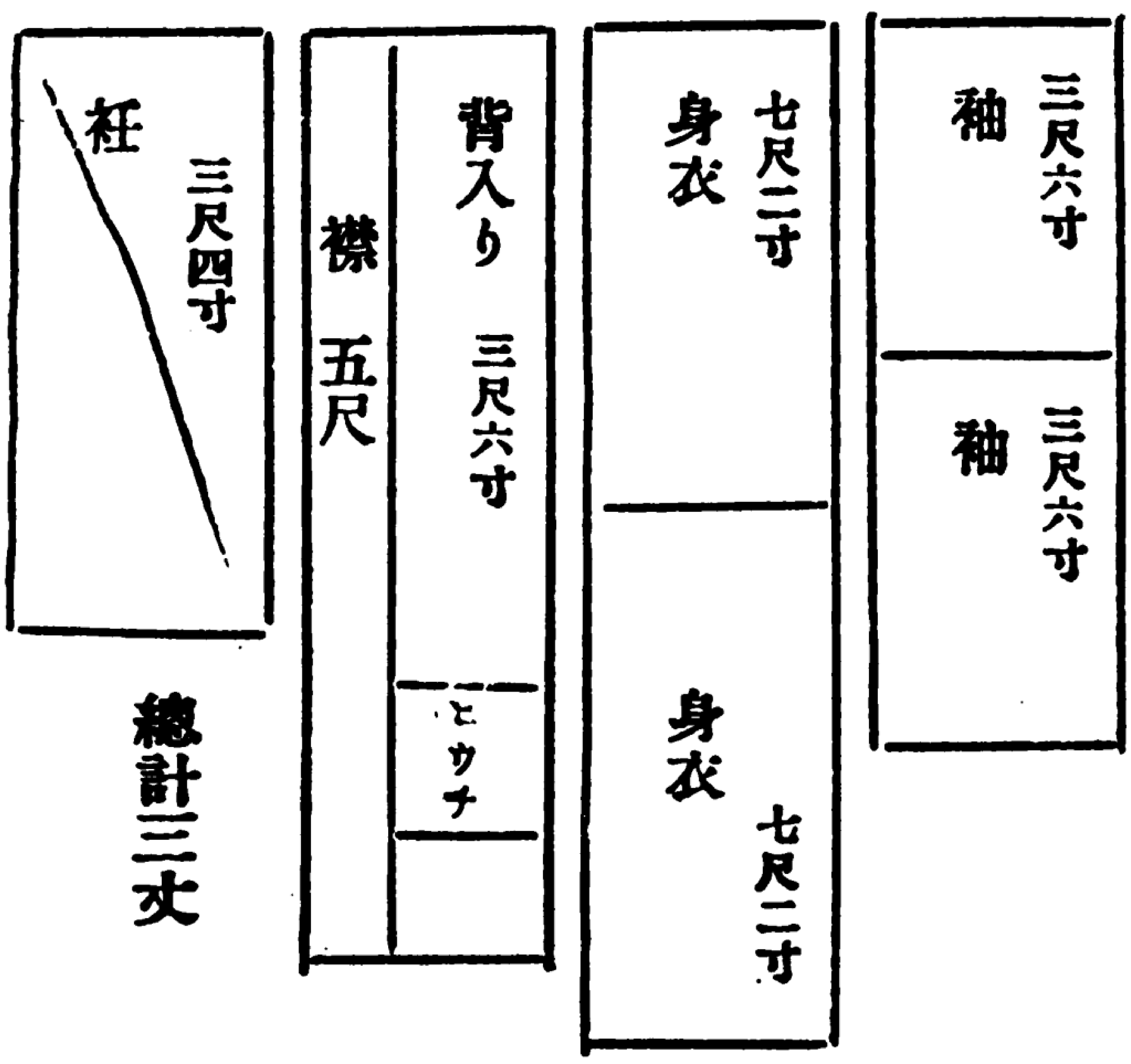
たちぬひ

西山たい子

（四十六）背入夜着の裁ち方

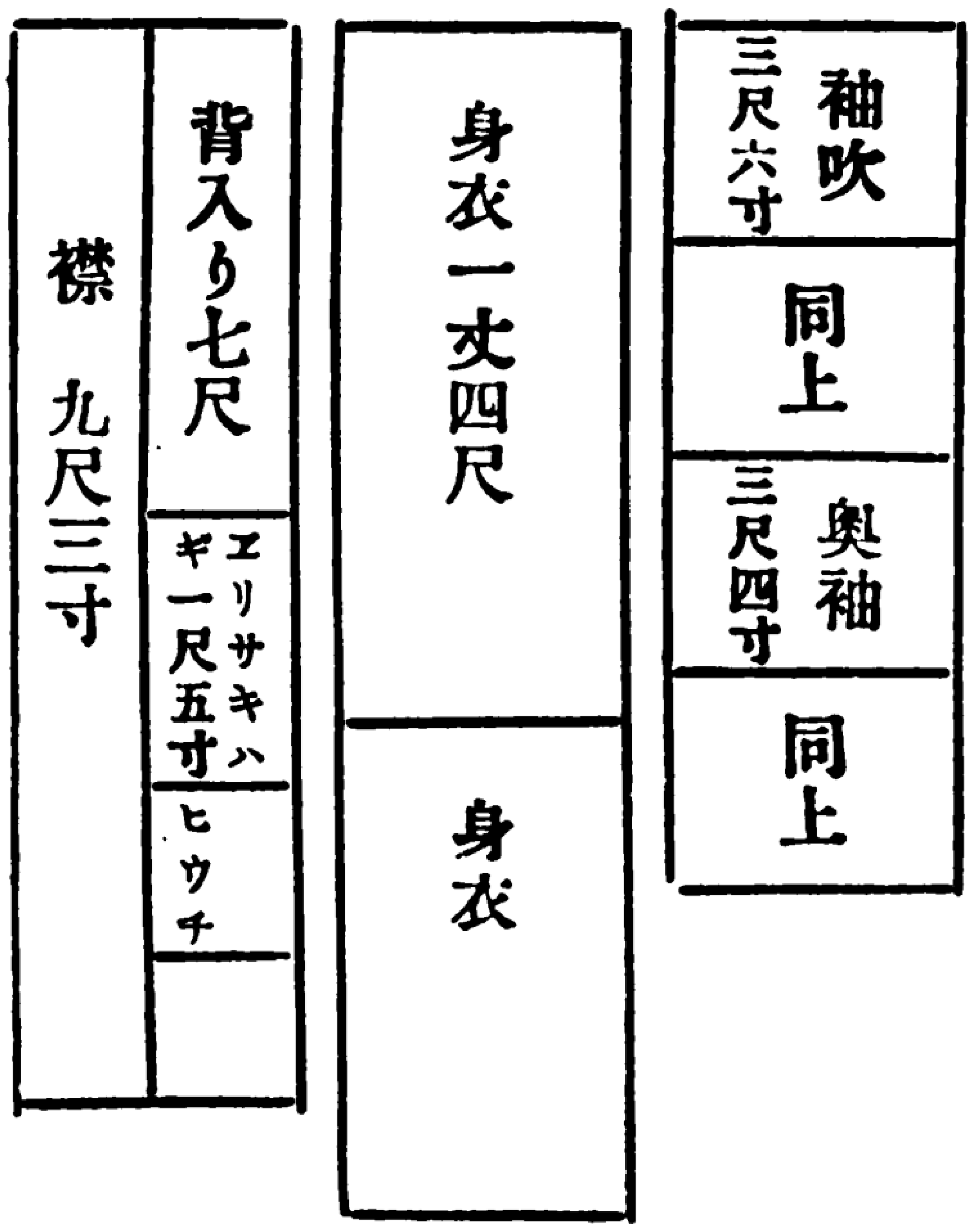
背入夜着は、大方夜着と同じなれど、背に入れる切れの多く入るものにて、其の他も、夜着よりは、丈も巾も、少しく大きく要するものなり。

（背入夜着の表のたち方の圖）

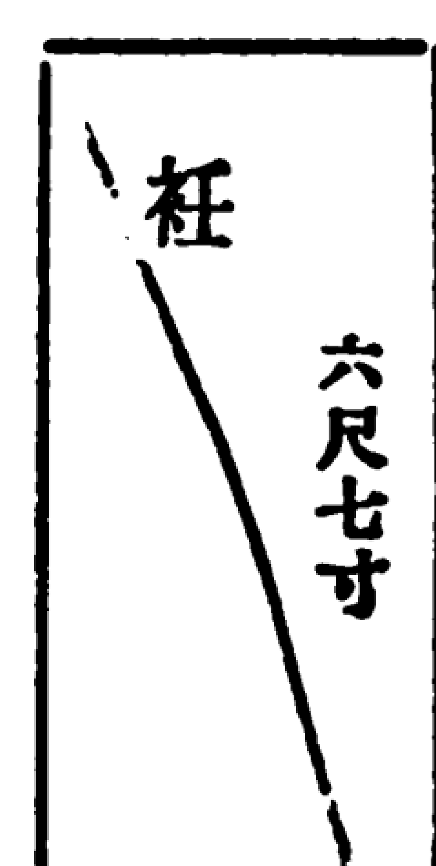


圖の如く、まづ袖をとり、さて身衣をとり、衽の丈をも定めて、これをとり、その殘りを、縦に眞二つにきりて、半巾を襟となし、他の半巾を身衣の丈だけにきりて、それを背入れとなし。このはしの殘りし切れを、ヒウチとなすなり。衽は、圖の如く、一巾のものを裁ちかひにすれど、巾も廣くなるなり。襟形は、背入とも四寸むかりにすべし。故に、一寸八分むかりを切るべし。

同）裏の裁ち方



の圖（



總計五丈八尺むかり

圖の如く、まづれく袖と、口袖とをとり、身衣をとり、衽をとり、殘りを、やはり表の如くに、半巾にたちて、襟と、背入と、ヒウチとにすべきなり。

（四十七）この縫ひ方

夜着と、皆同じなり。たゞ背入を入るゝのみの差なり。まづ、例の如く、表袖に袖吹の切れをつけ、ヒウチの切れを入れて袖下をぬひ、裏の奥補にもヒウチの切れを入れてぬひ置き、それより、身衣を二つに折りて、肩に志るし糸をつけ、その身衣の丈と背入にする切の丈とをそろへて、左右の身衣の後ろの方を縫ひつけ、（但し、縫ひめは、背入の方にかへすべし。（これより、脇をぬひ、衽をつけ、裏をも

表の如くにして縫ひ、裾を合せ、襟をも夜着の如くにして縫ひ、まはりを縫ひ、袖をつけ、例の如くにし



て綿を入るゝなり。但し、裏の背入れを入るゝとき、三尺内外わけれくべし。とぢ糸をつくる、事も綿を入るゝも、引きかへして絎けるも、とづるも、皆夜着と同じなり。

造花

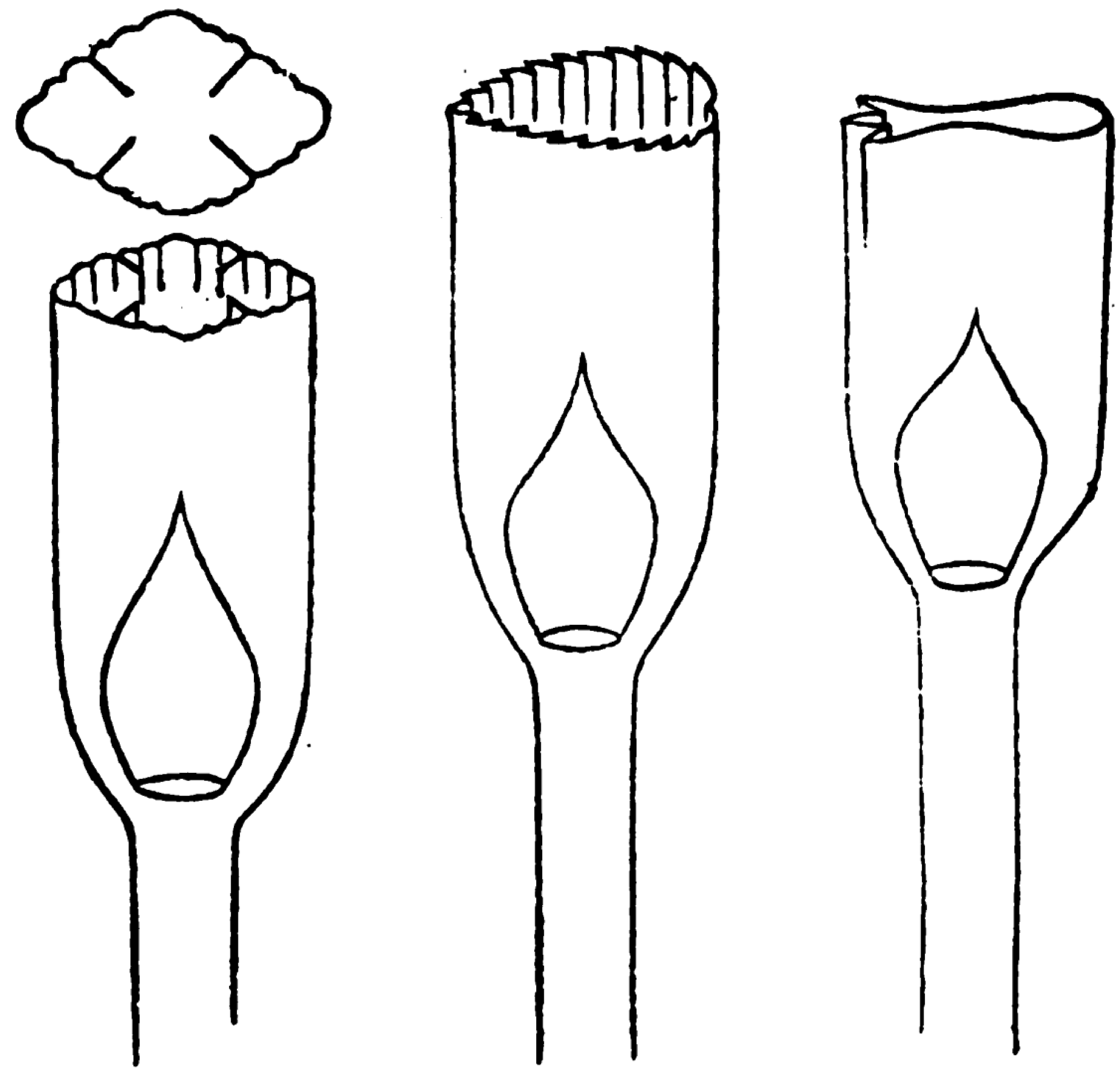
伏見藤三郎

こゝに示せる第十一圖、及、第十二圖は、歐米諸國にて、各種の葉を造るに用ゐ來れるものにして、第十一圖の打拔は、中空にして週圍に齒あり。されど葉を造らんとするには、先此の打拔にて、何のにもあれ葉の形を打ち抜き、次に押鏝にて押し付け、葉の如き筋を付くるなり。

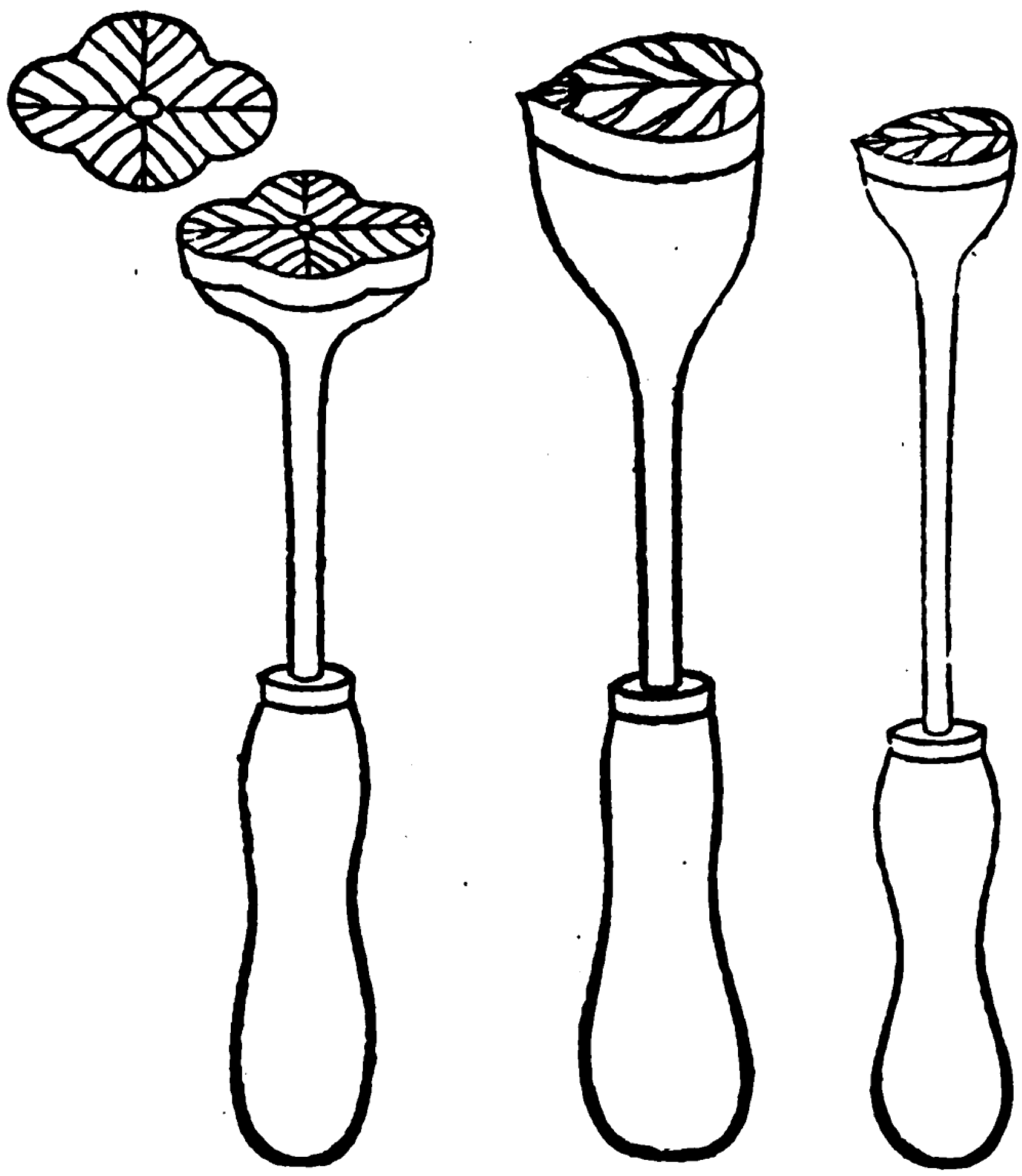
又一時に多數の葉を造らんには、押鏝の代りにコッピと云ふものを用ゆることあり。これまで我が國に

ては大概前號に示せる第一、第三、第四圖の鋏、庖丁、筋鏝等を用ひ來たりしが、今は是等の道具も稍用ひらるゝに至れり。

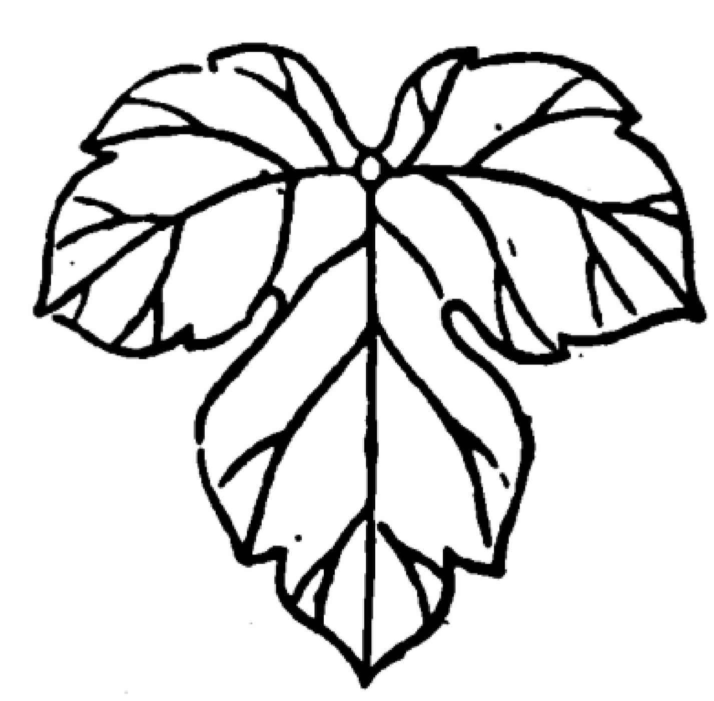
第十一圖　打貫



第十二圖　押鏝









●料品の種類及使用法

布類には、寒冷紗、伽羅子、天鵞絨、絖、羽二重等を用ひ、

紙類には、美濃紙の礬水引。雁皮紙。畫學用紙を用ゆ。

針金は、眞鍮、銅、鉄、の各種。太さ一分より四五分までのものを用ゐる。

其の他必用なるものは、玉護謨、紐護謨、綿糸、絹糸、毛糸。花の蘂及花粉に用ゆる米の粉、罌粟、粟粒、白胡麻の類なり。

糊には、婦糊、姫糊、タラカンダ護謨を用ゆ。

寒冷紗を用ゐるには、先づ、その糊を抜くべし。其の抜き方は、凡そ三十分許寒冷紗を湯に浸し、取り出して水に入れ、暫くして上げて乾燥せしむ。伽羅子も亦同じ法にて使用す。是等は皆花辨に用ゆ。又絹類は竹伸子を張り、可成上等の婦糊（タラカンダ護謨、又姫糊にても可なり。婦糊、姫糊は擂鉢にて能く擂り、袋に入れて絞り出して使用し、タラカンダ護謨は、水に溶して使用す）をはけにて裏表に斑無き様に引くべし。凡て葉を造るには、色染をなしたる後に糊を引くなり。

天鵞絨の類にて花を造る時は、裏張をなすべし、其の仕方は寒冷紗に糊を引きて、天鵞絨に張り付くるなり。但糊を引くときは、裏に通らざる様注意すべし、絖にて葉を造るは、天鵞絨と同じことなり。

紙類は簡略なる造花に、花、葉共に使用す。

紐護謨は花の莖に用ひ、玉護謨は多く萼に用ゆ。糸類は凡て花の蘂に用ひ、又花瓣及葉を纏ひるに用ゆ。針金は多く莖及葉に用ゆ。之れを使用する前には一度燒くべし、其の燒き方は針金を藁にて包み、赤くなるまで燒きて、其の儘に冷却せしむ。決して水に投ずべからず。

●繪具の種類及用法

赤色染めに用ゆるものは、フロクシン。スカレット。ヨウシン。マセンダ。コンゴレット。ロウダミン。サフルニ。ワンピ。等なり。

青色は、グリン。アリザレブリウ。ミシリン。ブリウ。

紫色は、ビオレット。

黄色は、オウラミン。レモエルロウ。コットンエルロウ。シオウ。チヤコ。

鼠色は、カシドラバ。

總て繪具を溶解するには、何色に限らず、必微溫湯を以てすべし。先づ器に微溫湯を注ぎて、後に繪具を投じて混和すべし。

普通葉の色を染め出すには、微湯溫五合計の中にマセンダ五厘を投じて、能く溶かし、之にオウラミ三分を入れ、次にグリン一分五厘を混じて、染色す。されどもこれは概しての色なれど、種類に從ひて、或は薄く、或は濃く、務めて實物に近き樣に染め出すことを心懸くべきなり。

此の他種々花色の染め法は、次々其の條下に記載すべし。



だいどころ

サンドウィッチ製方

之れは多く、行厨に用ふる食物にして、旅行杯に携ふるには、最も輕便なり。先づ新しき「パン」を、縦二寸、巾一寸、厚さ二分位にきり、一人前、六片より、十片程、偶數になし、各片の、半面に、牛酪を薄く塗り、冷牛肉、又、冷火腿、を麪包と同じ大さにして、一分余の厚さにきり、切口へ、溶きたる芥子を塗り、之れをバタを塗りたる方に挾み、能く壓し附け、皿に布巾をたゝみて、敷き、此上に、三個或は五個を載せて、出すべし、又辨當に携ふるには「パン」の乾くを防ぐため「バタ」の間に「サラト」又は水芹を挾むも宜し。

輕便麪包の燒方

麪包を燒には先酵母を、造るべし。酵母を造る法、種々あれ共、最も簡易なるは、上白米壹合を軟き飯に炊き、冷し置きて之に麴壹合を掻き交せ、三時間程、ねかし置きて、醗酵せしめ、夫より鍋の中に、水三合と、律草五匁を投れ、蓋をせずに半分程に煑詰め、其の冷めぬ間に、米利堅粉二十匁を加へ、よく掻き交せ、又馬鈴薯十匁を、能く煠で、裏漉にかけ、其の冷めたる時、前の酵母をよく交せて、一時間程經たる頃、微温湯を注して、溶かし、能程の瓶に投れ、蓋をなし、麻糸にて搦り、温度六十度位の所にねかし置くべし。然すれば、混和物は、酒氣を發し、麪包を造くる酵母は出來るなり。

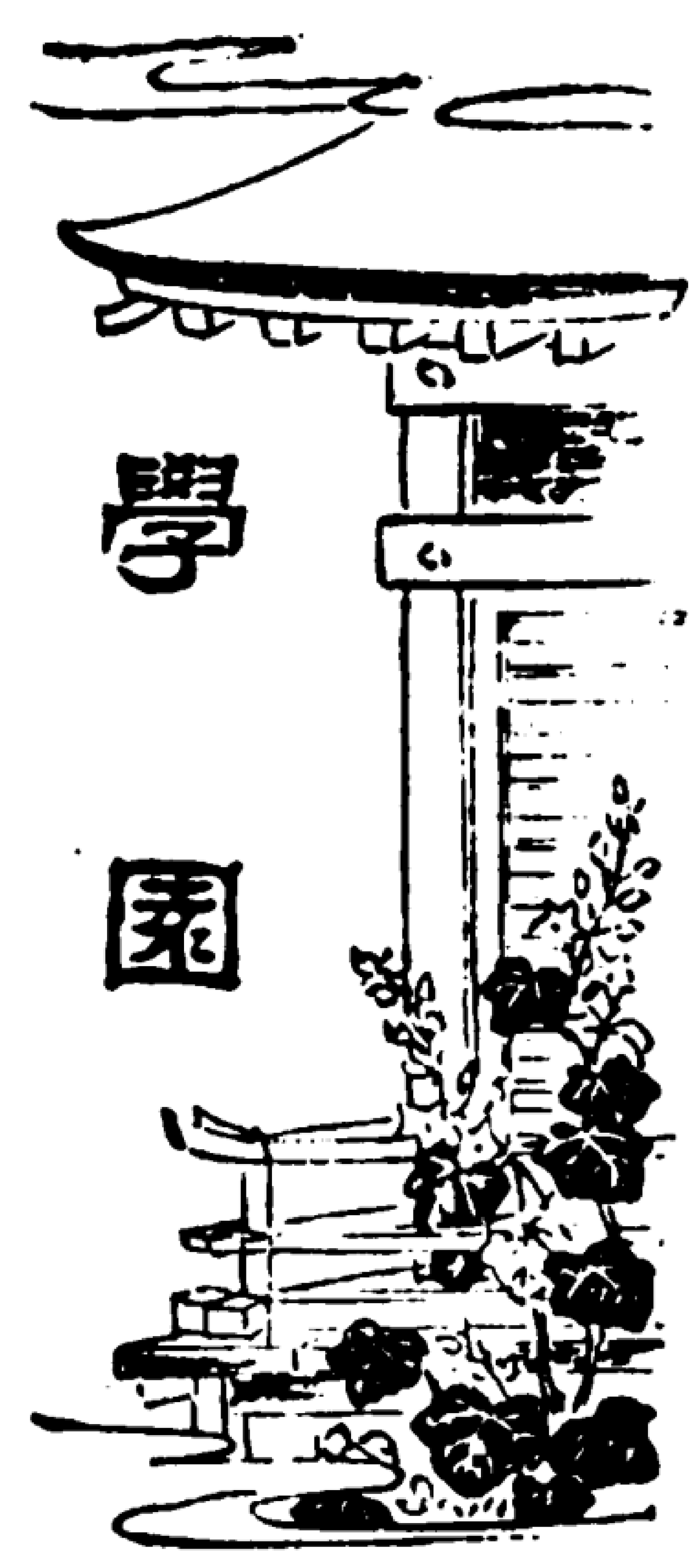
前の酵母にて、パン五斤を造るには、先づ酵母五夕を捏鉢にとり、微温湯一合を注ぎ、其中に食鹽三匁、

米利堅粉六百目とを投れ、かたけれど、能き程に、微温湯を注し、捏ね交せて、濕りたる布巾をかけ、之れを温度八十度位の處へ、二時間程、入れ置けど、酵母より酒氣を發して、ブツ〳〵と、泡立つなり。此の時を度とし、鉢を出し、捏直し、角、圓、何れにても、思ふまゝの形ちに拵へ、布巾をかけ、風のあたらぬ樣になし、「カマド」の火氣を強くして、此の中に入れ、十四五分間燒く時は、「パン」は熱度の爲に泡立ち、脹れて、燒上るなり。

前の燒方は、輕便法なれ共、酵母を造るは、面倒なる故酵母を造ると同時に「パン」を燒簡便なる法を左に記す。

米利堅粉一斤「イーストパウダー」(西洋食料店にあり)一匁五分と、少量の食鹽を加へ、能く混和し、別に「葎卒」五分を、水五六勺にてざつと煮出し、微温となりたるを待ち、前の粉の中に、少しづゝ投れて、十四五分間、能く捏ね交せ、思ふ儘の形に製し、暖爐に入れ、十分間程活火にて燒くべし。然すれど、充分ふくれて好き「パン」は出來るなり。若し菓子パンに、製るなれど、粉の中に能程の砂糖、牛乳を加へて燒けど味よき菓子「パン」となるなり。

それさなき草のかづらの上までも
秋は木の葉の色に出にけり



日本文典（十七）

鹽井正男

形容詞の語根（格にて申さば、假体の格なり）に、みといふ詞を添ふる時は、名詞のやうに用ふる事を得るといふ事を前號の末にいへり。なほ、その一例を示さば、伊勢物語なる歌に、

あさみこそ袖はひづらめ涙川
　身さへ流ると聞かばたのまむ

とあるあさみにて知るべし。

また、おなじく、みといふ詞を添へて、形容詞を副詞のやうに用ふることを得、例へば、おなじ伊勢物語の歌なる

うらわかみねよげに見ゆる若草を
　人の結ばむことをしぞ思ふ

また、古今集なる在原の行平朝臣の歌

春のきる霞の衣ぬきをうすみ
　山風にこそみだるべらなれ

おなじく讀人知らずの歌に、

すまの蜑に鹽やく煙風をいたみ
　思はぬ方にたなびきにけり。

などの「うらわかみ」「うすみ」「いたみ」にて知るべし。此の「うらわかみ」は「うらわかし」といふ形

容詞の語根「うらわか」の下に、みといふ詞を添へたるにて、其の意味は「うらわかさに」といふ意にて、副詞のやう成れるなり。また「ぬきをうすみ」の「うすみ」も「薄し」といふ形容詞の語根「うす」の下に、みを添へたるにて、其の意味は「薄さに」といふ意なり。やがて「横の糸が薄さに」といふ意なり。「風をいたみ」の「いたみ」も、「いたし」といふ形容詞の語根「いた」の下に、みを添へたるにて、其の意味は「いたさに」といふ意なり。やがて、「風の強さに」といふ意なり。なほ、一例を示さむ、古今集に、

宮城野のもとあらの小萩露を重み
風を待つごと君をこそまて

とある重みにて知るべし。

形容詞は、また、語根（格にていはゞ、假体の格）

のまゝにて、体言の上に來り、其の体言を形容するを得。例へば、万葉集の歌に、

天地のいづれの神に祈らばか
うつくし母にまたこととはむ

とある「うつくし母」の如し。「うつくし」は、形容詞にて、母といふ詞を形容したるにて、「うつくしき母」といふ意なり。其の他にも、高山（たかやま）、細川（ほそかは）、うれし涙などいふは、皆、形容詞が、語根のまゝにて、體言につき、體言を形容したる例なり。文章の係結の上にても、形容詞は、動詞と同じさまなり。やがて形容詞を以て文意を結ばむには、通例一段の係辭をうくる時には、終止の格を用ひて結ぶ。例へば、「花はよし」、「月もおもしろし」などいふ如し。また、第二段の係辭をうけたる時は、連體の格にて結ぶ。例へば、「花ぞよき」、「月や

おもしろき」などいふ如し。また、第三段の係辭をうけたる時は、已然の格にて結ぶ。例へば、花こそよけれ」、「月こそおもしろけれ」などいふにて知るべし。一段、二段、三段の係辭といふことは、動詞の所にいひたれば、こゝには新しういはず。なほ、此の形容詞の結びにつきて、古書の例をあぐれば、清少納言の枕草紙は、極めて、これを知るにたよりよし。

晝の御坐のかたに御膳まゐる、足音高し。

方違にゆきたるに、饗應せぬ所、まして、節分は、すさまず。

物語などするに、さし出でゝ、我ひとり才まくるもの、すべて、さし出は、童も大人も、いとにくし。

三ッぞかりなるちごのねれびれて、うちしはぶきたるけはひも、うつくし。

男しうなどわろくいふ、いとわろし。

七月ぞかり、いみじくあつければ、よろづの所あけながら、夜もあかすに、月のころは、寢起きて見出すも、いとをかし。闇も又をかし。

これ等は、は或はもなどいふ係辭をうけたる時、及び別に係辭たる助辭の無き時にて、皆終止の格にて結びたるを見よ

雑色隨身は細やかなる。よき男も、猶わかきほどは、さるかたなるぞよき。

これは、第二段の係辭ぞ。をうけたる例にて、よきはよしといふ形容詞の連體の格なり。なん或はや、か、などいふ助辭をうくるも同じことなり。

第三段の係辭こそをうけたる時は、

宮仕する人をだ、あは〳〵しうわろきことに思ひ居たる男こそ、いとにくけれ。かたさり山こそ、誰に所おきけるにかと、をかしけれ。

なは、昔より、さまよく着たるころ、よけれ。

なは、枕草紙をひもとかれよ、こと〴〵しくあぐるまでもあらじ。

か丶る係結の有様は、通例のものにて、なは、まれまれには、この法則にはづる丶事もあれど、それらのことは、後に詳しく係結の事取り出で丶いふ時あらむ。

助動詞

助動詞は、其の負はせる名稱にても、かつ〴〵は、其の性質を知るべく、他の類の詞を助けて、種々の意をあらはすべき詞にて、他の類の詞とは、名詞、動詞、形容詞、副詞などにて、この類なる詞の下におきて、これを助けて、いろ〳〵の意をあらはすべき詞なり。また、他の類の詞のみにあらず、おなじ助動詞なる詞をも助くることあるなり。例へば、

上野は公園なり　　書を讀むべし
花は散るらむ　　花は錦の如し
昨日江島に行きたり　　風さむきなり
これにて皆なり　　江島を見たりけり

などいふ時のなり、べし、らん、如し、たり、けり、などいふやうなる類にて、もと一種の動詞の如きものなれども、これのみ獨立しては、文に話にあらはる丶事能はず、必ず他の語につきてあらはる丶詞なり。

助動詞は、大抵は、其の語尾の變化するものなり。やがて、活動するものなり。されど、まれ〳〵には、

語尾の變化せぬものもあり。而して、其の語尾の變化するさまにも、さながら動詞に似たるあれど、また、形容詞に似たるもあり。されど、助動詞は左の圖の如き種類に分つべし。

- 助動詞
  - 語尾の活動せぬもの
  - 語尾の活動するもの
    - 動詞の活動に似たる
    - 形容詞の活動に似たる

かくの如き三種あるべし。これは、形の上の區別にて、なほ進みて、他の詞につきて、いろ〳〵の意をならはす上より見る時は、やがて、助動詞の性質より見る時は、なほ幾多の區別ある如し。それをかたはしより順序に取り出でゝ、部類を分ち、さて其の部類の中なるものを、また、かたはしより活動のさま及び性質用法等につきて、かい記しゆかむ。

つたへなき
ことはしるべき
よしもなし
しられぬことは
しらずてをあらむ



漫録

またぬ青葉

故人　香川景樹

彌生十二日。夜のあけんとする時に息はひきとりぬ。歸來て臥したるまゝに、ものも覺えず。雨いみじう降りて河音高くなりゆくに、やう〳〵人心つけるも、初夜過ぐる頃なり。輿めくものひそかにかきいづる音なひすめるは、彼の亡骸を東塢亭におくりかへすなりけり。男女殘りなくそひゆくべし。いざといへど頓には得たちあがるべうもあらねど、後れてもはひいづ。風いとあらゝかならず吹き、雨はなほこきたれてふるは、涙と打ぬらすに、いとゞ空をふみて歩むとだに覺えず。家に來て見れど常ある所に、白きものかづきてうちふせり。

打とけて寢たる姿に見ゆれどもなかき眠はさめやしつらん。顔のきぬとりて、そと打まもるほど、昔をかけてわきくる涙ものに似ず。

いにしへの色もにほひもなきからになほ咲く花はおもひなりけり。さて明渡るしのゝめ、更に此世ならんや。

十三日。そのからをさへに今日はひつきにをさめんといひさわぐ。一の箱にものはひめおきぬ。失せなん後にてと言置きつるを思出でて、ともにやるべき

もの、もしやとひらき見る。大方はものゝをり〳〵、此年月の間、かきかはしたる文や歌やありけり。いとゞかきくれて、見るべうもあらねばさしおく。暮すぐる頃ほひ彼のをさめんとにや、ひしめく音聞ゆめり。いとゞむねは板になりたるに釘ひし〳〵と打立つる心地す。死出のはれぎにとて、きぬ樣のものは此頃着換へあらためて、殊の外むさげになどはあらじ。さはいへ、かげろふのやせこけたるを如何はする。手足も折れんずるをと思ふに、身も痛しや。とばかりありて今はをさめはてまゐらせぬ。今一目まみえたまへといふに、立渡りて臨むほど、更に物も覺えず。大きなるひつぎの中に物におしつゝまれて、額際ものしたるおしろいに、いと若やぎて、黒髮かいおろし、ひゝなのかほつきして、よそげにぞそばみたる、さてしもさて得あらねば、やをら手かけて打向ふに氷とのみひえきりたるや。熱き涙にたまぎりて、先づ我から消えぬべし。限あれば退きて拜伏す。すなはち人々蓋おほひして、ちやんとかいふ物ぬりこめんとす。

立かへり如何に見んとかしたふらんこの世をだにも隔てしものを。

としへなば忘れんと思ふくやしさの涙さへこそ先立ちにけれ。常によみならひし觀音經數珠ともに入れたるは、なほかの世にても讀誦し奉れとや。此一卷はつゝみこめたる服紗ながら、形見と殘しとめて、あした夕ぬかのをり〳〵、ながくものすべう思ひおきてしものをなど、とりかへさまほしうをしきものにさへおもひかへすも罪深し。

とゞめえずやりし此世のかなしさにかたみをだにと惑ふなりけり。

十四日。今夜葬すべしとて、さる方のいそぎに集ふ人多かり。埋む所しめ去たゝめて、ひつきにおはせて堀らすべう、右將監もとのぶ熊谷なほよしなどまかなふめり。寺は二條の川東に在りて、大炊道場とよぶ。遠つみれやより去ぞくの塚まで杉生の一かゝみにものして、我家の墓所と定む。今や其かきちも所狹ければやがて後の竹むらきりひろげて、所とすといふ。さてよめるとか、なほよし、

なき人のすみかとすれど呉竹の
　ちとせの風もかひなかりけり。

又法名とてかいつけれてせたる、遠つさき〴〵の法にもたがひ、文字の上さへ去ぞろなれど、れのれこれを改めて、觀水生一蓮上となづく。さるは水想觀のこゝろによりて、一蓮托生の契をさへ思込めにたるは、我から果敢なき心地すれど、今はにかけし言の葉の露を何かは欺くべき。

玉とありておまかけるとも蓮葉の
　上に心はむすびとめん。

我大納言の君(徳大寺實堅卿)の御使をはじめ奉り、なほ高きみわたりより、賤しきはまで、疎き親しきわたり〴〵、くやみつどひ來る音なひ、いみじうまが〳〵しきに、雨さへ降しめりて、うもれたる今日の空なり。いとくらうなりゆくまに〳〵、とき來りぬとて、門の外よりはな〴〵家のれくまで、ともしつらねたる火影こと〴〵しう、上下立こみて、俄にぞはしりはわぐ。たきたつる香の煙いみじう薫じ渡る中に、年ごろ見ぬ顔さへ多く立まじりつゝ、今更かひつくりがちに、かなしと思ひしみたる樣など、なき人出でゝふと見ましなど、如何にかなどさへ、あやしうれもひかへしなげく。すべて〳〵今夜の事あまりに

いまはしう、まことは物も覺らねど、みなもらしぬ。さて今はといふにおぼろなる松かげにおりて、をがみおくりたる、夢の樣にて此世の心地もなし。

如何なれど淺茅が原にゆく人の
露なるわれを殘しおくらん　（未完）

貝原先生息女の返書

小塚ぎろ子

女の一たび嫁ぎて、後に不和離婚などの世にきこゆめるは、さま〴〵のたねあることとなるべけれども、おほくは婦たる道にくらくして、その心がまへのたらぬが故なるべし。されど、舅姑につかへ、夫にしたがひ、親戚のゆきかひ、より婢僕のあつかひまで、深く心を用ゐて、かりそめにも、人に後指さゝるゝが如きふるまひあるべからざるべし。今こゝに記せる貝原先生文をやりて、息女をいましめられしに、息女そのかへしせられしといふなる文なり。

（編者いふ、貝原先生の娘へのさとし狀といへるは、さきに女鑑第九十三號漫錄欄にのせたりき、即この折のものなり、參へ合すべし）

息女の返書

こま〳〵との御文ありがたく拜し參らせ候、誠や破鏡ふたゝび照さず、落花ゑだに歸らずと、兼々御教訓片ときも忘れ申さず候、女たるもの、嫁き候て、いかでか二心をさしはさみ、父母の恩にはぶれ、その御もと樣の御敎に背き恥を一門に殘し候はんや。火を踐み、水に入とも、ふたゝび古鄕の土と成こゝろはさら〳〵おはしまさず候。恐れながら御心易くおはし召下されたく候。譬舅姑つらくとも、子は子たる道を盡し、夫義なくとも、

妻は妻たる道をまもること、かねての御示し忘れ申さず候。いはんや舅姑に愛の道あり。夫に禮の正しき事これある上は、わが心は鐵石の如くにれはしまし候。常々御はなしにもうけ給り參らせ候。古の貞女孝婦、漢土にては、戰國の衛姫、河南の樂羊子が妻、孝女曹娥、南宋の趙昴がつま、我朝にては、日本武尊の皇妃橘姫、狹手が妻の佐代姫、紀のあり常が娘、源の亘か妻、正成の室、竹岡の尼、大和の義婦、大内義たか朝臣の簾中、其外和漢に名を殘したまひし賢女烈婦のあとをまなび候はゞ、誠にれはけなき申やうとも、れぱし召させ候はんと存參らせ候へども、志は其思ひをいだき參らせ候。脩樣申上參らせ候ては思召も耻しく候へども、行末の事をも、御めぐみいたゞき有がたさのまゝ、聊御心を休めたてまつらんと存上參らせ候。のみつたなき言の葉、書つらねまゐらせ候。なほ幾久しく替らせられざる御惠みのほどひたすらねがひ上參らせ候。

目出度かしこ。

かゝる心得をもて事へなば、などて破鏡のかこちあるべき、息女の返書よくよく玩味すべき事にぞある。

老人致戒のうた

こさん

暑しといひ、寒しといひ、春は花に遊び、秋は月にうかるれども、人の一生は白駒の隙を過るが如く、青年いつしか、白髮の老翁と化して、過去をかへり見れば、泣くべきことと哭すべきことのみ多かるべし。我々は笑ひて興すべき今日にはあらじかし。我祖父尾張の人、横井孫右衛門（半佛庵と號す）ある人と

交りたり。横井氏祖父が七十七歳なるとき、同氏も七十の老人なりけれど、互に老後の戒となさんと、左の老人敎戒の歌を贈られたり。歌句はいやしけれども、よく老人の狀態をうつし出せり。今これを女鑑によせて、一は笑の種となし、一は少年老易く、他年鏡に對して、昔時の紅顏を慕ふ悔なからんがための戒となすになん。

しわがよる、ほくろは出來る、脊はかゞむ、あたまははげる、毛はしろくなる。

　此の句の見ぐるしかるを知るべし。

手はふるふ、あしはよろつく、歯はぬける、みゝはきこえず、目はうとくなる、

　此の句の敷ならぬを知るべし。

よだれたらす、目汁をたらす、鼻たらす、とりはづしては、小便をする、

　これ人のむさがるを知るべし。

又しても、おなじ噺に、まごじまん、達者じまんに、若きしやれごと、

　此の句の片腹いたきを思ふべし。

くどうなる、氣みじかになる、愚痴になる、こゝはひがむ、身はふるうなる、

　此れ人の嘲を知るべし。

身にそふは、頭巾襟まき、つゑ目がね、たんぽをんじやく、しびむまごのて、

　かゝる身の上を辨まへずして、

聞たがる、死ともながる、さびしがる、でしやばりたがる、世話やきたがる、

　此を誠に姿見として、己が老たる程をかへ（原文のまゝ）りみずよろしからず。然らど、何を苦しか

らずして、ゆるすぞといふ。よひねわさね、ひるね物くさ、ものわすれ、はれこそなけれ、世にたゝぬ身は、

れきの玉藻（十二）

永石徳文

下人のあつかひかた

下人などのあやまちも、度毎にはいましむべからず。短慮なる人は、見のがし、聞のがしなきゆゑに、かへりて物ごとやぶれ多し。鈍成ものゝする事は一々わが氣にあひがたし。わざともせざる事なれど、かんにんすべき事なり。わが氣にれうずるものに千人の内にも稀なるべし。わが心さへよく思へど、わが氣には入がたし。をしへにしたがはざる者をつよくなほさんとすれど、あたをなす事あり。才智發明なることのならば、わづかの給分にて奉公いたさんや。扨又よく勤むる下人ならば、それぐ\に恩をほどこすべし。その心付なき時は、必ず忠節倦もの也。惣じて賞をあつくし、罰をゆるくすべし。といへり。心得有べし。（子孫寶草）

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

利口を以て下愚のものをかすむるは、天理にそむけり。惡き事はわが身にれひて、諸天の照覽をふさぐゆゑ。わざはひれてりて、つひには其の身はろぶるもの也。日月はあきらかなれども、まがりたる空の中をてらし給はず。又穢惡の水にてもすめど、かげをうつし給ふ也。心のにごりをすたしく、天道にかなふ身と成べし。歌に、

ふしをがむやしろの内は月なきや
心の水のすめどうつろふ

心は源なり。行は末なり。心の源にごりなば、などてか、行の末流の清むべけんや。にごりたる心に思ひたちて、さてけがれたる行にいたさんに萬のことみな、行きちかひ、禍身に及ひて、遂に世にたちかたきにも至りぬべし。心のにごれる行のきたなきは、世の人みな之を忌む。つゝしまざるべからず。心たに清からず、萬の理よく見えて、過もすくなかるべし。

詩と歌との難易

もろこしの詩、この國の歌深奥なる事がどりはあるまし。詩はつくりよけれど、うたはよみがたしといへる人あり。是はさることあるべし。歌は此の國の言葉なれど、かくよみては歌にはあらぬといふ事。よするものも、又見るものも、其のればねあれど、詩をもろこしのことなれど、そこ／＼に作りても、大方きこゆるほどなれど、その身もよしとおもひ、見る人もたへなりとほめはやすより。詩はつくりやすきといふなり。もしも、もろこし人、此の國の歌よむ事あらど、歌はよみやすけれど、詩を作りがたしといふべし。詩を作りやすきといへるは、詩をしらぬ人のことど、うたはよみやすきといへるは、歌のしらぬ人の言葉なるべし。いづれかたやすき事ならんや。文つくる事もまたこれにおなじ。

もとゝすゑと

此の國にかなといふものなくは、ひと／＼文字をしるべきにといへる人あり。これはおもはざることとはなるべし。もろこしの文字西域の梵字から國の諺文、此の國のかな、其の外韃靼紅夷のことど。それ／＼

其の國のことばに應じ、たれはじむるともなく、をうなわべ、下々までこをもちふ。まことに自然のことわりに出たり。かなといふものなくぞ、といへるは、其の國〳〵のことばなくぞ、といへるにひとしかるべし。

詩文は言の精華

もろこしのことばしらずしては、詩作り文かく事なるまじ、ともろこしことばまなべる人は、必いへるを、もろこしのことばしりたる人の詩文を見るに、さまでかはりたる事なけれど、と、またある人のいへる、これはみなそのひとかたのみをしれることばなるべし。詩文は言葉の精華なるものなれど、言葉をしらずして、いかでか精華をもとむべき。此の國の言葉しらぬもろこし人、歌よむといはゞ、をかしき事とおもふなるべし。されど詩文をよくせぬもろこし人いかほどもあれど、もろこしことばしりたるとて、詩文をよくすべきにもあらず。まことの詩文といへるは、もろこしの言葉しりて、しかも才學すぐれたる安倍のなにかし、釋空海などいへる人々にてはぢがはすくなかるべけれ。それがしもろこしことすこしはまなびたれど、詩作り文かく事はしらざるゆゑ、それがしのつたなきを見て、もろこしことばすてたまふなど、同志の人にはつねにかたりき。

（たはこくさ）

荒木田麗女著述目錄

荒木田麗女の傳は、さきに女鑑第百七號史談欄にみえたれど、今はいはず、さてその著書目錄を得たれど、更にこゝにかゝげぬ。傳記と參し見給は

むゝ、さらにをかしからんかし。

わ、ま、

明和七年寅冬

元就辨

豐臣辨

池藻屑　十四卷　從明和八年卯正月一日至二月十五日成

桐の葉　五卷　從同年三月二日至四月二十日成

小手卷　二卷　從同年七月七日至十三日成

狩馬鳥　三卷　從同年七月十五日至廿八日成

月行方　三卷　從同年八月七日至十五日成

花湖　二卷　從同年八月廿五日至九月二日成

岩橋　二局　從同年九月三日至八日成

眞砂一名篠灘　同　從同年九月十三日至十九日成

五葉　五卷　從同年九月廿日至廿八日成

夕使　二局　從同年九月廿九日至

花立枝　三局　從同年十月七日至廿日成

若葉　二局　從同年十月下旬至十一月上旬成

藤鞭　二局　從同年十一月

山の井　三十局　從同年十二月至同九年辰二月上旬成

同後　四卷　從同年三月一日至二十日成

桂河一名桂中將　二局　從同年三月廿三日至二十日成

濱千鳥　三卷　從同年六月下旬至廿五日成

安達原　三卷　從同年八月二十日至廿五日成

れるとも井　一局　從同年八月廿五日至廿九日成

松風　二局　從同年九月一日至六月成

竹園　二卷　從同年九月七日至十五日成

同後　同　從同年九月十六日至廿二日

常陸帶　二局　從同年九月廿二日至廿八日成

遊仙窟　二局　從同年十一月

又名　狩使　桃源　風藤

同後　野中清水　同

水尾	一巻	從安永年二巳三月十一日 至十八日成
祇火山	三巻	從同年三月廿三日 至閏三月二日成
かりね中納言	二巻	從同年閏三月十日 至十六日成
手枕	二局	從同年四月二日 至廿八日成
梅宴	二巻	從同年五月十日 至十七日成
笠舍	五十五局	從同年五月廿二日 至同三年午正月廿六日成
春かざし	二巻	從同二月二月二十一日 至廿七日成
二本杉	同	從同年二月廿八日 至三月二日成
桃園生	二巻	從同年三月三日 至六日成
楢柴	三巻	從同年四月四日 至十三日成
さゝ竹	九巻	從同年四月十七日 至五月八日成
常盤	七局	從同年十一月十五日 至廿九日成
冬木梅	二局	從同四年未六月十二日 至十九日成
斧柄	二局	從同年午六月十二日 至十九日成
結絶橋	同	從同年九月廿五日 至十月四日成
武藏鐙　山井餘興	二局	從同年十二月七日 至十五日成
岩代	三局	從同五年申六月
ひをり	二局	從同年四月上旬
夏雨夜	同	從同年四月廿日 至廿六日成
槇の戸ざし	同	從同年六月廿七日 至七月三日成
水調	三巻	從六月酉九月
狹衣	二局	從仝年十二月
夏露	一局	
木曾路	一局	
冬の氷	同	
喜多山	同	
怪世語	十六巻	

一巻　藍田　紀の路
二巻　小豆澤の蛩
三巻　羅浮　浮世山
四巻　八十瀬　芥川
五巻　寫繪　近江
六巻　燈火　何某院
七巻　戻瀬　葛城
八巻　伏見　越路
九巻　八街　濡衣

十巻 飛頭蠻 立田山　十一巻 空蟬 評　十二巻 糸遊 春の夜
十三巻 橋柱 笠取　十四巻 朝の螢 秋の霜　十五巻 波枕 天の川
目錄　引抄共十六巻
此の外に和文集　發句集　詠草　游行記文
連歌集　數十集あり。
(此著述目錄は神田竹堂所藏於燈下書 寫天保三年
辰九月二十日　馭巫花押)

雨月物語

故人　上田秋成

白峰（二）

院長嘘をつかせ給ひ、今事を正して罪をとふ、ことわりなきにあらず。されどいかにせん、この島に謫れて、高遠が松山の家に困められ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まゐりつかふる者もなし。只天とぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けど、都にや行くらんとなつかしく、暁の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。烏の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねど、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとゞめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを洛の中に入させ給へと、仁和寺の御室の許へ。經にそへてよみておくりける。

濱千鳥跡はみやこにかよへども
　身は松山に音をのみぞ鳴く

しかるに少納言信西がはからひとして、若呪咀の心にやと奏じけるより、そがまゝにかへされしぞうらみあれ(る歟)いにしへより倭漢土ともに、國をあらそひて兄弟敵となりし例は珍しからねど、罪深き事

かなと思ふより、悪心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にもたがひて、筆の跡だも納給はぬ叡慮こそ、今は舊しき讐なるかな。所詮此經を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定て。指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈てし後は、人にも見えず深く閉こもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出きぬる。まづ信頼が高き位を望む驕慢の心をさそふ(う歟)て義朝をかたらはしむ。かの義朝こそ惡き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕ために命を捨しに。他一人朕に弓を引。爲朝が勇猛、爲義忠政が軍配に贏目を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出しより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ、或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困められしなり。これが報ひを虎狼の心に障化して、信頼が隱謀にかたらはせしかど。地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐討る。且父の爲義を弑せし報偪りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は、常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬこれをさそふ(う歟)て信頼義朝が讐となせしかど　終に家をすてゝ宇治山の坑に竄れしを、はた探し獲られて六條河原に梟首らる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。これがあまり應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を祟りて、朕も其の秋世をさりしかど、猶嗔火熾にして盡ざるまゝに、終に大魔王となりて、三百余類の巨魁となる。朕けんぞくのなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治るを見ては亂を發さ

しむ。只清盛が人果大にして、親族氏族こと〴〵く高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず。汝見よ。平氏も又久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ふべきぞと。御聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ。君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔給へばふたゝびいはじとて、只默してむかひ居たりける。時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を偃すがごとく、沙石を空に卷上る。見る〳〵一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあきらかなり。光の中につらつら御氣色を見たてまつるに、朱をそゝぎたる龍顏に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊あげ、熱き嘘をくるしげにつかせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生のびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて相摸〳〵と呼せ給ふ。あと答へて、鳶のごとくの化鳥翔來り、前に伏て詔をまつ。院かの化鳥にむかひ給ひ、何ぞはやく重盛が命を奪て、雅仁清盛をくるしめざる。化鳥こたへていふ。上皇の幸福いまだ盡ず。重盛が忠信ちかづきがたし。今より支干一周を待ば、重盛が命數既に盡なん。他死せば一族の幸福此時に亡べし。院手を拍て悦ばせ給ひ、かの讐敵こと〴〵く此前の海に盡すべしと、御聲谷峯に響て凄じさいふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て涙しのぶに堪へず。復び一首の歌に隨緣のこゝろをすゝめたてまつる。

よしや君昔の玉の床とても
かゝらんのちは何にかはせん

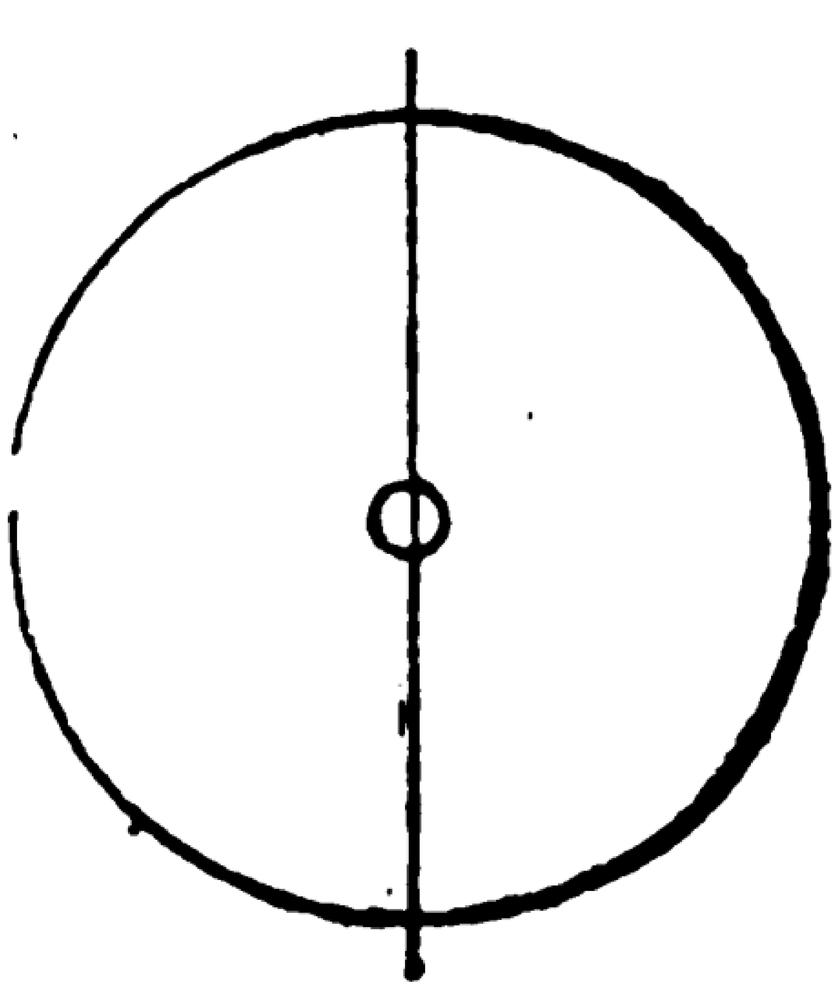
刹利も須陀もかはらぬものをと、心あまりて高らか

に吟ける。此ことばを聞しめして感させ給ふやうなりしが、御面も和らぎ、院火もやゝうすく消ゆくほどに、つひに龍体もかきけちたるごとく見えずなれば、化鳥もいづち去けん路もなく、十日あまりの月は峰にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふが如し。ほどなくいなのめの明ゆく空に、朝鳥の聲おもしろく鳴わたれば、かさねて金剛經一巻を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閑に終夜のことゞもを思ひ出るに、平治の亂よりはじめて、人々の消息、年月のたがひなければ、深く愼みて人にもかたり出ず。其後十三年を經て治承三年の秋、平の重盛病に係りて世を逝ぬれば、平相國入道、君をうらみて鳥羽の離宮に籠たてまつり。かさねて福原の茅の宮に困めたてまつる。頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらふ(ひ歟)で出るに及び、平氏の一門ことごとく西の海に漂ひ。遂に讃岐の海志戸八島にいたりて、武きつはものどもおほく鼇魚のはらに葬られ、赤間が關檀の浦にせまりて、幼主海に入らせたまへば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしくあやしき話柄なりけり。其後御廟は玉もて雕り、丹青を彩りなして、稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必幣をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし。

紋帳圖式綱目（二）

井上賴文寄贈

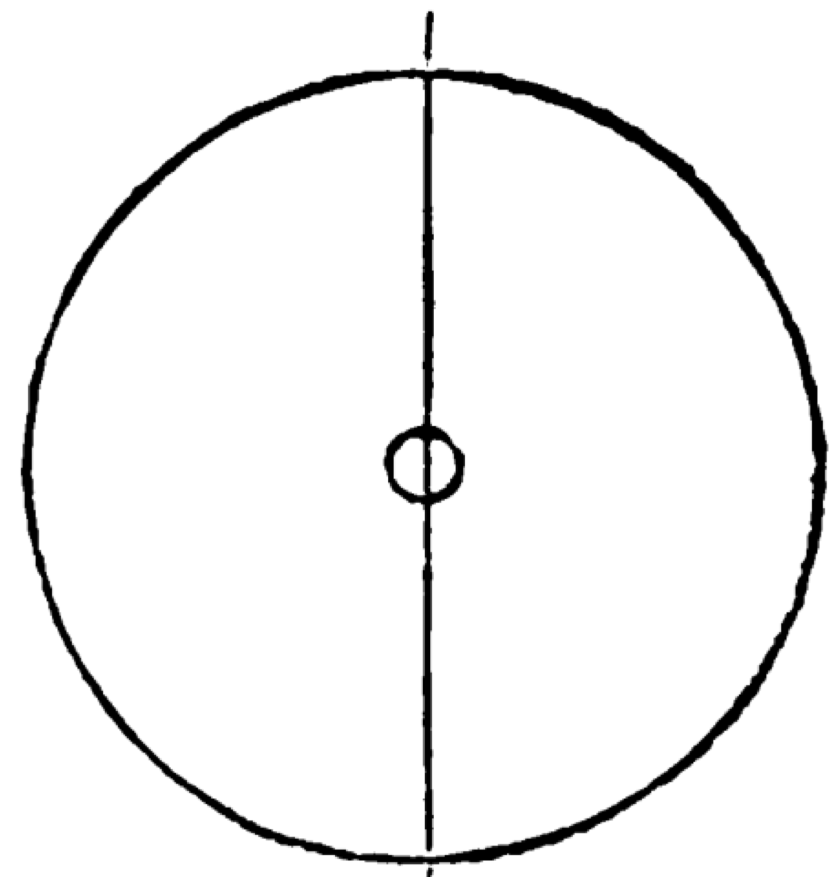
一つ物



上羽の蝶
鶴の丸の類

其外作り物の類、割にはよらず。たとへば丸なき紋にても、ぶんまはしを用ゆ。丸の内一ばいに書べし

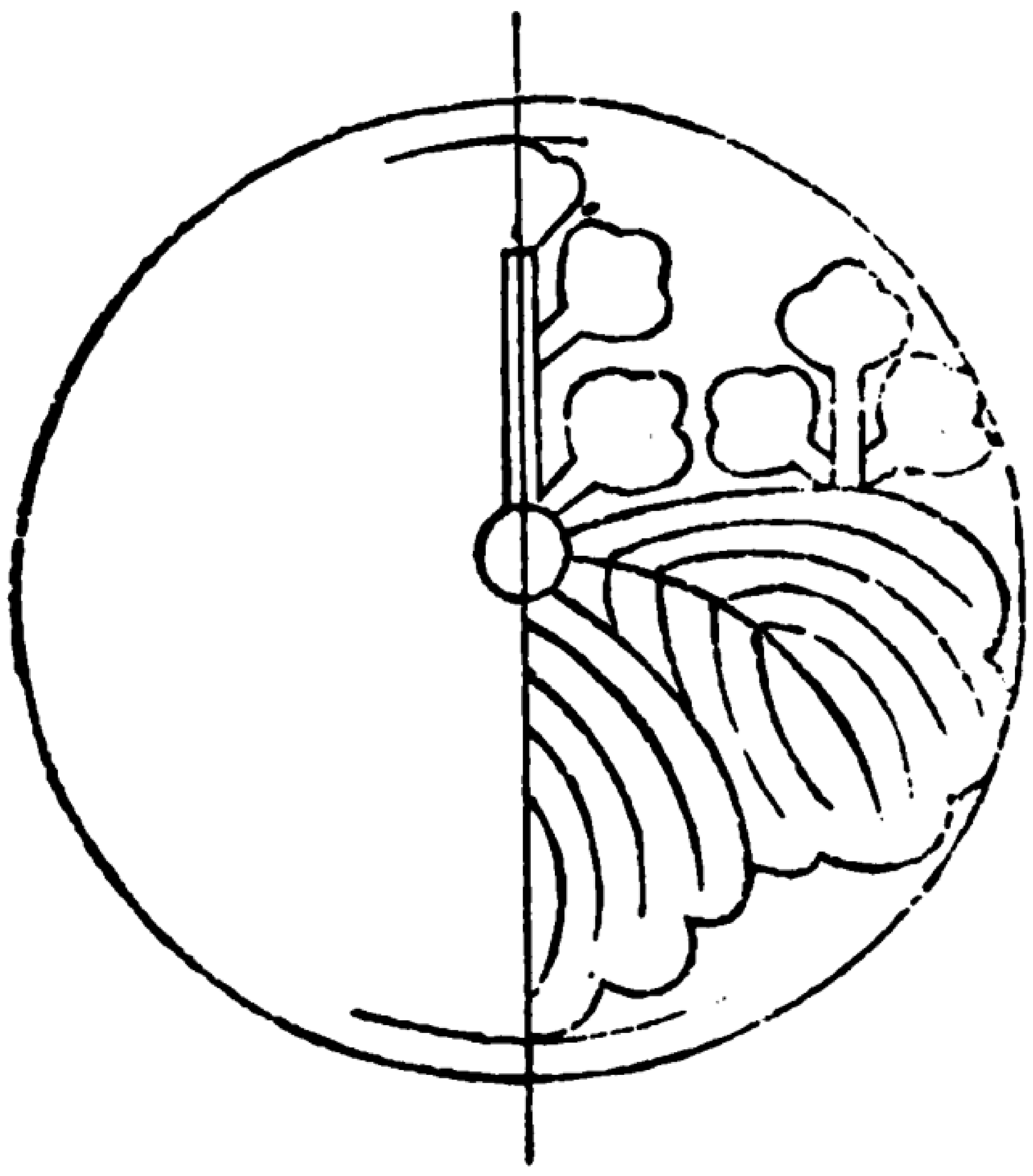
二ッ物　但しだき合物



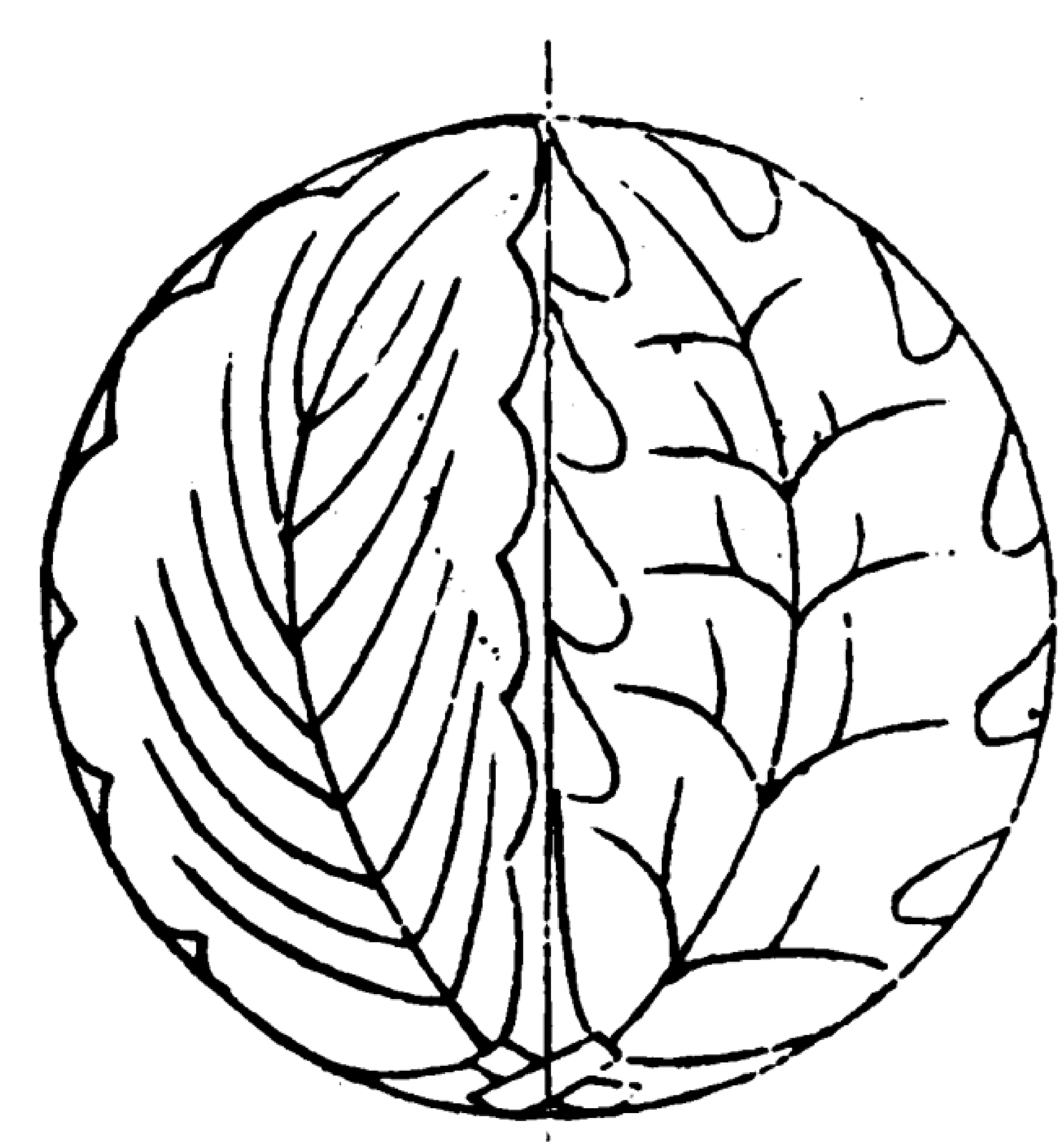
たきつの



だきぎやうねふ



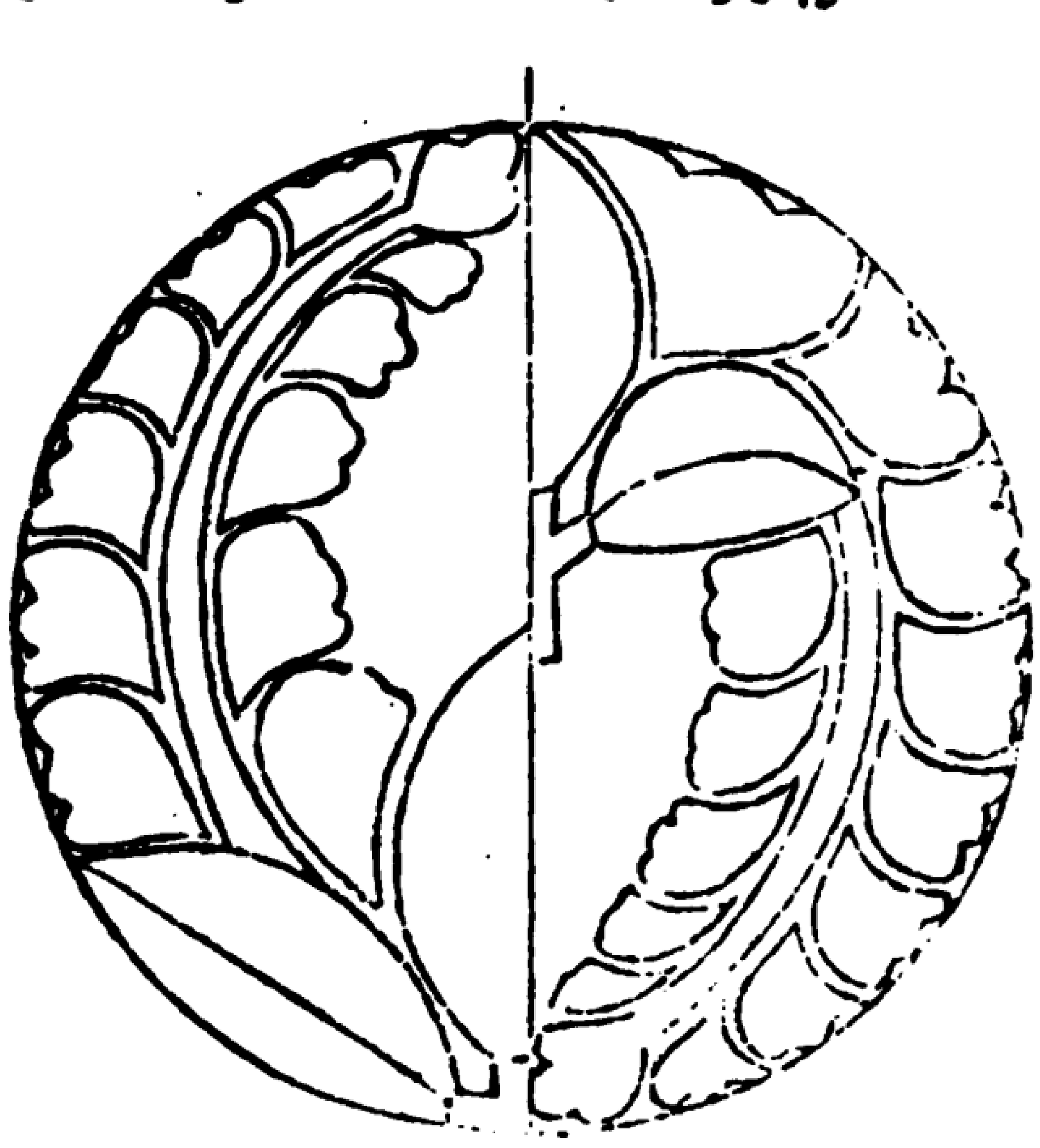
五三の桐



だきひらき
たきかしは

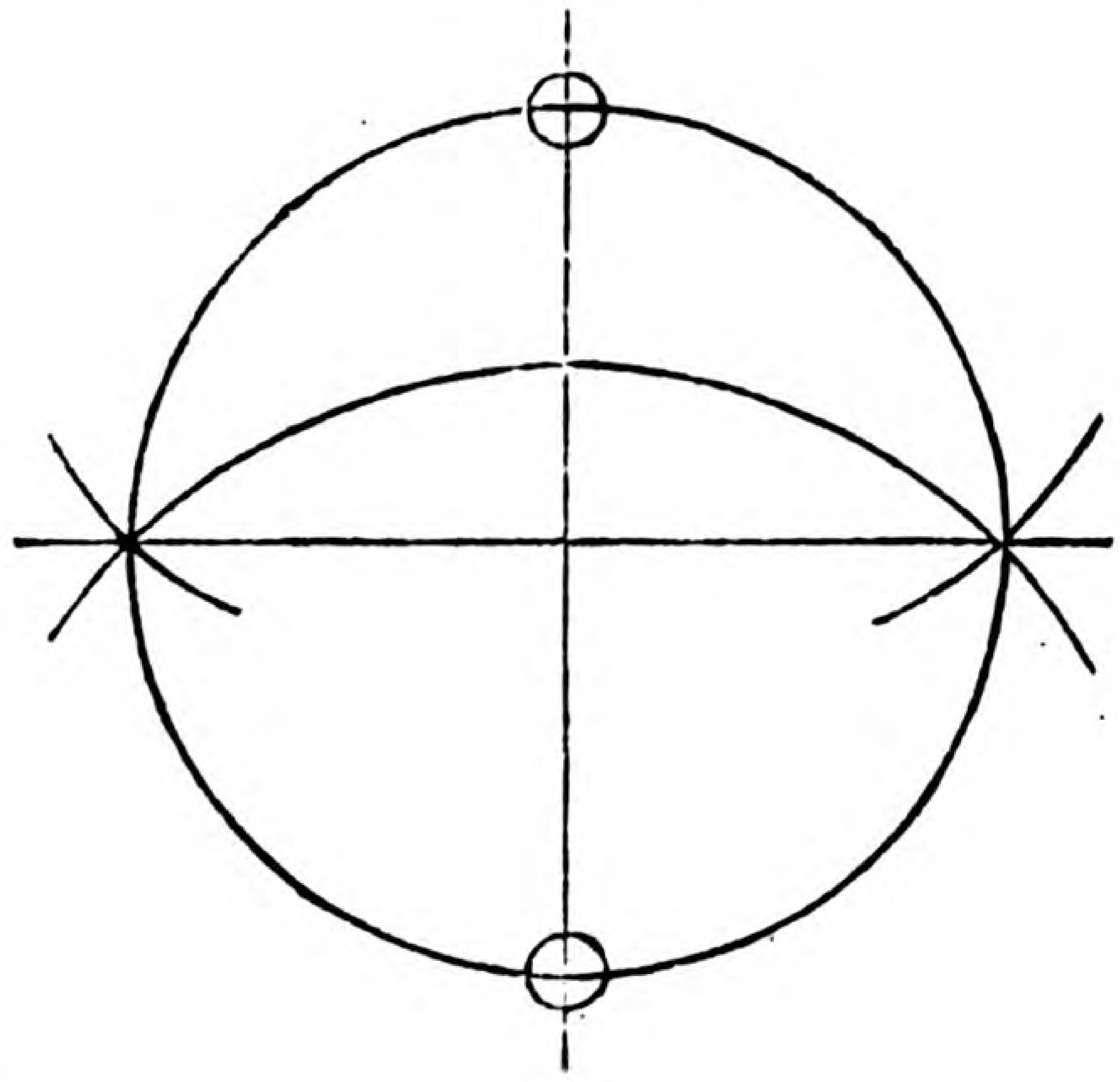
右の類は割なし。まづ紙に中すぢを引、そのすぢの眞中へ分廻しのはりを建て、丸を廻すべし。圖のごとくひら木にても柏にても、紋の半ぶんを書てすぢより紙

下り藤の丸

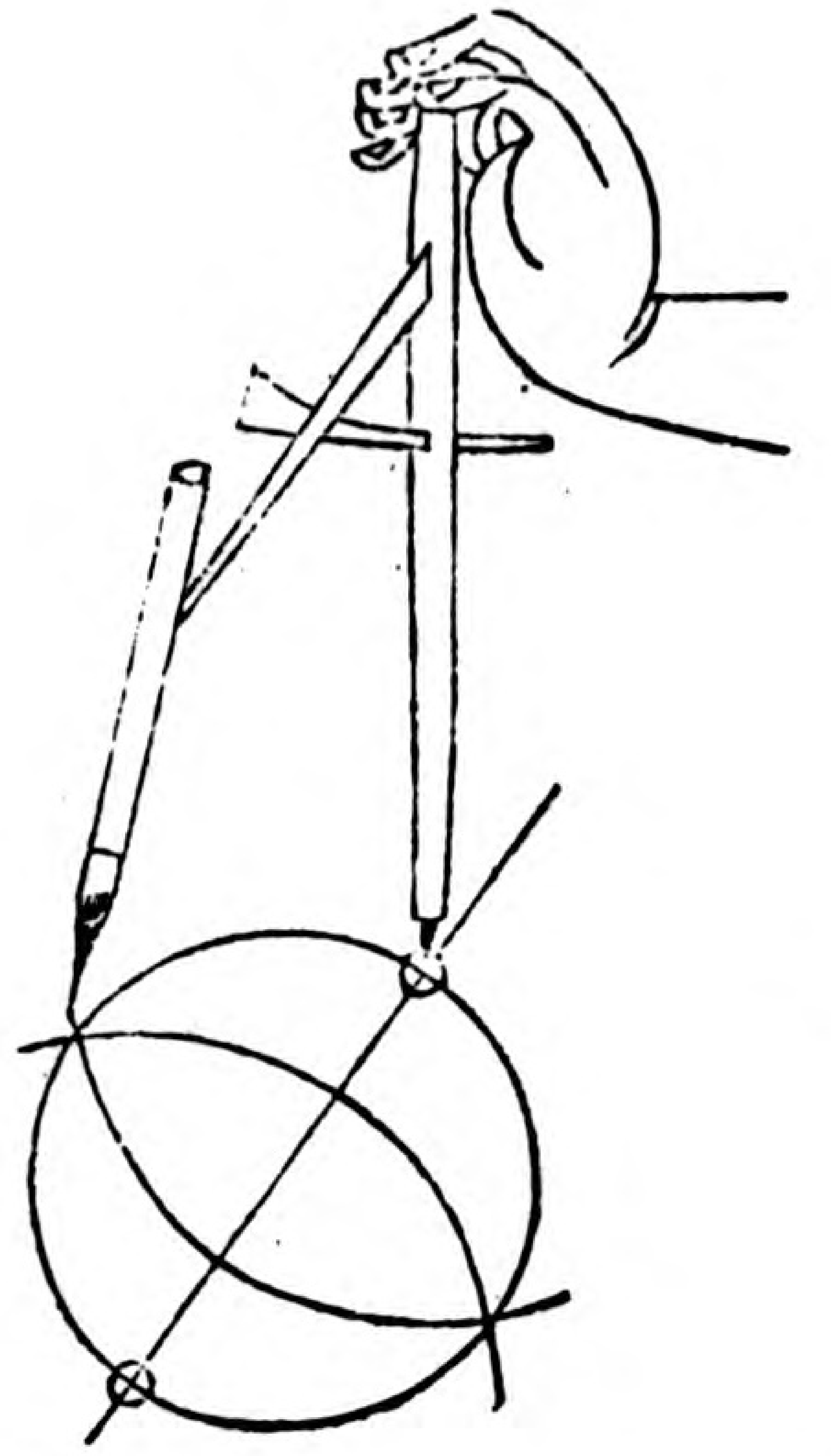


上り藤の丸

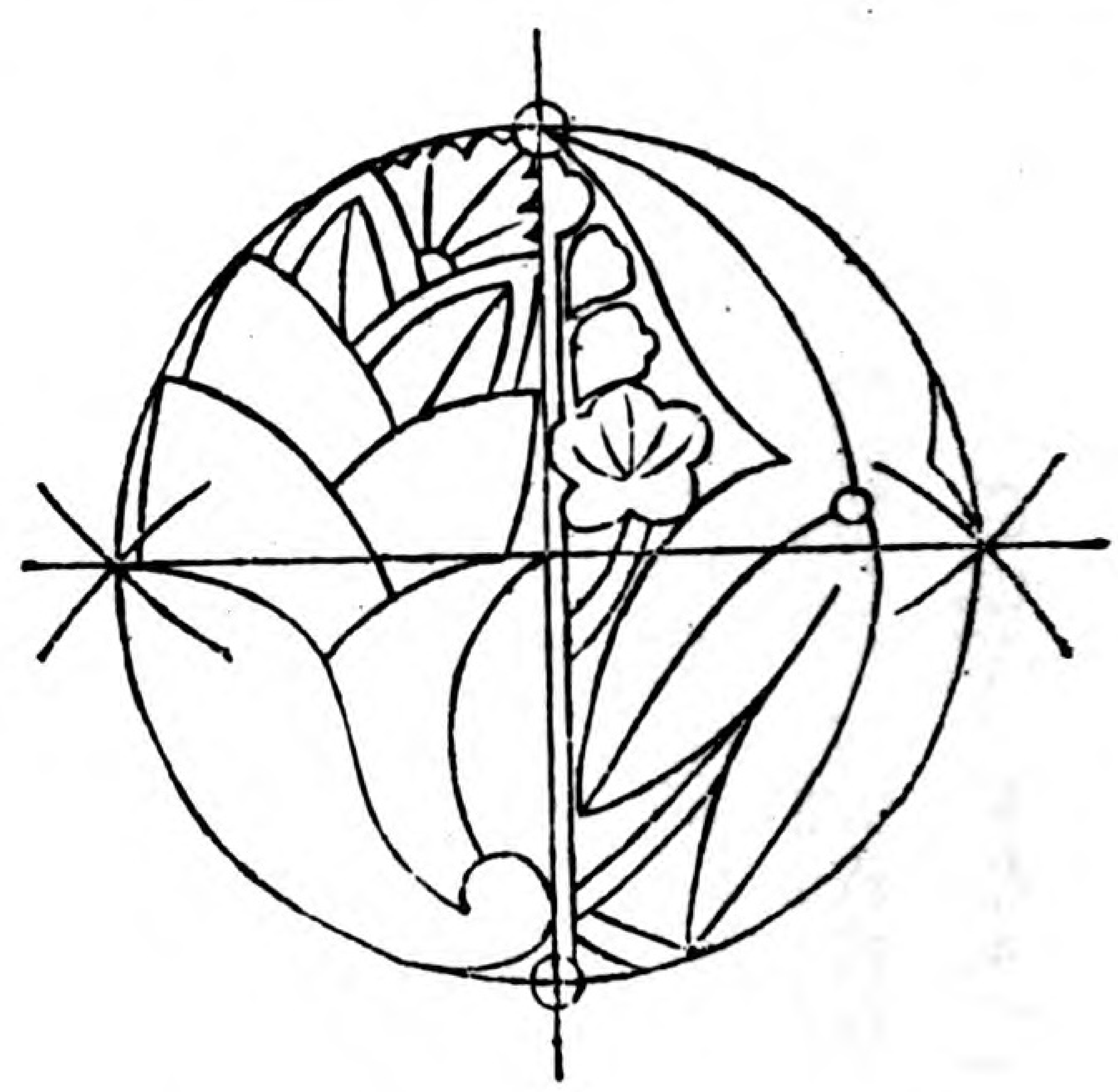
を折一方を敷寫しにすべし。紋所圖のごとき類は恰好よく定まるなり。



二ッ物。但し四割の方

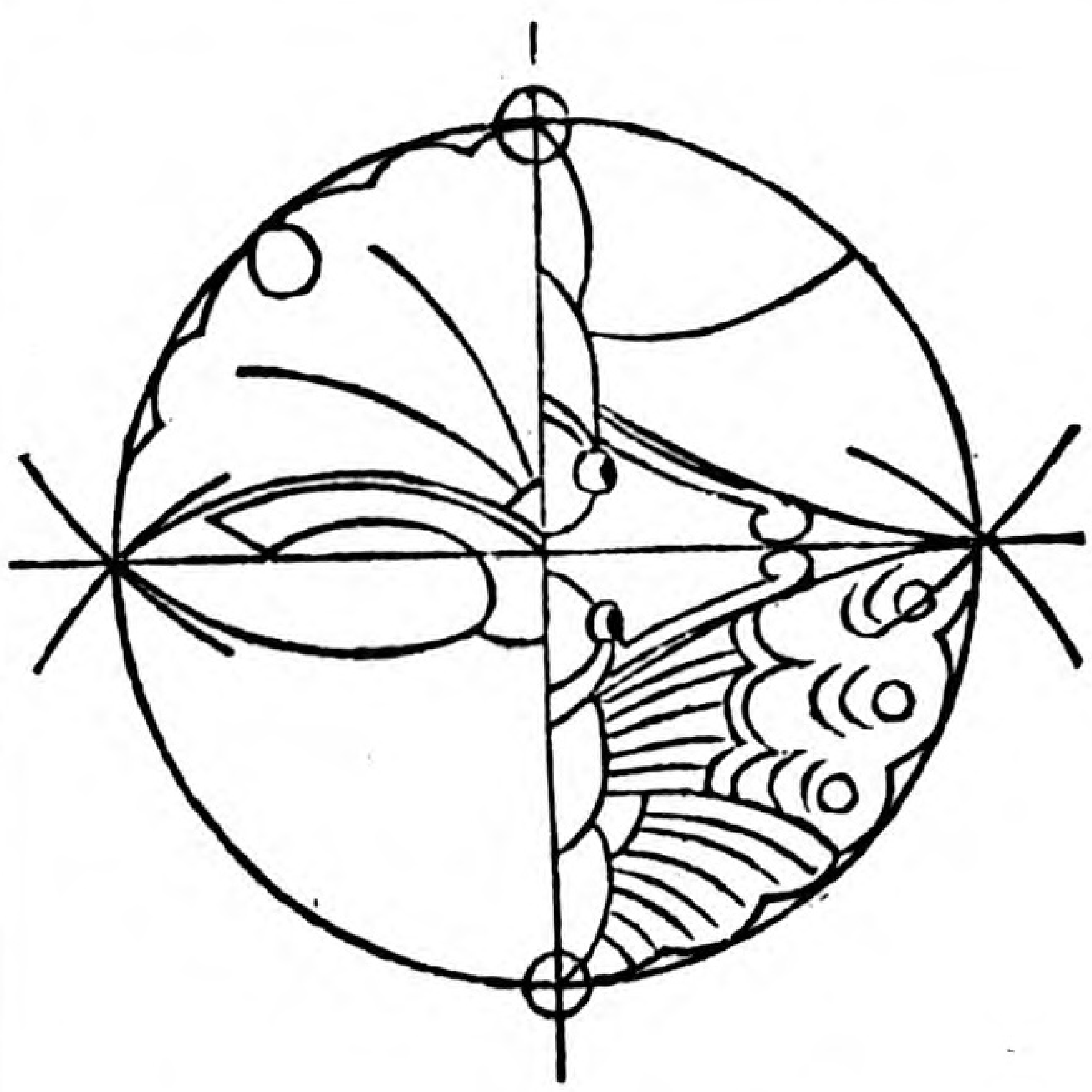


是はぶんまはしをすこしのぞし、見合すべし



だきれもたか

だきみやうが



むかひ蝶

むかひいてふ

右の類は上下にても、横にてもかくのごとく、割付べし。猶圖に知るゝ通りなり。上より分廻しそつかふべし。紋の通り。

宇津山記　　宗長

駿河國、宗津の山は、齋藤加賀守安元（今川被官）しる所より、十七八町川につきてくだる。さながら鈴鹿の關こゑし心地ぞする。丸子といふ里、家五六十軒京鎌倉の旅宿あるべし。市あり。北にやゝ入て、泉谷といふ。安元先祖よりの宿所、奥ふかき禪寶願勝院、流あり門前にながれ、たゝめるいははなめらかにして、松杉さし入より、心すむべく見ゆ。左の岨に觀音の靈像、行基菩薩の御作とかいひつたへぬ。此上にも瀧音して堂の前にみなぎりおつ。大なる嶺よこたはりて、谷のふところひろく、鳥の聲かすかに、猿梢にさけぶ。曉閑居のね覺たゑがたし。予はやうはたちばかりの程より、こゝに心をとめしに、や十とせのさき、十とせあまり太守（今川氏親于時修理大夫）此山うち（文明年陰山西）におくらせたまひ、國の人あつまりきゐて、所せかりして、家五六十間とぞ見えし、むかしの國府をあらためかへり給のちは、たゞ山がつやうの賤屋のみなり。卅餘年のあなたより、都のかたはらにして、こゝかしこ田舍にも行かよひ、こしのしらねもたびたびこゑて、越後守護殿（上杉安房守房定）つのにはすむ能勢因幡守頼則（攝津源氏細川被官）三河國牧野古白（今橋城主）といひし陰者、さては京ちかき人のあさけにて、れのづから小野の炭、小原の薪ともしからずぞありし。西國人も宗祇同宿して、大内左京兆（多々良政弘）のあたりのにも、一とせむかりありて、そのついで豐浦

神宮皇后の宮、赤間が關隼人のわたりして、宇佐の社、安樂寺狼嶽(大悲閣師関山)崇福寺にまゐりて、木丸殿めき丶の名のりは、たゞ面影にして、いきの松むら、博多の津、箱崎の松、海の中道をも見て、松浦の渚のこりればはくぞかへりのぼり侍り。このくににくだりて、後都みだれいできて、住こし草庵も焼にしかむ、のぼりくだりのみして、匠作ちかき居をかまへ、春の草木、秋の木草もとめ、うべ池ひろく水ゆかたにして、夏冬ふべき八木のめぐみゑげく、朝暮のけぶりたゑず。活計のあまり、又心とゞして、とまらず。永正はじめの比、此山家すまゝはしくて、安元にかたらふ。いとやすき事なとわりし。其春三月はじめに、安元奥行に

山ざくら思ふ色そふかすみかな

山家のねがひ、かつ心行やうにればねて、みねのかすみ、山のたゝずまひも、いとゝもにはされ侍心なるべし。卯月むかりに所をみたてゝ、かたのやうに草庵をむすびしなり。上に賢見庵といふ。此所ひさしき庵なるべし。其夏の五月に、

いく若葉はやしはじめの園の竹

竹をうゑかきこもること、杣かたのはやしはしめのよせもありや。此山のつたかへでうべ、茂らせ、自愛し侍るがをりしも一折に、

蔦かへでみる／＼ゑげる軒端かな

落葉にてしげりしをみる作意、艶にもたくみにも侍るかな。時雨にきはひし名殘ぬれて、かへりみがちになど、後ぞきこゑし。又の年の正月に、

うぐひすや香にめづる人宿のひめ

ことゝふ人なき春の述懐に、鶯を賞し侍り。後にはつくしの果て、あづまのれくの人もたよりにつ

けて尋來りしなり。飛鳥井の少將殿も富士の雪のついでたちより、蔦の歌など、よみおかせ給ひけるとぞ。其頃は京都の事にて、無念にもこそ、宗祇十三回のことも、此山家にしていとなみ、千句の追善第一の御發句、一讀廿首の題、御詠前内府西殿（逍遙院）より申請一座かたのごとくにてぞ侍し。又國府に住こし家あらしがたくて、しば〳〵ありて、白河の關みに思ひたち侍しに、

安元奥行

風にみよいまかへりこん蔦葉かな

武藏野の花のかぎり、露のゆくへわけつくし、しもつけの國黒髮山のふもと、宇津の宮までくだりしに、なすの殿原矛楯合戰の最中ねとならず。遺恨すくなからず。（那須高資芳賀カタラヒニヨリ喜連川女坂ニテ宇都尚綱ト合戰）

音にのみきゝてをかへる秋の風
吹だにおくれ白かはの關

時しもなか月のはじめなり。霞ととものたびの空いかなりけん。むろのやしまのあたりにて、

木ずゑのみむらだつ霧のあしたかな

これより上野國新田の靜喜（治部大輔尚綱入道）の閑居にして

かり衣きりやふきはす伊香保風

又むさし野のあたりかへりのぼるに、旅宿にてふと奥行に、

冬枯やかやる下葉の秋の風

此旅のそらにても發句あまた侍しなり。れとゝしの春しなのゝ國、木曾の三坂をこえ、越前國に尋しるべき僧ましますに、行て七八九ありて、十月はじめに、若狹路には路やう〳〵ゆきをしのぎて、霜月に紫野眞珠庵に罷上り着ぬ。一日二日ありて、前内府（西實隆）連歌のめしありて、御發句

まちてしや花にもみぢに今朝の雪

宗祇朝夕まゐりかよひしあごりとや、とは田舍まで御ふみたび〴〵下されし、まして京都のことにては身にあまり侍ることのみ。そのとしいまの公方樣（將軍義尹）三條の昔の跡あらためつくりみがゝせ給ひて、御うつり（永正十年移新殿）しはすとぞきこえし。東洞院万里小路西洞院大宮上一條のれはち、ひとつ內野と荒はて丶、（應仁王後）二條はしらなみ（盜人）のたぢと水の上藥師さして、人れぢれそれしも所もあくつくりつゝけ、さてもかゝる代にもあふものにやと、あやしのくぢ〴〵めでたがりいふめりし、室町わたりにて、

所せき家〴〵の雪の軒端かな

日をへだてず連歌のみにて、年も暮ぬ、正月六日北野の會所奧行に

あさがすみさゆる空なきひかりかな

御詠のよせむかりにや、元三尺、後のれ仕、等持寺門前、惠玄寺殿、左右輿をならべ、馬をひかへ、三條坊門、東洞院、三條河原まで男女の物見、雲霞のやうに、みな人かたりし、六角室町にて、連歌ありしついでに、若菜の出仕を見物せしに、人のいひしにかはらず。けふの發句に、

今朝の雪み山しらるゝわかなかな

十五日、過て有間の湯にくだる。芥川の城にして、勢能因幡守（源賴則）奧行に、

うちなびきいづこかのこる春もなし

夢庵左人、（牡丹花）出給ひ、玄清宗碩くだりて、よにめづらしく、おもしろくこそ侍りつれ。又千句あり。發句、

さくらさく春かせかをる柳かな

あしやの灘わたりにても、連歌ありし二月廿四日、

京に出て、廿五日、右京兆(細川高國)佳例の千句けふはじめて罷出しなり。

九重の春はかすみの色香かな

中御門殿(宣胤卿)にして、

百千鳥さへづる花の雲井かな

禁裏ちかき御宿所なるべし。うちつゞき上しもの所所、連歌ありて、やう〳〵まかりくだるべきのあらましに、右京兆御發句一座

かへる雁おもへみやこのはなざかり

面目にもこそ侍れ。朝倉太郎右衛門、敦景、敦賀の津にして、むかへの馬人ぐしにくだりて、氣比の明神をりふし宮作に、

山びこも宮木引くるかすみかな

おなじ國の府より人所望に、

うちはふく風やこゝろあひ郭公

時鳥心あひのかせにや、廿日ばかりして、かへりのぼりぬ。海津の旅宿奥行

ねにかへる花やしら波夏のうみ

比良のふもとなり。ひえにのぼりて、横川の一音院にして、

ふかきかひ山ぞありあけほとゝぎす

又京にての會の中に

むはたまのよだゝ音するくひな哉

前内府へ見せたてまつりし、御稱美の御ふみありしかも、書加へぬ。五月はとかくして、六月四日に右京兆亭(高國)泉殿にして、一日に二百句の連歌に、

影すゝし空にいづみの夕月夜

夜ふけ、酒はてゝぞまかりかへりし。五日にくだり侍るとて、まゐりしに、をりふし手にならし竹團扇をたぶ。御歌あり。

九重を春のうちはと契りれく
言葉の花も今よりぞ待

御返しとて、たび〳〵になりて、

老ぬともわはんとぞ思ふ行かへり
君か言葉の花と春とに

ことにふれ折につけたる、ねんごろの御ことのみ、老のゝちのおもひ出、筆かぎりあれど、つくしかたし。六日は綾の小路室町ある人の家にして、七日にはすでにくだり侍る。送にとて、たの〳〵のなさけもたせて、竹田鳥羽まて、きはひあつまり、名殘をしみし。いまゝね覺のわすれがたみなるべし。鳥羽に一日連歌。

日もすぎしゆふだち雲の大江山

さしむかひの山にや、山城新酬忍庵 燒香 申四日五日ありて、木津のわたりして、奥福寺ある坊に十日餘り發句四五。

坂こゑてすゝしくならの木陰かな　（未完）

鹽原見やげ（一）

草の家主人

鹽原の出湯がへり、都へもたらすべきつとをといはど、さま〳〵に作り搆へたる木工細もあらむ。いろいろにをかしげなる石もあらむ。されど、心深からむ友どちへの見やげに、はかなき木ぎれ板くづをかりは、なか〳〵に、くちをしからむ。あやしき石くれぞかりも、また。

いでや、旅路のくま、かりねの宿、見もし聞きもせしことにより、うれしくも、悲しくも、愛しくも、嫉くも、ゆかしくも、腹立しくもればえたることの限りを書きつらねて、年來うらあく語りあふ孃だちに

見せまゐらせむ、鹽原がへりの見やげにとて。おのれが出湯へと思ひ立ちたるは、ふみ月のつごもりばかりなりけり。日ごろわづらはしき腦の、夏さりて、いやましなやましく、いねが苦しむ夜さへ多かれど、山光水色淸きわたりに心のどけき朝夕をと、父母も敎へたまへど、妹も勸め、友さへいふに、さらば風景うるはしきときけど、鹽原へととみに思ひ立てるなりけり、旅衣の袖輕く吹きかへす朝風に、人車を飛ばせて、忍が岡の裾なる停車場に急ぎ着けば、はや山とむらがり、潮とよせかへす走屍行肉、何事が、忙はしげに、あはたゞしげに、かけさやぎ、のゝしり狂ふさま、ものすごきまでにおぼゆ。けうとき鈴の鳴り響きて、乘車すべき人々を呼び立つるや、われ勝ちになりて、狹き入口を爭ひ、高きは、低きをふみ越え、大なるは小さきを押しのけ、强きは弱きをかいとごして、老いたるがよろめきかゝるをも顧みず、幼きものゝ泣きわめくをも知らず、われさきにと爭ひ入り、疾く入りたるはいと得意貌に、遲れたるを笑ひあざけるなどさへある。あまりにあさましくみだりなるふるまひや。さても、東洋に禮義の國ありとさへ稱へられたる國民の子孫なるを。此のうろたへ急ぐ人々。それには、なつかしき父母の爲めに心せかれてもあらむ。戀ひしき妻子ゆゑに歸へり急ぐもあらむ。さては、親しき友の待つらむに、行さき急ぐもあるべく、さては、また、商の道いとなみの道ゆゑに、遲れじものと急ぐもあるべし。或は、何の爲め、或は、くれゆゑにと、うろたへ急ぐゆゑよしは、いづれもあらむ。されど、汽車は、人々を待つらむ時を有てり、人々を待ちて、しづかに出づべき時を有てるものを、あまりに見ぐるしく

あさましきうろたへざまや。さても、西洋の强國をものともせず、いさみ進んで一拉に取り拉がむとさへ心がくる國民なるを。

おのれは、どよ〳〵と漲り狂ふ人浪に、押し流さるゝやうに、とある汽車にたどりつき、うち乗らむとすれば、はやくも乗れる男ありて、此處には、もはや乗れぬといふ。されど、車には、その男の伴れたらむ一少年の外には、たゞその男の影のみ。誰もなし、何も見えず。え乗れじとも思はねば、家族を助けてうち乗れば、その男、顔を醜げにしかめ、口を憎げにとがらせて、はやく閉ぢね、戸を、早く閉ぢね。

開け置きては、なほ人の入り込めばといふ。いかなる邪險の心ろ。われ一人りの車にもあらぬに。あきあらば、よびても乗せやるべきを。いかなかりなる人面獸心の怪物ぞ。うち見れば、あやしげなる四足動物風の衣服着けたるも、をかし。（未完）

東京二十四景

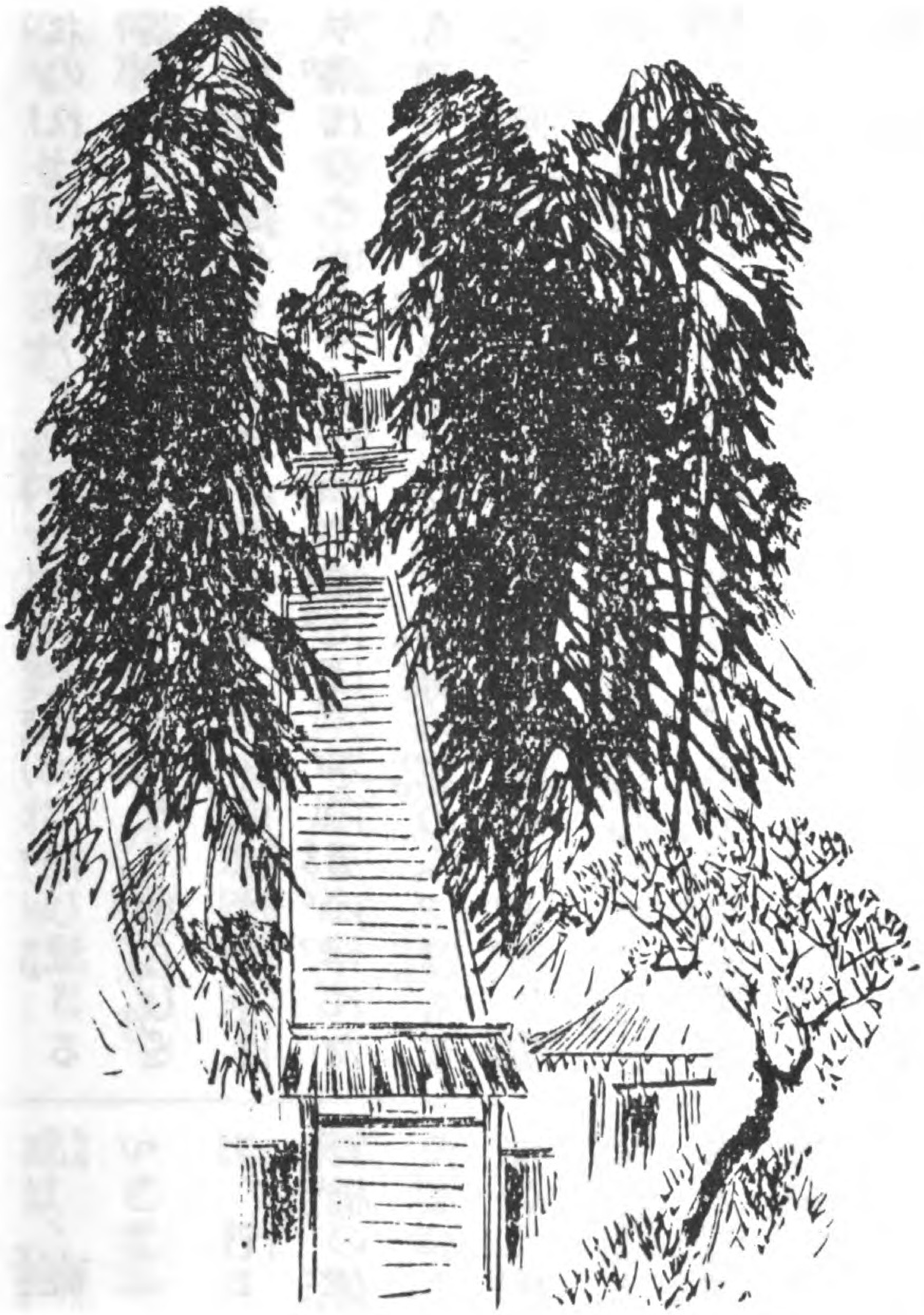
菊の屋女史

池上本門寺

新橋の停車場より、蒸汽の車をたのまば、黑烟一抹、たなびくと見る間に、いつしか大森の停車場に着くべく、其處より下りて、なほ西南ざまに二十四五町、徒歩よりするも、わづかに半時ばかりにて、池上村なる長榮山本門寺といふにこそ行け。

御寺は、彼の世にとゞろきたる日蓮上人の開きたるものにて、甲州なる身延山は總州の正中山とを合はせて、法華宗の寺々多きが中の三山とも稱せらるゝものにて、日蓮上人の廟あれば、眞骨堂もあり。仁

王門の峙つあれど、五層の塔の聳ゆるあり。本堂の廣やかなるあれど、釋迦堂のゆかしげなるもあり。



それ見めぐるのみも、さどかりの見物はあらむ。

山は高きにあらねも、幾十段の石階をのぼるべき丘陵にして、麓には、近く青葉うるはしき田園に、舞ふが如きしづの女の袖をもながむべく、遠くは、緑なす海原に、招くが如き白帆の影をもはの見るべく、箱根あたりの山々も、霞がくれにたなびきて見わたさるゝあなたには、雲居に高く富士の峰をも仰ぎ見るけしきは、げにはてもなきながめなり。木立ものふりて、鳥の鳴く音しづかに、やさしげにそよふく風に、袖はらはせて、獨り徘徊すれど いつか心もしづまりて現ながら天上にものぼり、樂土にも入りたる心地す。

山の東ざまの裾に、鑛泉の湧き出るありて、これをあたゝめて温泉となし、光明館曙樓などいふ浴舍さへあり。歸へり路に立ち寄りて、ゆあみ

しゆかしも面白かるべく、遠きをいとふ都の人たちが避暑には、こよなき處ならむ。

死不還

石榑千亦

敵が守護にあらむ限の力を盡せる山海關、東洋第一の要害をもて名に高き、天津はいでわが腕のためし處、わが精神を世界に示すべき處、待ちにまちにし御親兵の技倆今ぞ示さむ、旅順口金州城の捷の譽も二の町となさむ時は來りぬと、全軍いさみいさみて、出たちし近衛師團は、かしこくも宮殿下をいたゞき奉り朝日をおひて、すゝみ入りましけむ、古の皇軍にも劣らざらむと、われ人ともに心ひそかにほこりぬ、道すがら勇みておくる國人の萬歳呼ぶ聲も耳には入らず、戈を枕にまどろめど、夢ははやくもさきがけで攻入る敵の北京城、富士川の鐵橋わたるとては、水禽の羽音におそれて迯げにし弱將の怯をわらひ。名古屋城を仰ぎては、轉々名將の古をしのぶ。京都ときくもむづかしや、こゝも昔はあだどものすみかとなりて、かけまくはかしこかれども、天日嗣とまし〳〵て、一天萬乘の君とまし〳〵ながら、いばらからたち奥ふかきあら山中、黒木の宮の雨露に大み袖をぬらされ給ひしこと幾年にまし〳〵ぞ、あはれ世はなどかくしも道なかりけむ、臣民はそをよそにのみ見しかどおもへど、今も憤ろしと、髪逆だち眥さくるほどに、神戸といへど、しばし休はむ暇ありといふに、車をおりて直に湊川神社に詣でぬ、水は涸れても清き其の名は千代に流れてつきせぬに、われも末の雫をくまむ身なれど、いとゞなつかしくて、立たまくをしき心地すれど、限あれど又乘

うつるに、車ははやくも動ぎはじめて、吉備をすぐるに、糸崎の鼻遠く見えわたりぬ、彼處は神功皇后の三韓を征め給はむとて、大御船にのらしていでたたせ、給ひし處ときくまも尊しや、あはれ廣島にてたゞ銃を磨き刀をふりつゝ、髀肉の歎をなしゝことそも〳〵幾日なりけむ、宇品をたちて、波風をしのぎ、心つくしの海もすぎ、むちうちてわがせめ入らむとまの灘の名もをかしや、おもへば昔元寇のわが國にせめ入りしは、そもこの船路なりしが。同じわたりを天地霄壤地位をかへて攻められつる國民がけふはせめ入るその本城、あゝおもしろやめぐるうき世の波濤はげに大洋のそれよりも高く大なりなど、千々の思に感慨するほどに大連灣に船はてぬ。いでこれよりと、心の駒ははやくも四百余州をかけめぐれり。

吾には一人の友あり、まことに一人の友あり。國を同じくし、郡も村も一つにせしのみか、年も月も一つに生れし竹馬の友、美濃部利助。おもへば小學校に入りしも、仝じ年にして、又同じ年に業を卒へ、教導團にても共に〳〵學を修め、軍曹の辭令うけしも、同日の仝刻にして、今亦遠く幾千里の外國にまで、陸道船路を同じうしつ。あゝ思へば吾と彼とはいかなる契かありけむ。大方の世を離れずさかれず、幾朝の同じ竈の物を食ひ、幾宵か同じ衾の暖に眠りぬる。他より見れば枝を連ねしにはあらじかと疑ひ、甚しきは、双生兒にはあらじかとまで思ふもあらむ。あゝこれそも〳〵いかなるすぐせぞやされどこれをしもすぐせといはゞなほ、すぐせのいみじきものあり、あゝすぐせか、何ぞ天はかゝるすぐせを吾に與へ、又彼に下しけむ。生れて早く年は二十

一となり、月は二百五十にあまりぬる間、大かた一日も傍去りしことなく、われは彼の影にあらずは、彼はわが影といふが如くなりしも、しかも國郡村生れし年月學校職務衣食の同じきによりて、同じからず、あやしきまでに反對なるは二人の心なり。彼は右といへど、われは必左し、われ東せむといへど、彼は常に西せむといふ。さていつまでも堅くとりて動かず、わが大隊幾何の人の中にも、彼ばかり吾に異なる心もたるはあらじ、彼もまたしか思へるならむされど吾はこたび遠征し來りし人の中に第一嫌なるは彼なり。あゝ吾は何故にかくまで、彼の嫌なるならむ。しかも嫌なりと思へど、なほ彼のいふこと耳に入り彼のすることと目につけり。あゝ吾は何故にかの嫌なる男と衣食を共にせねばならぬならむ。あゝこれいかなるすぐせ。これをしもすぐせなりといはずして、何をか然りといはむ。

休戰の條約もこゝにわづかの日をのこしぬ。これよりと勇みたちし中にも、われ斗うれしくいさみたちしはなかりしならむ。そをいかにといふにこゝに止まることながくなるにつけては、何事もなすことなくたゞ、終日終夜無聊に苦しむこと長くなりなむ。無聊に苦しむ吾ひと共に同じ。されどなほ思ひなはすこともあれど、何より嫌なるに、かの義濃部と終日終夜面を見あふ事なり。戰開けなむには、其方の職務にれはれて、自らまぎるゝことも多かるべけれどなり。さてこそまさりてうれしく、まさりて勇ましく思ひしなれ。

海原遠く黒雲とぢ滿ちて月日も爲に光なく、電はげしく、雷なりわたり、烈しき風は波濤を吹あらして大連灣頭また昨日の如くならず。天も裂け地も砕け

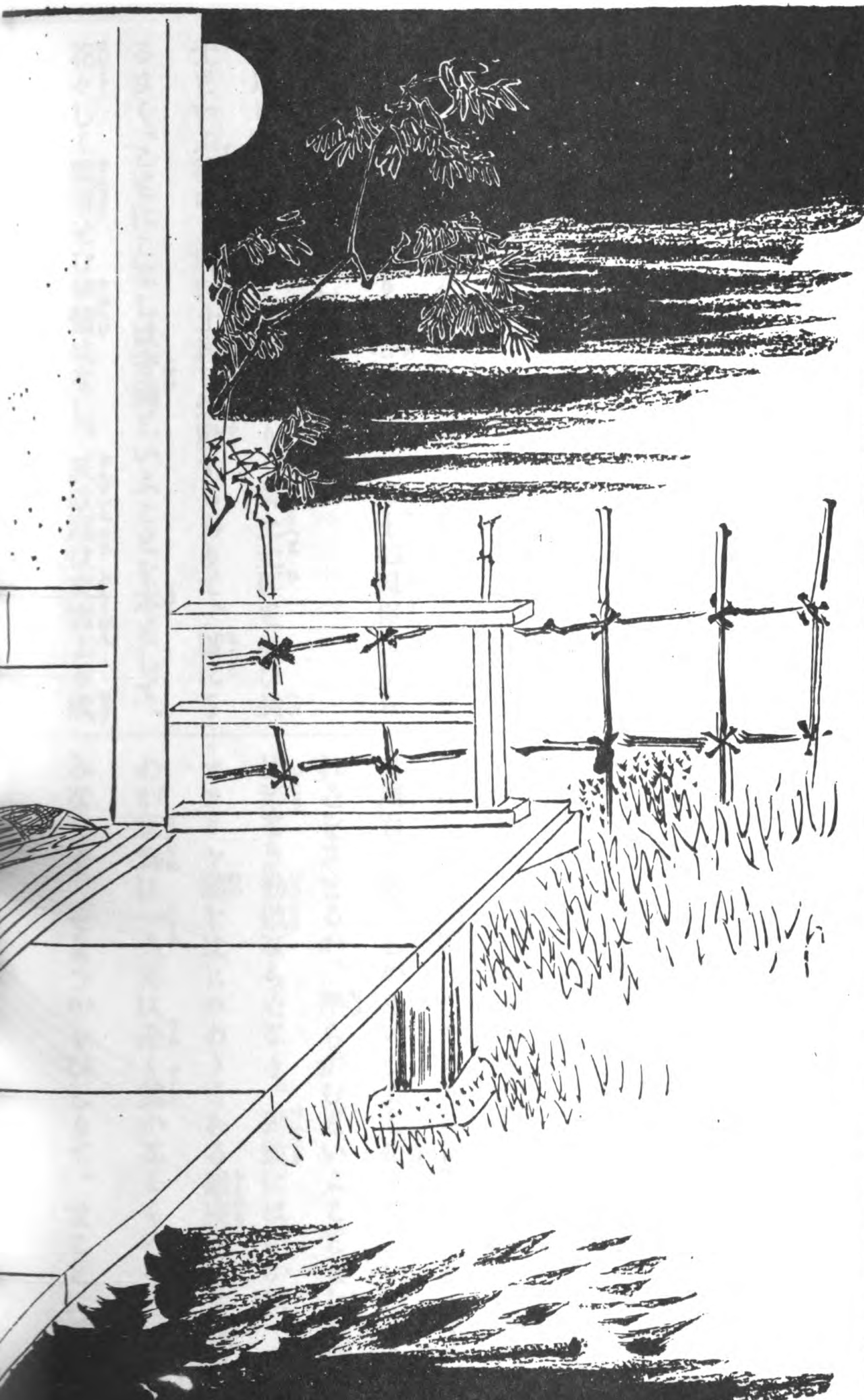
む斗なるに、かゝる折にはわが郷里にありても心細からぬかは。さるをしらぬ境にあり、たゞわれは陛下の御親兵なり。陛下のまけのまに〳〵火にも水にも入らむもの、今大御命かゞふりてこゝに來れる身なぞか恐れむ。わが身は固より陛下に奉りつるに、何の惜しむことかあるべきと、おもふ心によりて、心づよくもならるゝなれ、さてもいみじき空合よと、みな打よりて、かたらふ折しも、俄然に報知は天の一方より墜來りぬ、あゝこれ何もの、われらが爲にはぬくべからざる勁敵、しかも其名はいと平らかに和らかに、八重の衣かさね紅の袴はきて、いとしとやかにもて、來らむか如き媾和條約成りぬとのしらせ、はりつめし我軍の矢竹心は一時にくだけ、骨はぬかれたらむが如く、肉はそがれたらむか如し。あわ百年の壽命、おもふに其幾年をとりさられつらむ、一軍みな武器を擲ち、歯をかみならして雄たけびしつゝ、地をふみならし天を睨みて、一時に大聲あげつ、あゝわが事了りぬと。

旅順口金州城にての勝の譽はいよ〳〵捷の譽となりて遂に上こすことを得ずなりぬ。山海關にて天津にてと、種々におもひたのみしわが軍の千々の望は空だのめとなりはてぬ、かゝるめ見むことの定まりてありしならむには、われらはもとの御親兵にて、境を出ざりせぞよかりしならまし。さるを新しく考へ出られし銃は成りぬ、日本にもかはがりの發明いでぬと、外國人の膽を冷し、第一軍第二軍の功績にだに、舌まきてあらむ腰拔どもに、いよ〳〵舌を卷かせ、いよ〳〵え起たずなりなむまでと、おもひ頼みしこともそも〳〵幾日なりしぞ。あはれ神は遂にわが軍に幸を與へ給はず、空しくしらぬ異境に泣かしむ

るかと、將校はじめいづれを見ても、皆本意なげに力もあらずげになりわれも誠に心の内には、素車白馬にて物すらむ心地しぬ。殊々美濃部と空しくこゝに止まらむことのいよ／＼堪へずなりぬ。そは限なきはどなれどなり。あゝわれこれをいかにせむ。少時して命は下りぬ、こたびの戰捷より得られし臺灣うけとりにとて、其の筋のつかさどものいわたりゆかむ守備に、同地にものせよとなり。一軍思はず跳り上りぬ、守備何ものぞ、心にふさはしとも思はず、まことに喜びしとはいかでか思はむ。されどあまたの望をもちてわたれりし人々の志を果さゞる怨恨は胸にみち／＼て、いぶせさこよなく　せめてこの怨恨の片はしだにもはるけよと思へどなり。まして彼地には、なほ黒權軍の統領として、名に高き劉永福のたてこもれるあり。その部下も、強悍なりとて、人のれぞれれのゝけるものなれど、わが腕をためさむには物足らず。新しき銃試みむにも、何となう口をしき心地すれど、今は犬にまれ猫にまれ、試みずて止むべきにあらずと思へど、嬉しさに堪へず。涙に咽びつゝ又船にのりぬ。あはれうの涙や、よに血の涙といふがありとすれど、いとさはに交れりしなるべし。日を經て三貂角といふに上陸しぬ。間もなく、こゝの要害第一をもてなりわたれりし基隆もわが手にたちぬ。赤帽の向ふ處天下敵なし。戰爭は思ひしよりも兒戲に近しとつぶやかぬものなく、かゝることを功績などいひてはやしたてられむは、中々に恥かしとさへれもりき。されどこは誠に小兒にも劣れる心なりしなり。清國内地より來りて基隆などを守れりし兵士はまことの兵士にはあらで、土民といふきはゝ中々に兵士まさ

りの兵士なりけり。婦人小兒に至るまで、みな一人だにあらむ限は、抵抗せむと思へるが如し。武器こそ世に後れ時にあはざれ、その心根をもてわれらに抵抗へり。まして我軍は、はやく、この國は我國となりこの民は我が民となりぬ。抵抗するは理しらぬより起れるにて、けしき心あるにはあらじと、なさけを本として討てり、いかでか其身をさき、其骨を粉にせらるべき、たゞ少時一撥のおこれるものとして、れどしだにすれど足れりと思ひしなり。これぞまことに小兒にも劣りし心にてやがて土地風俗にならはぬあやまちなりしなり。

土民といふきはにてなほか丶り、其上土匪といひ兵士といふ徒の、頻に土民を煽動するありて、誠にうるさく、ことにこなしは守備といふことを本として、花々しく戰爭せむ準備はなし、民政廳は文官より成立ち、戰爭の經驗つゆほどもある者なし、あはれかくてはいつまでこせり合の絶ゆべくもあらず。漸う手に入りし國を治めむことと　中々に手に入らぬがまされりなど思へりしに、ゆくりなくも強くかたましくたけ〲しくかしこむべく、百萬の精兵をもて立むかはむも、つゆ騒がず、銃砲槍刀の利器をすぐりて追ひゆかむも、逃げかくれぬ大敵は群がりよせぬ。こ丶に至りて、天も地も山川も草木もみな敵ならぬはなし、はが軍これがために討死し手おふもの、月に幾百千人。しかもいづこを拒ぎて、いづこを攻むれどをさまるか、平らがむといふことをしらず、そは形なき勁敵ならどなり。勁敵にはいかに、虎列剌マラリヤ熱をはじめありとある惡疫これなれなり。わが軍爲に一人だに全く健かなるものなし。しかのみならず、そをうかゞひしりて、まことに武器もた




湖仙

る兵士の攻めよするあり。美濃部も手れひて病院に下りぬ。日頃にくし嫌なりとれもへりし吾も、さすがに戎衣の袖をうるはしぬ。(未完)

朴平

白魚女史

咲きこぼるゝ野萩を、それながら結ひまはしたる袖垣の奥ゆかしげなる離れ庵、月もたづねて宿るらむすそすましたるさむしろに、かいなづる手も袖もにほふむかりなる手弱女が、何忍ぶらむ、玄のびねに、玄むしはかきならすつま琴、糸ながら緒ながち千々にむせぶが如く、よぶが如くきこえしが、いつしか手もうちやめて、つくゞゝと思ひ沈める底の心や何ならむ。

何とし玉ふ我が君は、我が殿は。學びの業を終へ給ひてよりも、はや一年にもなるものを、文雄様、文雄様、あまりにこそは御心強けれ。此の百代は起ては現、ねては、夢、君が居ますときく空にのみ思ひ迷ひ、ながめくらしてさへ侍るを、文雄様、君は忘れもはて給ひてか、故郷の空の花にもたよりなく、秋の雁にも文はなし。むかしはさてはれはさゞりしものを。思へむ八年むかし、諸共に此の國にれはせし頃は、世にもやさしう、すみれぬきに、つむなひきに、必ず自らを伴ひて、つれ給ひて、野にも二人り、山にも二人り、妾なくてはものさびししとさへ云はれ、さては、わらはがために文さへ說き、文字をさへ敎へたまひ、よろづに百代〳〵とむつまじう、やさしうせさせ給ひしものを。忘れもせじ深き學びの道に思ひ立ち給ひ、はる〴〵と東の空へ旅立ち給へる折りも、もろともにれはさずやとさへいは

れて、別れがてにし給へど、妾は女の童のわけもわらず、たゞやさしかりし人のいとほしく、是非につれてと、旅衣の袖にすがりて、うちなきしに、なきぞ、めで度人の門出に。都にれはさんも五歳六歳の年月、やがては、其方も行かじと云はゞとて、御傍へ行かでは叶はぬものなるに。わかぬ事な云ひそと母親に叱られ、なく〳〵別ちがたき袖を分ちしが、をしみにし心は、今日にかはれども、をしき思ひは今日もれなじなり。

かくて都に出で給うてよりも、流石にふる里の空をのみ思ぼしめして、風にも、雨にも、必ずたよりして、さわることなくてか、恙あらでか、心をしてよと、たゆず音信は給ひたるに、いつしか嵐にさへ、雪にさへとひたづねたまふたより稀れに、今日此頃の御心のつよき、水莖のあとはひまなく通へども、かれ〳〵にのみ過ぐる返り言。いかに學びの庭のことしげらむとて、露むかりの言の葉をかきかへされむひまはあるべきを、思へど恨みも出で侍る。いつぞやも〳〵、あまりに、思ひむすばれ思ひ亂るれど、君が御心に、とき玉ふよしもがなと思ひたのみて、送り參らせたる彼の花瓶敷も、くつ下も、何とか見そなはし給ひけん。敷き給ひてか、はき給ひてか、我殿には何も仰せられず、たゞ〳〵朴平よりのあつき禮のみ。朴平の心はいつもうれしけれど、やさしけれど、ゆるしてよ、朴平。そちのみの言の葉にては、物足らず、心すます、かきくらす心は峰の時雨の幾重いつか千しは八千しはに、紅てく心よりそめなして、またも送り參らせたる紅葉のはんけち、こたびこそはと思ひたのみて、待ちあかしまちくらし侍るに、なはかき葉むかりの御言葉もあ

らず。またもや朴平よりのかへしの奥に、早う御許樣を迎へ奉りて、奥樣とかしづき聞え奉りたさ、朴平が朝夕の願ひに候へど主君の御心のあまりの固さ、學びの道にのみこらせ給ひて、さる方には心もとゞめ給はず、なほ五歳のほどはとの給へど、さりてはあまりなれど、その内よきやうに、御心をとき參らせ候はんに、大殿樣にも、母御前にも、おん恚りあらせぬやう、御許樣より宜しきやうになどゝ、水莖のあともにじみかちに書きこせるは、もしや、もしは、御心のかはらせ給ひしを、それとは明らかに云ひかねて、朴平のわざとのつくろひにてはあらざるか。都は春の錦ともいふに、さこそは美しきやさしき花もさはならめ。やよ朴平。かくさで云ひこしてよ、朴平、のう朴平、うらみはせじ、泣きはせじ。のう朴平、誠を云ひこしてよと思ひあこがれてながむれど、友よびつれてわたる厂がね、をちこちに妻とひゆく鹿のなく音、きくに、見るに、いよ〳〵物のみ忍ばれて、泣き出さんばかりになりて、ねたへずふし沈みたりしが、やうやくに思ひかへして、亂れたる容態をつくろひ、あな勿体なし、人の、いかで、さる事を。かりにも疑へる心、あさまし。人のきかれなば、いかにくちをしく思ばさむ糸は心の亂れを治むといふよと、しらべすてゝ傍のつま琴また取りあげて、引きすませど、

阿孃樣、今宵のふしの一入に高う、お母樣もいとうおほめ遊ばされて、御ほうびに之れ持ち行けとの給ひしとて、下女のさし出す書、東京よりのお文といひてほゝ笑むに、はやはづかしく、顔をあからうして取りあぐれど、母も既によみたらむ、封さへおしきりてあり。

萩の上風も何となう身にしむ頃とこそは成りまゐらせ候へ。先とや御一同さま變らせたまふことなくれはしまし候由何よりも御目出度御言の限りと御よろこび申上まゐらせ〳〵さてとや御主君にも恙なう學びの道にわかしくらしてに候へどあまりにれん心一圖にこもりがちにれはせむかくては中〳〵に御身の上にもさわらせられ候はんといと心元なく朝夕心づかひ致し候へどしよせん數ならぬ身のみにては御心をうつさん事難く百代さまにても近うかしづきてれはされなむ御心やりにもならせ給はんかと思はれ候まにとかくに御上京遊ばされん事を此段いのり入れ奉候何も〳〵御目もじの上にとまづ取り急ぎ用事のみ

しく

朴平

文林



夕立

近衞忠熙

川のせに音をのこしてゆくみづの
はやくもすぐる夕だちのあめ

山家夏

前田利鬯

ひとすぢのかけひの水に夏の日も
涼しさあまるやまかげのいほ

月入窓　　高崎正風

てる月のさしいる窓のともしびの
　風にきゆるはこゝろありけり

夏夕　　本多忠貫

あかねさす日はかたぶきて蓮葉の
　露ふきこぼすかせのすゞしさ

雨後遠望　　池田政禮

さしそめし夕日のかげにあま雲の
　晴たるのちのやまと見るかな

避暑　　長谷信成

人のみかてる日もうときき山かげの
　このした庵はすゞしかりけり

避暑　　諏訪忠元

夏も猶きり立ちわたるきりぬりの
　たきのもとにてあつさ忘れん

燭影映水　　宮地厳夫

しげからぬ蘆まの水にうつりけり
　堤のやどのともし火のかげ

橋螢　　小出粲

ふたりとも人はゆかれぬ板はしの
　上にあまたもとぶほたるかな

鐘聲幽　　阪正臣

物思へむきゝももらさず夕ぐれの
　のでらの鐘はかすかなれども

水邊蘆　　植松有經

ほたるとぶ澤邊のあしに風見ゑて
　涼しくすめるみづのいろかな

夏河　　松本高明

よど川のつゝみのやなぎ風たちて
　のぼる夜船ぞすゞしかりける

水櫻　遠山英一

大川をわがものがほにすむやどの
　高どのいかにすゞしかるらん

逗子の小坪の濱邊にあそびて　三浦千春

沖つ風くもゐにふきてあさみどり
　そらもひとつによするしら浪

同　同

まさごぢの松のもとまで潮みちて
　秋をよせくるれきつしらなみ

興津の淸見寺に物して　同

淸見はら御代の昔のさきは荒れて
　空き名のみとゞめけるかな

名所懐古　師岡正胤

かま倉の亀のかゞみにうつゝみし
　そのかげいかにいざよひの月

同　同

はに土をはこぶつとめに敵うちし
　むかしをしのぶあまの香久山

初秋風　林甕臣

暑かりし夏もかぎりはありにけり
　桐の葉ちりぬけさのあさかぜ

箱根塔が島にて　三輪義方

ふじのねの影てろうつれあしの湖
　うぞこのかたへきりは流れて

常磐御前　伊藤祐賢

はかなくも暫し雪にやなびきけん
　ふし見の竹のさかゆまつ身に

水、　安齋篤敬

いさぎよく松の木蔭をながれ行く

水のこゝろとわれもならなん

海夕立　黒崎仙太郎

天城山かさなるくものくづれ來て
ゆふだち過ぐる伊豆の海づら

鶴ひなをつれたる　石原均

わさりつゝ親にはなれぬなひ鶴は
千歳のあとをふみならふらん

佛御前　木庭芳香

萌え出づる春野のくさもあれ風と
同じさがのに枯るゝはあはれさ

初秋　岡本秀晴

朝ぎりは秋をこめてや立ちぬらん
草のたもとにあまるしらつゆ

竹風　蜂須賀隨子

文づくゑの塵もをり／＼拂ふなり
まなびのまどの竹のしたかせ

夏月　前田朗子

たへがたき晝の暑さもやりみづに
流るゝつきのかげのすゞしさ

曉旅行　大河内鉦子

たち出し家もまれなるあかつきに
ひとりうまやを立ちてける哉

親　柳原愛子

よろこびの身にある毎にたらちねの
親のまさむとまづおもふかな

家々納涼　千種任子

やどごとに蚊遣をねやに立てきて
外面にすゞむなつのゆふぐれ

水　姉小路良子

山がはの岩きもとほしゆくみづを

れのがこゝろにひくよしも哉

夏硯　税所敦子

清水のみたのむ暑さに文づくゑの
すゞりの海のかるゝころかな

夏露　北島以登子

朝まだきにはのしばふにおく露を
ふむこゝちよき夏は來にけり

樹陰螢　日野西廣子

しげりあふ青葉をぐらき庭なれど
暮ぬさきよりとぶほたるかな

螢　三宅龍子

みつふたりまどのと去ず飛かふは
今朝はなちたるほたるなる覽

扇　諏訪晴子

たへがたき夏の暑さもわするゝは
ならずあふぎのあれは也けり

舟納涼　山本富士子

隅田川つきをすゝしみあそふ夜の
ふねのうちには夏なかりけり

盃　小池道子

酒づきの廻るまに〳〵打ちとけぬ
はじめてあへる人のこゝろも

鼠　海上壽子

何事をさとすこゝろかうつばりに
すぶ〳〵と鳴くよはの小鼠

瀧　清水しつ子

山高みながれて落つるたきつせは
天のかはらにつゞくなるらん

明治廿九年八月廿一日に東宮和歌丸君の加奈太國へ船出し給ひし次の夜月の明きにいたう更る

まで起き居つゝかねて加奈太への航路は横濱を出でゝのち直に北をさして進み奥州金花山の沖より北海道千島の沖をへてゆくなりときゝつればよめる

内田ゆか子

晴れわたるこよひの月を北の海や
千島のれきにきみや見るらん

河月をよめる歌

海上壽子

柳ちる、堤をくれば、かのもには、さ霧なびきて、このもには、しら露おきて、桂川、月影淸し、霧分て、舟こぐ人よ、露わけて、道ゆく人よ、心なく、棹なさしそね、心なく、ふみな分そね、眞玉なす、こよひの月の影やくだけむ。

雑報



●常宮周宮兩殿下蘆の湖御舟遊

箱根離宮に御避暑中なる、常宮及周宮兩殿下には、至つて御健勝に渡らせらるゝ趣なるが、去月十六日には、兩殿下の思召にて、午前より後殿に於て、御隨從の諸官人、女官達を召させられ、種々なる運動遊戯等を御上覽遊ばされ、東京廣目屋の組織せる、高等音樂

會の樂士をも庭上に召され、和洋の奏樂數番あり、兩殿下の御感斜ならず、更に蘆の湖、御舟遊仰せ出されしが、奏づる音樂の音は、又一入の趣を増して、土地の住民は、湖邊に群を爲し、避暑中の外國人迄も、一齊に拍手して、兩殿下の萬歳を壽ぎ奉り、同六時兩殿下とも、龍顔麗はしく、御歸宮あらせられたり、其夜は有志者の催しにて、燈籠流しを御覽に入れ奉り、猶は餘興に奏樂などありて、函根近來の盛況なりしと云ふ。

●阿佛尼の古跡　國文の模範として世に持はやさるゝ十六夜日記を物せし阿佛尼は、昔鎌倉に下りて、細川の莊の事を訴へしも、願意未だかなはずして、同所月影が谷といふ處にて、身亡かりし由は、物の本にも記されたれど、其住たる跡定かならず。新篇鎌倉志にも、只月影が谷とのみ記せり。然るに國文家高瀬某といへる人、此の程極樂寺内に滯在中、同村の古老につきて、さま〳〵に捜索せしに、同村の舊里正金田庄兵衛と云人、本年七十歳にて、悉しくその事を知れり、月影が谷といふ處は二箇所あり、一は極樂寺の南にあたる谷なり、一を西の谷とす、南の方は谷の形ち月に似たるより、名としたるものにて、西の方なるは山の端よりさし出る月の面白く、谷に映る其景色に因みて名付しものなり。其西の谷に、古來より、阿佛屋敷と唱ふるものあり、舊莊官の家に言傳ふる處にては、阿佛尼數年こゝに住みて、遂に身退り、その地に墓をも築きたりと云ふ。まさしく舊跡に相違なしと分りて、高瀬氏は直に阿佛屋敷の標示を建てさせたりと云ふ。同地は極樂寺に添うて、西の谷間へ入二丁許り、月影の地藏堂のうしろの岡にあり、古き五輪の塔もありと云へり。

●鈴木梅仙翁の製墨　製墨を以て有名なる、鈴木梅仙翁は和歌山縣田邊の人なり。我邦古來製墨を以て業とするもの幾萬人、未だ曾て、唐墨製を凌駕するものなきを慨嘆し、拮据經營製墨に從事する三十年一日の如く、遂に素志を貫徹し、方于魯、程君房等の秘訣を究め得て、唐墨に優る佳墨を製出するに至れり。之が爲に幾萬圓の金を失ひ、衣類家財一の餘す處なきに至りしといふ。曾て博覽會、及び諸府縣の勸業共進會等に於て、賞牌幷に褒狀等を賜ふもの枚擧に遑あらず、就中南都品墨會に於ては、墨色中外第一との好評を得、明治廿五年、神田の大火に翁の家も亦類燒し、其後は千駄ケ谷に移り、辛うじて製墨所を作り、愈々佳墨を製して、輸入墨を禁遏せんことを勉む、當時千駄ケ谷の水(鹽分百分の六)を用ひし物は、克く展ぶれど、大坂にて製せし、同地の水(鹽分百分の十六)を用ひし物は、十分に展びざるの嫌あり、偶ま友人永勢亦江氏より、天水を佛騰して、五六回之を濾去して用ふべき事、及麻布區山元町全福寺境内楊柳水(俗云弘法大師杖を以て、掘たる井戸なりと、今碑を建て丶之を表す)東京市中第一の麗水なることを聞き、三田に製造所を設けて、楊柳水を用ひ、特別上等品には、濾去天水を用ひ、兼て發明したる精膠を用ひて、製造したるに、始めて古來未曾有の佳墨を製出し、其妙を極むるに至れり。美術學校の教官及び生徒は、皆な翁の製墨を愛賞し居るとなむ。

●石川訓導の義擧　東京盲啞學校訓導石川倉次氏は、明治十九年迄、千葉縣茂原小學校の訓導にて、熱心實直の聞え高かりしかば、遂に文部省より召されて、夫妻共に盲啞學校の訓導に採用せられたる人なるが、同人は爾來一意盲啞の爲めに、教授の勞を採

るのみならず、潜心工夫をこらして、去る廿三年中、盲生の爲めに點字を我が邦の假名字に飜案して、盲人が自由に字を書し、書を讀み得るに至らしめ、文部省より、數十圓の賞與を得たり。即ち現今同院に盲生の使用する點字は、實に氏の賜と云ふべく、夫より、氏は又啞生の未た充分に已の思想を常人に訴へ、常人と自由の筆談を爲し得ざるもの多きを見て、如何にかして、啞生が盲生の點字に對する程の便法を案出せざやと、百方苦慮の末、それと思ふものを書き集めて稿を成し、聾啞讀書初歩と名づけたるもの十二冊と、外に五冊の書を著し、小西盲啞學校長並に同校訓導遠山邦太郎氏等の校正を得、未だ出板の運びに至らすありしに、客年末台灣學務部長伊澤氏の見る處となり、本年四月中、右草稿の內、四冊を金三百圓にて總督府に買上げらるゝ事となりたり、爰に氏は大に喜び、該金の內百圓を盲啞學校に寄附し、百圓を父君に呈し、養老の料に充て、殘金百圓の內五十圓を子女、五人に分配し、三十圓を令閨に與へて、何れも夫々貯金せしめたりとぞ。さて、此の頃に至り、盲啞學校へ一百圓を寄附せし廉を以て、東京府知事より、三組の木杯を賞與せられしかざ、氏は之を押し戴き、一家打寄り祝盃を揚けんとて、其の祝盃費の見積りまで出來たるに、氏は寧ろ祝盃に代へて、貧民救助の資となさぞ、永遠に其の志を遺して、益をなすべしとて、遂に祝盃を止め、この程東京市養育院へ右の金圓を寄附せられしと云ふ。

●工女の風儀に就きて　女子に最も尊ぶべきものは貞操なり、然るに當時各處工女の風儀は日に增し壞亂して、今や既に其の極に達したりとも云ふべきか。見るだに忌まはしく、聞くだも穢らは

しく、如何にも苦々しく思ふは、今日の工女社會の醜聞なり。されど今に於て此が取締を嚴にせざれど、とも、日本女子の體面をけがすこと少からずとせず、あな忌みじ、日本紡績會社にては、多くの工女を使ふ事とて、早く此等の事に心づ、き本年五月頃より寄宿女工の教育を謀り、傳法尋常小學校か阿部訓導を聘し、毎夜一時間宛之を實施し來りしが頃日に及び、其の成績の見るべき者あるに至れりと云ふ誠に職工女教育の好模範を示したり。又頃日京都府加佐郡教育部會に於て、工女の風儀を矯正する法と云ふ題につきて談話せし各員演述の要旨二三を左に摘錄せん。

一製絲工女の如き、其風儀及教育は、ひいて殖産貿易に影響するが故に、其根本的改良を圖るには普通國民教育を受けたる者に非れど、工女に採用せざる事、少くとも普通教育を受けたる工女には、賃銀を増給する事、是一方には女子の就學奬勵となる。

二工女は見守より進み來るものなり、故に先見守より矯正せざるべからず。隨て今日の急務は卑猥なる俗歌に代ふるに、純美なる唱歌を以てすること。

三品行技術教育共に、優秀なる者を撰びて、工女長となし、監督奬勵の實を擧ぐること。

四教育會より各工場に照會し、品行技術の善良なる者を撰び、褒賞すること。

五本會に於て、工女の年齡、教育の有無、勞働時間及寄宿監督を調査して后に其方法を確立すること。

かにかくにかゝる考案のやゝ世の問題となりしは、

いとも喜ばしき事にて、目下工女の風儀、一日も早く矯正せんことこそのぞましけれ。

●第四回土俗會　毎年明治義會講室に於て、催はさるゝ夏期講習會出席の爲め、各地方より會員の上京するを期とし、先年有志者相謀りて、土俗會なる者を起し、風俗習慣に關する談話會を開き、土俗學研究の一助となし、既に去年迄に第三回の開會ありしが、今年は人類學會々員有志者の發起にて、八月廿二日午後五時より、同講堂に於て、第四回土俗會を開きたる由、その問題は左の如し。

育兒風習

(一)初生兒を何と稱するや。

(二)二三才以上の男兒女兒に格段なる名稱あるや。

(三)母の乳汁は何才位迄與ふるや。

(四)小兒を喜ばすには如何なる語を用ふるや(東京にては一つれ笑ひなさいと云ひて後に舌にて音をさせるなり)

(五)泣くを止めさするには何と云ふや)東京にては「ヲーよし／＼／＼など云ふ」

(六)眠らする時の歌にて最も普通のもの如何(東京にては「ボーヤは好い子だねんねしな」)

(七)手の運動を習はする時何と云ふや(東京にては「にぎ／＼」「れつむてんてん」「かいぐり／＼とつとのめ」等

(八)大小便をさす時何と云ふや(東京にては「シィー」「ウーン」

(九)歩き習はす時何にするや(東京「こゝ迄れ出で甘酒進上」云々)

(十)小兒に咄して聞かする昔咄の中にて最も普通なるは何々か(東京にては桃太郎猿蟹合戰等)

●世界第一の長壽者　何人か世界第一の長壽者なるとの問に答へて、或人は露國の老人百六十歳のものあるを擧げたり。されど露國の人口調査は極めて不完全にして、且つ人民の生産月日を記録するものなき故、この言直ちに以て信憑し難し、今ま最とも正確なる長壽者は、亞弗利加に生れたる黒人にて、その名をブルノコトツムと呼び、現にリオデジヤネロに住するもの、本年百五十歳なり。之に次で莫科府の御者、クストリンと呼ばるゝ者、百四十歳なり。而して婦人の長壽者百三十歳なるは、黒人にしてボルガリヤに住するものとなす。元來ボルガリヤ及びバルガン半島の諸國は、長壽者を生ずること多く、セルビヤ國には、百歳以上のもの五百五十五名あり。ボルガリヤ國には、同じく三千八百八十三人あり。即ち語を換へて云へば、ボルガリヤ國民千人中に一人の百歳以上のものある割合なりといふ。千八百九十二年のみにても、ボルガリヤ人民百歳以上の死者三百五十八人ありて、半島の諸國にては、百歳以上の長壽者も左迄珍らしからずと聞きぬ。

●一家族五十人　飛彈國田の洞鑛山といふは、海面より拔くこと四千五百尺、深奥なる僻土にして、近傍の部落は一村を擧げて、戸數漸く五六軒に過ぎず、而してその建物の廣大なるは、殆ど目を驚かすばかりなるが、此等村落には古來の慣例ありて、一村五戸ならば五戸より外子々孫々如何に夥多ありと雖も別家分居するを得ざることゝなり、今尚ほ之を墨守して決して子孫の別家する者なければ、已來人數增殖して、中には一軒の人口五十人の上に出づるものあり、斯くて其婚姻等は一村落中に限らるゝより、自然一家内に七組八組の老夫婦、中夫婦、若夫婦杯

ありて、何れも子孫を有し、同歳の兒童累々として生れ、百歳に近き老翁老媼あれど、八九十歳前後の翁媼あり、同じく頭上皚々たる霜を戴き、腰に梓の弓を曳く樣、其實誰が何家の隱居で、誰が何家の主人なるやは傍人に識別し難しと云ふ。

●鳥獸壽命談　鳥獸の壽命に就て、耳新らしき話なりとて、某西字雜誌に載する處を見るに、熊と狼は二十歳以上生活し、狐は十四歳にて全く老衰し、赤道地方の猛獸は割合に長年を保つものゝ如し。倫敦の動物園に飼養しありたる獅子は、下等肉と麪包屑の如き、獅子の胃に適せざる食物にて飼養せしも尙鐵欄の内に六十年以上生活したり。兎と豚は八年乃至十年生活し。綿羊及び山羊は十五歳未滿。牛馬は三十五歳内外の生活を保つべし。犬は二十乃至二十五歳の生活にて、就中家内に飼養さるゝ犬は、長命なり。猫は十五歳に至りて衰弱し、晝夜最も多く眠を貪る家畜なり。象は非常に長壽を保つ動物にて、三百乃至四百歳生活す。昔しマセドンの大王亞歷山は、印度王ピールと激戰大捷を得たる時、ピールの先陣に立て勇戰したる象一頭を生捕て、之を日神に獻じ、後黥入して之を放ちけるに、亞歷山の死後三百五十年を過て、此の黥入せられたる象は、尙生存し居たりと古代史に見えたり。又鳥類にては、鸚鵡、鷲、鵝鳥の如き最も長命を保つものにて、百年以上生活するものある由、我邦にては、鶴は千年龜は萬年とて長壽のものとすれど、西洋にては之を算入せずと見えたり。



教の庭



九月五日兼題　早秋

（天地人及秀逸のほかは原稿到着順）

天　京都市錦小路室町東へ入ル　藤井ます子

うちそよく萩のはかせの淋しきは
　秋のあはれのはしめなるらん

地　神戸市多聞通六町目十八番地　近森延子

れく露のしけきに秋そしられける
　身にしむまての風はふかねと

人　大坂江戸堀北通三町目　守山比古子

朝とてのころもてすゝしくれ竹の
　ひとよはかりに秋やきにけん

秀逸（十五首）

夏ころもまたかへなくに大そらは
　あきのいろにもなかりける哉　甲斐荘ゆふ子

立ちそめて幾らもへねは草の葉の
　つゆのひるまは秋としもなし　磯部つや子

三日月のほのめく影にちりそむる
　桐のひと葉にあきはきにけり　横田須磨子

咲きいつる庭の千種にきのふけふ
　れくつゆしけく秋はきにけり　河田いし子

たへやらぬ暑さなからも秋立ては
　さすかに月のかけそすゝしき　遠山よし子

あさゆふの風は涼しく身にしめと
　ひるまはいまた秋としもなし　久松せい子

庭草の葉すゑにあまるつゆ見れは
　ことしもいつか秋はきにけん　今藤なか子

秋といへは日數へねとも何となく
　ゆふへの風の身にそしむなる　田津木久子

夏ころもうすしとはまた思はねと
　あきもしらるゝ萩のうはかせ　眞鍋直子

いちはやく秋立ちけりと音つれて
　萩のうへふくけさのはつかせ　名取正代子

大空にてる日のかけはあつけれと　梨本信子

軒はなる桐のひとはのちりしより　桐の葉そよくかせのすゝしき　小野田信子

いとはきの枝もたわゝにおく露の　秋のこゝろになりにけるかな　奥原とく子

なく蟬の聲のえくれし木すゑより　しけきを見れは秋や立ちけん　永井さい子

昨日まていつこの空にかよひけん　袖につゆおるあきすきにけり　萩原章子

　今朝はすゝしき秋のはつかせ

なかむれは空には霧のたちそめて　冬木あか子
　けふしも秋になりにけるかな

野も山も夏のみとりのまゝなから　山根久子
　葉末のつゆにあきはきにけり

秋風は吹きそめけりな庭のおもの　佳山幾子
　荻のうははのおとかはりけり

麻ころもまたぬきかへぬこの影を　小野田くに子
　萩ふくかせのおとかはりけり

夏ころもすそのの原にふきかへす　貫井そめ子

　心地こそすれあきのゆふくれ

夏もとていな葉の山のまつかせも　宇田川よし子
　すゝしくなりぬ秋やきぬらん

秋きぬとめには見へねと此の影の　小野田かま子
　ころもて涼しにはのあきかせ

たまだれのをすもゆらきて朝風の　小野田ひて子
　涼しくなりてあきはきにけり

行末は千々のあはれもあらましを　岩崎ふて子
　また身にしまぬ秋のはつかせ

秋きぬとめには見えねと此の朝け　太田やま子
　たもと涼しきこゝちこそすれ

此のゆふへ軒端の松におとつれて　小野田さよ子
　涼しくおはゆる秋のはつかせ

たひしける庭の千種におくつゆの　貫井たま子
　たまふきこほす秋のはつかせ

何となく空のけしきもかはりつゝ　石井とめ子
　あさかせ涼しあきやきぬらん

山田もる賤かころもにそよ〱と　佳山せの子
　ふく風みえてあきはきにけり

いとはやも軒端にすゞの音たてゝ　佳山静子

まつれとろかす秋のはつかせ

山さとはわけてさひしく思ふかな　土岐米子
きのふにかはる秋のゆふかせ

ふく風の身にしむけさは何となく　栗田口信子
秋のこゝろになりにけるかな

もの思ふこゝろとはなりぬ草葉にも　土肥仙子
露れきろむるあきのはつかせ

なつすきていくかもあらぬ夕にも　西尾直子
すゝしさそへて秋かせそふく

昨日今日しつかたもとの露けきは　北島功子
秋のあはれのはしめなるらむ

かきならす琴の進ひに小夜更けて　北島松子
はやくもあきの風かよふなり

急き起きて野をやあさらん早秋に　星野式子
先こゝろよきにはのしらつゆ

日のてりもまたさめやらぬ青空に　星野仁子
うつるみとりの水のはやあき

此あさけたもと涼しくいつかたも　瀬戸榮子
秋のけしきとなりにけるかな

庭の面のひともとも咲ける萩の葉に　鎌田さくの子
露れきそへてあきはきにけり

いつしかも秋はきにけん三日月の　仁井田とみ子
ほのめきそむる影のさやけさ

なつ衣またきにあきのたちかへて　碓井武子
けさふく風のたもとすゝしさ

ゆめのまに松ふく風のれとかへて　碓井たき子
あはれもよほす秋は來にけり

秋はまたあさきに誰をまつむしの　碓井信子
はつ聲さそふにはのさひしさ

手になれし扇もけふはわすれけり　碓井わか子
をきのはそよく秋のはつかせ

月かけもきのふにかはり秋きぬと　羽田三緒子
れとつれろめしをきの上かせ

たへかたきあつさもいつか呉竹の　遠山たゝ子
はかせすゝしき秋はきにけり

いつの間に秋やきぬらんわか宿の　曾山道子
軒端にかよふけさのあさかせ

また替へぬなつの衣のまゝなれて　木村象子
桐のひとはにあきはきにけり

はるなつはふしみしかにも呉竹の　楠精子

葉末みに染むあきのはつかせ

また夏のあつさは身にも忘れねと　島田好子
あき立つけさは風そすゝしき

なにこともれくれかちなる山住も　溝口寛子
今朝ふく風にあきはきにけり

秋立つと眼にも爽かにみえそめて　溝惠喜子
今朝ふく風のすゝしかりけり

しらつゆもまたおきあへぬ庭草に　高橋信子
音こそかはれあきのはつかせ

あき風はわきてふかねとそての露　根岸英子
脆くもけさはこほれそめけり

桐の葉の色もかはらす落ちぬるは　荒井波子
秋立つけふのしるしなるらん

めにみゆる物ならなくにふく風の　荒川ふく子
なとかはかりに身には染らん

わかやとの庭の桐の葉落ちそめて　中島房子
今朝珍らしくあきはきにけり

秋といへはまつふく風も音かへて　遠藤勢子
たもと涼しくなりにけるかな

きのふまてともとなれにし扇さへ　戸原利根子
忘るゝまてにあきかせそふく

このあさけ庭の草葉もつゆおひて　戸原光子
あき風しるきはきのはつはな

端居して月を見なからうたゝねの　戸原ますか子
さめて身にしむ秋のはつかせ

きのふまてたれもすゝみし鴨川の　戸原銑子
さゝれのうへにあき風そふく

あはれまたことしもなかは呉竹の　小野谷里江子
はわけのかせそ秋のいろなる

人しれぬよもきかやとも露おきて　小町谷園子
ことしもかれす秋はきにけり

松浦かたにしふく風にむらをきの　矢野高子
さわくや秋のはしめなるらん

今朝ははや昨日にも似す涼しさの　重松たか子
身にしむはかり秋かせそふく

いつのまに秋や來ぬらむまたかへぬ　城利惠子
なつのころもの袖のつゆけき

目にみえて秋とは空にしられけり　野中ゆき子
吹くゆふ風の身にはしみつゝ

夏の日とおなし暑さも吹きかはる　野中あさ子

れとに志らるゝ秋のはつかせ

きのふまて結ひくらしゝまし水の
音も身にしむあきはきにけり　青羽茂技子

夕くれの風にふかれてくつの葉の
うらめつらしき秋はきにけり　青羽逸子

あききぬとまつふく風の音つれに
吾かれてたりの夢をさましぬ　香川英子

秋きぬと目にはみゑねと苅る萱の
野へふく風はみたれそめけり　石井むつ子

夏ころもすゝしてふ名も秋かせの
立ちそめてこそ思ひしらるれ　有坂清子

いとはやも秋風たちぬ志らすけの
淺茅かはらにつゆのみたれて　有坂いそ子

いなはらにおきそふ露の玉ちりて
ゆふ風そよくはつあきのそら　武田粂子

おしなへて秋のけしきになりに鳬
たもとすゝしきにはのゆふ風　後藤のぶ子

宵のまに秋はきにけん今朝みれは
にはの糸はきつゆれもけなり　瀧かよ子

今よりの物のあはれは知らねとも　牧野貞子
けふしも涼しあきのはつかせ

けふよりはあきの初と聞くからに
そてふく風もさひしかりけり　村田ひさ子

晝のまはきのふの夏にかはらねと
あさなゆふなは秋めきにけり　野崎章子

夏はなは蟬なくこゑにのこれとも
つきのひかりは涼しかりけり　杉浦芳子

きのふけふ暑さなからも吹く風の
れとも涼しくあきはきにけり　越井道子

柴の戸をれとつれわたる風の音に
ものれもふてふ秋はきにけり　福原望子

秋はまたあさめか原にいとはやも
露ちりそめてかせそ身にしむ　鹿野靜子

夕顏のとさせるまゝにかよひけり
しはのやれとの秋のはつかせ　谷川清子

いつのまに夏は去にけん音たてゝ
秋つけそむるはきのうはかせ　小塚義子

きのふけふ軒ふく風もさわくなり
うき秋きぬといはぬはかりに　蘆原とら子

たつた山夜半にや秋の越ゑにけん　井上種子

今朝はさぎりのみねにたつ也

一歳のなかははすぎてはつあきに　一番ヶ瀬つき子
なすこともなき身をかこつ哉

なつころも袖にならしゝ夕かせの　三浦とき子
身にしみそめて秋は來にけり

いつしかとまたれし者を秋立ちて　山田ふみ子
たもとすゞしくなりけるかな

立ちそめて幾かもあらぬと吹風の　山崎しつ子
いとゞ身にしむ秋のゆふくれ

秋のきて日數はたゝぬたもとにも　北村貞子
ふし風すゞしかものかはつら

ときしらぬ松のこずゑに音つれて　北村孝子
そよふくかせに秋はみえけり

秋きぬと涼しさみせてけさはしも　北川はな子
桐のひとはのれちろめにけり

いつしかも吹來る風の身にしみて　田代綾子
すゞしき秋は來りにけるかな

ふく風の音もにはかにみにしみて　田代艶子
しつか伏屋にあきは來にけり

秋たつと人はつけねどしられけり　三原孝子
けさちり初むる桐のひとはに

みわたせは園のもろくさ爽やかに　古河隆美子
露をむすひてあきはきにけり

柴の戸にさすつき影のさえそめて　水澤すけ子
のきはすゞしきあき風ろよく

秋風にけさちりそむるきりの葉は　廣瀬きく子
あはれを告くる初めなるらん

あききぬと誰か言傳もなけれとも　高橋照子
松吹くかせに知りそめにけり

はや秋とこよひしられて鳴く虫の　西江とも子
まくらに高くきこえけるかな

秋されは草木にのみとれもひしを　岡本久子
袖こそさきにつゆけかりけれ

手なれにし扇のかせもあかならに　岸せつ子
あはれつゆけき蟲のこゑかな

すゞしとてめてにし風もいまは早　靑木春子
秋としなれはそゞろ身にしむ

散りそめし桐の一葉に知られけり　奥原ふく子
ゆふへさびしきあきのはつ風

秋といへは昨日の夏のうすころも　杉浦いと子

吹きかへす風のさすか涼しき

空にのみ秋やきにけむはきもまた
きのふのいまのつほみなり鳬　館脇ます子

めに見えぬ秋のしるしは萩のはな
ひもとき初めてなひくあさ風　池谷とみ子

吹く風にはや田の稲穂そよきつゝ
秋はあきなるこゝちこそすれ　諸井くら子

きのふけふはや秋風の吹き初めて
かとたの稲穂いろつきにけり　小曾根しう子

みそきせしきのふの麻の葉風こそ
今朝音かへてあきをつけつれ　佐々有鄰子

我か門のわさたのいなはふく風も
みにしみそむるきのふけふ哉　花園露子

夏ころもまたぬきかへぬ昨日けふ
たもとすゝしき秋のはつかせ　田卷ひてよ子

しつかやの庭のはき原さきいてゝ
秋のはしめとなりにけるかな　降田まき子

あさはらけ萩の上葉につゆちりて
こしあきしるきよもきふの宿　淺見孝子

昨日今日秋は立ちぬと知られけり
須磨の浦はのなみのねとにも　淺見みつ子

八千草の花はさかりときのふけふ
こし秋しるきにはのしらつゆ　林久子

朝きよめはゝきにかゝる落葉こそ
秋のあはれのはしめなりけり　廣田とめ子

萩のはを吹く風の音に知られけり
秋きたちにしも目には見ねと　岡田よね子

かとの田の稲葉のつゆにやとる風
さやかにみえて秋はきにけり　西田よひ子

夏秋のけちめさやかにみえねと
たもと涼しくかよふあきかせ　西田芳蘢子

秋はまたあさしと思ふにあさち原
露のみふかくおきそめにけり　德永萬壽子

くれてゆく空のけしきも物さひし
みにしみそむる秋のはつかせ　中山嘉壽子

いつのまに秋はきにけんしら露の
おきそめにけり庭のはきはら　加賀山やす子

いつしかに庭のくさむら露おきて
たもとすゝしく秋たちにけり　中村なか子

此の朝けきりはの散りて秋きぬと　秋山はな子

れとつれかはに風そよくなり

音羽山みねのまつかねうちはらふ　細川治子
かせにれとろく秋はきにけり

けさのまに秋や來にけむふく風の
先つはみにしむたま川のさと

九月五日兼題　友を悼む詞

天　播磨龍野　田津木久子

定めなきは世のならひとはいへ、かはかりはかなき物とは思はさりしを、今まのあたり君の上に見んとは、口をしとも、かなしとも、いはん方なくなむ。れのれ、物心れはねてよりは、君を杖とも柱ともたのみて、れなし學のにはにいそしみ、いつるもいるも、君とともにし、たのしき事もかなしき事も、共にたのしみ共にかなしみ、影の形にそふごとく、心はたゝ一つにて、幾年月かはる事なく、一日にても相そねは、物たらぬ心地のみして、はらからも及はぬまでに、親しうむつひかはしつる君の、今かへらぬ旅にと出で立ち玉ひて、また逢ひみん時もなくなりにけるそ、かなしともかなしき。ことに、君には、學のわさに勝れさせ玉ふのみかは、其のさか、いと優にすなはなりければ、遂には御國の女のかゝみともなり給はんと、人々はめたゝへぬはなかりしを、あゝかゝる末たのもしき君を、むなしく散らしつるうらみはさらにて、この後は、誰と共にかいそしみはけまん、誰れと共にかたのしくあそはん、幼きよりのむつましき友とては、たゝ君のみなりしを、思へは〳〵、口をしくかなしきことのかきりになん。

地　香川縣高松市八番丁六番戸　長谷川はる子

あはれ悲しきかな、田井ねん子の君はも、君はことし水無月の廿日あまり四日といふ日に、はかなくも、なき世の人とは、なりぬるかな、抑も、君と我とは、如何なる宿世の緣にかありけん、幼かりつる程、同じ小學の庭になれそめしより、春の花にも、秋の紅葉にも、たゞ君とのみころむつびつれ、かくて小學の業終へて、やがて相携へて、この教の舍に入り立ちてよりは、いよゝ、親しさもまさり行きて、朝には、書を繙きていぶかしきふしふしを問ひあきらめ、夕には枕をならべて思ふことぞも打ちかたらふ

など、誠にはらからのあはひにも劣らぬ交にて、二年あまり四の月をさへに重ねつ、君は性いとかしこくて學の業も人にすぐれ、常に一の席をぞ占め給へる、あはれ來ん年ののどけき春の末つ頃、やがてこゝを卒へ給はんには、如何ばかりめでたからんと行くすゑかけて思ひ設けし事どもも、今はみな敢なき空だのみとはなりにけり、あはれ咲く花の朝をまたずかげろふの夕をしらぬためしといふとも、君がためには、なかなかにのどかにこそはあらめ、是を思へは、ありし世に人にすぐれ給ひしも、長かるまじき名殘にやありけん、今し忍び出づるまにまに、君が奥つ城をたどり見れば、叢ふかき露の間に、蟲の音のいと打ちしきりて泣くのみ、悲しといはんも更なりき。

人　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

うきことは、世にふる程のならひぞと、れもひしらざるにあらねども、かねてごしたる事すら、今更のやうにればねてかなしきを、ましてさもあるまじき事の、俄にれてりたるころいみじけれ。さきぬべき花のつぼみの、明日はとたのみつるものを、夜半の嵐に、むなしうちりうせたる、今宵はとまちにまちたりし月の、夕つ方よりくもりそめて、やがて雨のふりいでたる、いかでかくち惜しからざらむ。さはいへ、月花は、命あらば又見んこともかたからねど、げにくちをしともかなしとも、いはん方なきは、幼きより親はらからのやうにむつび奉りし君の、俄にまかり給ひぬるになんありける。あはれ、そのふまでは、晝となく夜となく、出づるに入るに、ゑむしもはなるゝことなく、樂しきもうきも共にしつゝ、同じ學の窓にあかしくらしつるを、あやなくも、よべより肺炎とかいふ病にかゝらせ給ひて、いざ醫者よ藥よ、將たこれかれと、看參らするひまだになく、忽に身まかり給ひぬれば、何事もゆめのやうればねて、いかゞはせん。たゞあはれ〳〵といふのみ、あまりのかなしさに、胸つぶれ、我身の半もろぎ取られし心地しぬるを、かたへなる人の、これかれなぐさめらるゝまゝに、やう〳〵からうして、

樂しきもうきもつらきも共にせし
君にけふしもわかれぬるかな

うるはしく咲き出でん花のつぼみをぞ

夜半の嵐にちらしつる哉

といひ出づるさへ力なくて、またふしまろびぬ。

秀逸（三編）

香川美子

散り初めし桐の一葉と諸共に、きのふ彼の世に旅立ち給ひし我友や、今は何處に在すらん、稚きより睦びかはして、十年余の間、學をも遊をも共にし、出づるも入るも手を携へ、同胞にもまして親しうせし君の、いかなれど、吾をのみ殘し行き給ひけん、月を蔽ふ村雲、花を誘ふ嵐のうらみは、空蟬の世の習ひとはきけど、かくまでとは思はざりけり、あゝ何事も今はたゞ夢路を辿る心地なるを、永へに覺むる事なく、再び君の歸りまさぬぞ、果敢なしともいたはしともいはん術だになき、あはれ此秋は、誰と共にか月を眺めん、來ん春は誰と共にか花をめでん、さやけき光も、美はしき色も、君ありてこそ。樂しくも亦嬉しかりしが、あな思へど／＼悲しきことの極なりや。

君、學の園にありし朝な夕な、螢雪のいそしみ著くして、何業にも至り深く、殊に書き流し給へる水茎の跡の美はしさ、師の君をはじめ、皆人のほめ稱へけるも、つゆ誇り給はず、心すなほにして、長上を敬ひ、幼きを愛しみ給へど、一人として君を慕はぬはなかりき、しかのみならず、ことしの春は、めでたく學の業を終へ教の庭に花咲く身とならせ給ひければ、秋のみのりはいかならん、行く末は皇國の女子の鑑ともなりたまはんなど、末頼母しう思はれし君の、今はこと世にすみ給ふ口惜しさ、譬へん方もなきを、まして父母のみことに先ち給へるみ心の內、いか許り行く方なき道に迷ひ給ひけんと思ふにも、先つものは淚なりけり、あゝ今宵なかむる空の、いづくか君の宿ならん、思へどうき秋の露にそぼちし袖のひる時なくなりぬること悲しとも恨めしき限りなりけれ。

眞鍋直子

あゝかなしきかな。日頃なつかしくもえたはしくも思ひ渡りし君の、はやこの世には住み玉はずなりたまひぬ、思へどかなしき事の限りなりけり、君とは幼きよりのいとむつましき友にて、れなし時、れな

し敎の庭に入りてまなひ、ある時は野山を分けて、木の實をひろひ、花を手折りては、共にあそひくらしつゝ、十年あまり、一日も相見ぬ日とてはなく、無つひかはしつる君の、今年の春、猶物學ひせんと て、都へゆかせ玉ひしに、三年四年の別れにはあれと、かはかりの友と、しはしかはとたにわかるゝことのいとをしく、かなしくて、涙なから袂を分ちしか、思ひかけきや、これや限りのわかれとならんとは、思へは〳〵かなしき事の極みなりけり。都へつかせ玉てひよりも、絶ねす都のさまなと、こまかに書きてれとつれ玉ふに、ろをたのみて、はかなき心をもなくさめしものを、今は其ふみさへ長き形見となりはてんとは、世にこの道はかり、はかなくかなしきわさはあらしかし。されと、今も猶世にますものとのみおもほえて、あしたに夕に、かのなつかしかりしふみ、君が恙なき便りもやあると、待ち渡らるるも、けに夢の心地になん。けふは其みたまを祭らせ玉ふむしろにつらなりて、其父母の君のみ心もれしはかられ、またいませし世の事、何くれと心にうかひいてゝ、聞ねまほしき事かす〳〵なれと、むねふさかりて、せきくるなみたとゝめかぬるを、あはれとみそなはし玉ひてよ。

奥原ふく子

萩の下葉色つきて、荻の上風やう〳〵身にしみそむる時とはなりぬ、天つかりかねは、夜な〳〵雲井の空を渡れとも、きみの玉章はかけても來すなりはてぬ、去年の秋、學びの業を脩めんと、はる〳〵都の空にものしたまひしより、朝な夕なにれもかけの森はれて、音狀の通路もいや繁かりしを、このほとは、なぜ怠りたまふにや、學ひの道の奥ふかみ、いとまあらぬにや、さりとて妾には、なとかかくまてつれなかるへきなと、恨みまつりしに、すくる日、久し振りにて、このほと風邪の氣味にて心地すくれすと、いひれこせたまひぬ、いつもなからうるはしき水莖のあとも、常にかはりて、いとしふりて見ねければ、いたく驚きつ、かくて五日はかりを隔てて電報は來りぬ、とる手もふるひつゝ讀み下せは、こはいかに思ひきや、いたつき俄に重りて、昨夜この世を去りたまひし報知ならんとは、あゝ夢なるか、現にてはよもあるましと、しむし涙も出てす、幾度くりかへ

しても、まがふかたなし、あはれゆかしききみは、早この世になき人となりたまひしか、諸ともに敎の庭にわけ入りて、言葉の花をあつめにしも、昨日とはかりれもひしを、花のあした月の夕、手を携へて、かしこの岡こゝの橋の邊にさまよひし其れもかけは、なほまぼろしに殘れるを、あゝあさましきは浮世の習ひかな　あゝはかなきは人生の常なるかと、瀧なす涙を硯にうけて、

れもかけはなほのこれとも言の葉の
　かよはぬ君をいかにかはせん
去年まではきみかかさしゝ萩の花
　手向ふせんとれもはさりしを
今日よりは庭のいとはき咲かすあれ
　忍ふのつゆのひるまなければ

佐々有鄰子

だんきんの友とたのみたりし人なるが、此ごろのあつさにたおてきこえざりしが、風の音の遠音にかなしき音づれをなんきき侍りぬる、そもろも年頃より朝には小學校にかたをならべてかよひ、夕には學窓に机をつらねて、ともどもに日課を修めしが、貴孃はいとすみやかに卒業したまひ、鳥が啼く東の京の高等女學校をも卒業したまひて、某縣の公立校の女敎師にまねかれたまひ、あまたの生徒に文學をさづけて在りしが、常なき風は貴孃をゝ心なく黄泉にみちびきぬ、あなうらめしの空なるかな、妾はかしのみのひと、天さかるひなのふせ屋にふりのこされて、言とふすべもなけれど、書籍といふゝみはしみのすみかと今日よりのちはなりななん、あはれ貴孃の神靈よ、天かけり國かけりきまして、手むけの悼詞を、現身に在しときのことのごとく、中垣のへだてなくきこしめしたまんと、涙ながらにゆしりいづしりかくなも、

色もなく香もなけれどもことのはの
　花をたむけてなげきつるかな

土肥仙子

秋風のそよ吹きすさふ夕くれはかり淋しきものはあらしと、世にいひならはせど、今はかくいふもれろかに、いとかなしくれはゆるは、二ッなき友とせし

人のこぞの夏ゆくりもなく病にをかされ、日を經てれもりゆき、終に藥のしるしもなく、かへらぬ旅路にれもむきしわかれになん、この世にありしころは、よろずのことにつけて、互にものしづかに諫めもし諫られもして、身のためとなりし事尠からず、いとむつましう語らひ交はりしことなど、見るものきくものにつけて思ひ出でられ、袖のしづくのかわくひまなく、なかき月日のたつをもればねずうちすくるまに、はやことしはひとめくりのけふとはなりにけり、くりかへし思ひ出づれは、いまさらにかなしさもいやまさりて、なげゝどしたへどすべなく、せめてなき世のまつりをたにと、み靈の前にむかひ、「君は今いづくにますかしらねどもしのふか岡にまつりさゝげむ」と口すさみつゝ、まつりのわざをなんれてこなひ侍りぬる。されば、たふときも賤しきも、身のほど〳〵につけて、したしく交はりし友をうしなひたるばかり、世にかなしきことはなかりけりと、れもはねし心のかたはしをかいしるしぬ。

北島功子

風いと心細う更け行く庭の面に、千草の花の色様々に咲きいでしも、やう〳〵に盛りはすきて、秋もはや今日明日ばかりなるを、叢にすだくつゝれさせてふこほろきのなく音、いとみたりがましく、訪ふ人もなき柴のあみ戸をさら〳〵とれとなふものは、峰の松風か、稲田を荒らす狐狸のすさびか、いつれ哀れならぬはなき草の庵のわび住ひ、さらてたにしめりかちなる我身、桐一葉落つるにつれ戀しさまさるは、去年の秋つれなき風に誘はれて、しづ心なく散り行く、庭の千草百草と諸共に、あはれかくれさせ給ひしいとしの君の事にぞありける。實にまたぬ月日ばかり早くうつろひ行くものはあらず、君の逝きましゝは、いまた束の間と思ひしか、思ひきや流れ〳〵て飛鳥川、はや去年の此月此日ならんとは、仇なるものは實に人の命にそありける、夏の緑やうやく色を失ひ初めし夕より、いとしかりろめのけはひに心地勝れずとて打臥し給ひしか、是ぞ幾千代かけての御別れとは、あら世の中は闇なりけり、朝夕に播撫子のまた咲きやらぬ蕾の花を、無ざんや一夜の嵐にて、つれもなく散り果てゝ、今ははかなく谷中の露ときねさせ給ひ、緑苔むすれくつきの下に、

山鳥の尾のいと〳〵永き眠りにころはつかせ給ひぬれ、いとしの君よ、如何に此世の君に幸なきをかこちおはすらむ、慈愛深き父母も在さず、年久しく教賜りて、恩愛の契浅からぬ師の君の、みそぢ離れて、物語せん友もなく、唯に夕の露朝の雨風を友として、いかにつれ〳〵にましますらむ、そを思ひ出つれど、妾がかよわき胸もはりさけむ計り、いと〳〵むかしの忍はるゝになん、せめては君のなきみ霊慰めまゐらせんとて、草の庵を立出てゝ、手づから培ひし庭の秋草をりそへて、淋しき君のおくつぎへとは詣てしか、唯涙のみ、はなり落つるぞいと〳〵せんなきや。

北島松子

嗚呼思ひ出する涙のたね、たよりなき身のはゝとも姉とも慕ひまゐらせし、いとしき君の、此世を去り給ひしより、いとゞ我身のわぢきなく、彌生の花もおもしろからず、五月雨ろばふる夕、時鳥の血に鳴く一聲を聞くも、そゞろ過ぎし方の忍はれて、只涙のみはふり落つるぞ詮なき、千々に思ひなやみて、夢うつゝともなくまどろめど、日夜焦るゝ君のおもかげにおひまつるもうれしくなつかしやと、我にもあらでうちさけべど、己れとおのが聲に驚き、目さむれど燈火のかげかすかに風にゆらめくのみ、姿は消えておともなし、思ふまじ悲まじ、またひたれどとて、ゆきにし人の歸りくべくもあらず、さりながら實に我身ほど幸なき者は世にあらじ、いまだ振分かみの頃、はゝその森に先だゝれ、今また君に捨てられ、妾はあとに何樂しみにながらへむ、たゞひまあるごとに、君の御墓に詣て、かへらぬ言をぬをとなし、あらむ限りの涙をそゝぎつくすぞ、我身の樂なる、見る人をこの自痴とな笑ひ給ひぞ、

かはりにし君が御前にぬさとりて
かこつも深きえにしなるらむ

得田なか子

今日は何となう物さびし、手にとる業ものうければ、窓の戸あけて眺めゐしに、いづくともなくふきくる風のおと、いぶかしくみえしむに、西の方を打見やれど、そゞろありきのやどりとせし庭松の風にふかるゝにてなんありける、あはれ去年の秋は、幼き昨よりはうからとも思ひし友と、この木陰に樂

しみかたらひしを、けふはかの君には、葉末のつゆのはかなくも、くさむのかげにものしたまひ、我身は只ひとり、此松陰に昔をしのぶ身とはなりぬ、秋の日のそらに曇りははれぬとも、心の曇りははれやらじ、今更になき影のなつかしく、思はじと思へど思ふ外の心にさそはれて、猶もまさる悲しさになん、飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれど、かくいふ身の行末も如何あらんと、ひとりごつ折から、ゆくりなくちる青葉、一ひら二ひら見るにつけて、なき友をしたふ涙の一きはまさりて、

ゆくりなくちれる青葉のさまみれど
　かへらぬ君のかけぞこひしき

碓　井　信　子

人の命は浮世のならひにて、朝露のごときとは、誰が云ひそめけん、實に理りや、さはさりながら、いまだしも匂ひゆかしき我が友の、さかりもまたで、一夜のうちにあへなくなりたまひぬとは、夢なりけりな、さて君には物事たはくの人にぬけいでたまふのみか、心すなほに、あはれ深く、誠によく女子の道をまもりたまひけれど、師の君はいふもさらなり、やんごとなき方々にまで、めではやされ、いとたのもしき此君に、など神は命をかしたまはざりけん、いかに月に村雲、花に風のたとへとは云へ、かりそめのいたづきより、斯くもはかなくなりたまひし君のいたましや、折しも秋の中むにて、草むにすだく虫すらも、たのが心やくみにけん、共にかなしき聲にぞなくなる、まして世の中に思ひはあれど、子を思ふ親の御心はいかなりけんと、推しはかる涙に袖をしぼりつゝ、たのが心をいさゝかこゝに學すりながしぬ。

牧　野　貞　子

白駒の隙をすぐ如く、月日迭に移りて、わが姉とも妹ともたのみしなにがしの君、世をさりたまひてより、はや一年はめぐりきぬ、あはれさるものは日々にうとしといへど、いかで〳〵これのみは然あるべき、日頃朝となく夕となく、そのかみの事のみ思ひいでゝは、袂の露のかわく間もなきぞかし、ろも妾は越の富山にいかなるゑにしありけん、物心も覺ゑぬ頃より、十年にあまる年月住みなれて、學の友はさらなり、何くれと心あひたる友の數しけきが中に、

何がしの君とは、まだやう〳〵ふりわけ髮の小學の園より、ことに親しく交らひて、はらからも及はぬへたてなき友垣なりけり、君か性いともさかしくて、雄々しきか中に温順の風あらはれ、凡ての事に意をそゝぎつとめける物から、常に級中の一二とかぞへられけり、されどそをいさゝかはこり高ぶる事はなくて、いよゝ不束なる姿をあはれみ、よきも惡きも相語らひて、樂しみあれはこれを分ち、悲しみあれは共にかなしみ、互にさとしはげましつる程に、學の業をへて後も、とひつ訪はれつ、一日相見ねは千秋の思ひして、何の書くれの物語りと、いそしみはげみけるに、あはれ神佛も絡々はねたしとや思しけん、去年の五月、はからずも父君か公の命にてきくたに物がなしき此の四國に移りすむ身とはなりぬ、其折の互の歎は今更いひいづべくもあらず、たゞ〳〵別れはあふの始といひけむ古人の言の葉を相たのみにて、心強くも袖を分ちける後は、ひたすら文のゆきかひたえせず、其日〳〵の事をさへいひ送りて樂しみけるに、一日さみだれの空さだめなき夕まぐれ、一片の端書に、先つ日より心地すぐれず打ふしつ、されと近き中には強てもつもる物語りきこえてんと、いつになく水莖のあとも覺束なく認められぬ、されど常々すこやかなる身にませむ、たゝかりそめの事と思ひしに、はからざりき、これぞ君かはとも悲しき遺筆ならんとは、いかにまゝならぬ浮世とはいへ、病の床を一度とひまつる事もかなはで、此のはかなき別れにあひぬる事のうれたさよ、今はたいかに賤のをたまきくりかへし、よぶともさけぶともかひはあらじ、あはれ悲しきかな、いたましきかな、かゝる爲とにはあらねども、離別の時とりかはししうつしゑに、心むかりの手向して、伏をがみつ、かきくどくに、無情なる姿の、今にも物いひひてんとしてはゝゑめる面影、今はたへえでかきいだき、人目もはぢず、涙にくるゝに、今更の如くふり出でたる秋雨も、れのが心をくみてけるかと、いみじう心細し、

さらぬたに悲しき秋をしのすゝき
しのひあまりてむらさめそふる

今藤仲子

月に叢雲、花に風、世はあやにくのならひかも、末

たのもしき君はしも、命はかなくうせはてゝ、千とせ待つともかへらぬ人となりにけり、あゝかなしとやいはん、悼ましとやいはん、あはれ、あとにのこりしこの身は、よるべなぎさの捨小舟、今よりは浪かせさかまく學の海に、誰と共にか掉さん、春のあしたの花鳥も、秋の夕の月かげも、誰と共にかめでもせん、思へど悲しうせし君、いかで我身を殘しけん、諸共に消ゑざりしこそ、今はなかく\にうらみなれ、そも君はしも、才に、學に、はた德に、よろづすぐれ給ひて、もろ人のかゞみとして仰がれ給ひ、愚なる我身をいといつくしみ敎へ導き給へれど、うれしさはせまき胸にはつゝまれず、眞の姉君とも、師の君とも、賴みつゝ、朝霧あさからず思ひわたれるを、天地の神もしろしめさゞりしか、あなかなしきかも、あなうれたきかも、肝つぶれ只胸いたくて、いはんすべもしらず、あはれ君がみたまよ、我身をあはれとおぼさば、ゆめまぼろしにだに、みすがたあらはして、一言にてももらし給ひてよ。

福原菫子

けふはいかなる日ぞ、わがいとしきよし子の君の母君より送り給し文、なかばよみて胸つぶれ魂きえ、我にもあらで打倒れぬ、二日ばかりのいたつきに、娘よし子はみまかりぬと、こはいかに、ゆめか、うつゝか、夢ならばとくさめよ、思へば一月ばかりまへなりき、浪花の空の學校に、夏やすみなればとて、惜しきたもとを別ち、またあはん日をたのみつゝ、よし子の君はふるさとなる大和十津川へとかへり給ひ、われは和泉へかへりしが、いまより思へば、これぞ永き別れなりける、かばかり常なき人の命とはたれもはざりしを、いまより後は、うるはしき春の花も、さやけき秋の月も、いかにしてたのしまん、ひとり子を失ひし親君のなげき、いかばかりぞと、身につまされて涙せきあへず、やがて浪花に出でなん日、かりずまひにゆきゝして、たのしきものがたりせんにも、その人なし、袖つらねてまなびのにはに通ひなんにも、その人なし、かねてとりかはしゝ寫眞、後のかたみにせんとは思はざりしに、今は中々に涙の種とはなりぬ、只うつゝ世の短きゑにしころはかなけれ。

鷹野靜子

昔より、月にむら雲、花に嵐と云ふ諺にたがはで、はすの浮葉に置く露よりも實にあやふくはかなきは、人の命にこそ有けれ、思出せど、我友のいさゝか心地常ならずと打伏し給ひしが、日頃妾より猶すこやかにおはしければ、日ならず癒りなんと思ひしかひも仇浪に吹きよせられて、是非もなくながの旅路に行き給ひぬ。嗚呼、あるは花見、あるは月見、あるは涼み、あるは巨燵にさむさをさくるなど、かれこれむつまじう交りし其節の事など、思ひつゝくれど、此頃やうやくなき初めし虫の音の、そゞろ淋しう身にしみて、いたましきいやましに、など目覺めて、其まゝに中々眠りやられず、うたてきは世の習ひと思へども、うたて心のやすまずこそ。

山崎しつ子

いにしへより、文月のけふは、なき人の歸りくるとて、家毎にみたまをまつるなり、妾も心ばかりの供へ物奉りて、なき友をまつる、あはれ、世は定めなきものよ、人のいのち程はかなき物はあらじかし、そも君と妾とは、同じ學びの園に入りしより、いつともなく親しみを重ね、日毎に敎の庭にむつびあひつゝ、互に心をうちあけて、一日も苦樂を共にせざりしはなく、川浪の行く末かけて、友垣とちぎりし物を、思ひきや、君はいたはしくも、こぞの春ちり行く花と共に、浮世を見すて給ひて、とことはにあふよしもなくなりぬるぞ、悲しき事のきはまりなる、いかなれば、君ははやくもうせ玉ひけん、思ひいづれば、花紅葉も何かせん、たゞ夢路を行く心地ぞかし、思ひ悲しめるうちに、いつしか一とせあまりをすごして、けふとはなりぬ、日数へぬればへぬる程、忍ぶ事のいやまして、扨は今更の如く覺えて、悲しともうらめしともいふばかりなし、そも君は生れつきかしこく、親に仕へて孝に、學問を好み、すがたは心と共にうるはしかりしかば、つゆれでる心なく、行く末は秋津洲の良妻賢母となり給はんと、人もいひ、われも思へりしを、一夜の嵐にうばはれし事の悲しさよ、のこりをしさよ、先は拙き筆の一ふしを、みまつりの詞にかへて、涙と共にきこえあぐる心しらひを、哀れとればしめして、うけ給ひてよ。

田代艶子

白雲の日影にきゆるそれよりも、はかなきものは命なりけりと、うたはれし古人の言の葉にぞ、けにことはりなりけれ。昨日まではらからと頼みしれのが心あひの友何子の君は、去りぬる月の始めつかた、黄泉の雁に誘れぬ。あなあはれ、かなしきかも。そも此君の心ばへは、三芳のゝ吉野の山の花よりもいと麗しく世にかをりつゝ學びの道もいと廣く、千ゝの業さへよろづの人に立ちまさりてありしを、如何なる禍津神の祟にか、浮世のえにし淺くして、世を秋風の、君か身にのみいとつよく吹きにけむ、嵐の庭の紅葉ぞと、あはれはかなくちり失せ給ひしを、誰かは悲まさらん、まして十あまり七とせの春秋を、朝な夕なに睦みつゝ、文の林ももろ共に、手をたづさへて分け入りし友に別れし事なれど、げに水草のよるべなき心地こそぜらるれ。あはれ松の葉のちり失せずして、ながらの橋のながらへたまはましかば、行末はあはれ女のかゝみともならましものを、月に村雲花に風、世はあやにくの習ひかも、嗚呼いと惜しの君が身や、あないたはしの我友や、すきにし事はゆく水のとゝむるよしもあらざれど、賤のをだまき百千度びくりかへしても、かひなかるめれど、尙したはしさのあまり、かへらぬくり事をかくなむ。

水津すけ子

あはれあはれ、今日はわがいとしたしき友なりし何某の君のうせ給ひて、はや十日といふ日なりけり、つらくゝこし方を思ひ廻せど、ともにふる鄕に在りしときは、日每にかよふ學の庭に、手携はり袖をつらねて、共につとめ共にはげみ、新らしき年ごとの、かるた遊に、はねつきに、あるは花をめで、月をはやし、何事にもあれ、一ッからだのごとくにしたしみけれど、外目にも金蘭の契り、水魚の交りとは、かくぞと見えにけむ。ある時はうらまれも、ねたまれもしたりき。ゆゑありて、われが都に上るときも、いかで一時も異所にはと、ともに遠きたびぢにもひたゝれ、寢食をともにして、はるはすみ田川の堤にあらぬ色香をめで、秋は上野の森にくまなき影をはやしゝこともありき。されど今思へど、こは束の間の夢にこそありけれ。いつの折なりけむ、きみがはなにつけ月につけていひけるやう、かくまで人に賞てはやさるゝとはいへ、つねなき風一たび起らむ

たゞ見る内にふきちらされ、墨染のくろき雲に掩はれては、四のときかぎりなきことをえず、そはさながら人に生死のあることとく、さのみことなりたることにはあらずなど語り給ひて、身の行すゑをなげきたまひしこともありしも、かくなりまさむとのかね言なりしかど、思ひ合せられて、いとゞかなしくなむ。あはれ君は、生れながら才氣にとみ給ひ、ものにふれことにあたりては、よく感じ給ふたけに、いとなさけふかく、學の庭に在りし日も、師のきみよりはいつも賞せられたりき。かゝる君にしも、なほよのことわりにもれず、常なきかぜ、あやなき雲の吹きすさみれはひたちて、五十とさだまれる人生の半たに越えさせたまはず、廿あまり一とせを一期として、歸らぬ旅路に出で立ち給ひしは、かへすぐも、いはむすへもせむすへも去らすなむ。あはれ命は天なりとはいへ、いかで前途のそみある人を、あたらしきかなしきさまにはれとしいれけむ。これを思へど、天とてつゆたのむにたらざりけり。さるにても、君が日頃の尊ぶべき行ひは、千代に傳へ、なさけふかき御心は、萬代かけて忘れまつらさらむ。さはいへ、いかにしてむ、今よりゆくさき、春にかけ秋につけて、かくやさむことのよしを、きこえめして、幾世の末までまもり給へや、そは世にいましたらむ折のこと、あはれかなしきかな、いたましかな。

梨本信子

春の花は、あたゝかき風に散り、秋の月は、一叢の雲にれほはる、散る花は根に歸らねども、咲く折もあり、すむ月は陰る、事ありとも、雲去らむ又も見えなむ、はかなきは露と消えを爭ふ人の命なりけり、悲しきは親しき友の長き別れなりけり、あはれ悲し。たえ子ぬし、つひの道とはかねて聞きしかど、かけてだに昨日今日とは思はざりしなり、目の前の有樣にのみなれて、千代を賴みし愚さよ、かゝらんと、夢になりとも知らむ、君が歸國せらるゝ折、もろ共に往きてよと、强ひて誘はれしに、よし一月半月の業務は休みても、など連れ立たざるべき、否君がいなみ給ふとも、必ずれしても共に行きなむを、さあらむ御側に侍りて、看護もし慰めもし、終りにもあはんものを、母君いまさぬ身には、いかに賴みなく

思はれつらん、思へばく恨めしきは浮世のさがなりけり、彼事此事もろ共に示しあひたる業さへ、半をも見給はで、いくその志をもたらし、いくその望をつゝみて、空しく逝りいましたる君が心や、いかに、せめて空しき鳥の跡だにあらば、形見とも見ましものを、そをしも殘し得ざらしめし、はげしき病はなど、かくて、たゞ現ともなくして、我名のみ呼ばれたりしとか、爲しも終へざる彼事業の爲め、言ひ遺すべき言葉や、さはにありつらんを、さるにても、我は是より、誰と共にか、君が志を爲しとげん、土もさくてふ暑き日、空も氷るてふ冬の夜半、起き明しつゝ、後のため彼事のため、もろ共に、いそしみはげみしは、早五年余の昔なり、繰り返し思ふも悲し、我が、君と始て相見しは、ある女學校に通學せし頃なりき、同窓の友、七十人あまり有りしが、君と我とは一つ級にもあり、殊に家路遠からざりしかば、往來につれだちて、何くれと語らふにつけて、實にことわりや級中の首位を占めて、校の内外に譽れ高きもど、我はいよく君の人となりの慕はれぬ、君は文の林の才も多く在せば、我も好む歌文の道などいつも語り草は多く、色をも香をも知る人は、誰かある、君ならでなどいふまで、中垣の隔てなく、日にけに交り深き姉妹の如くなれど、つひには吾母などのすゝめにまかせて、君が假の宿りを我家にと移して、明けくれを共にする事となりしよりこの方、四年、たえず朝夕に書き綴られし君が日記帖には、一日として否一枚として、父君兄君などの文字あらぬ事なく、我は君の腹だちしを見しことなし、君が長所は孝に深く、恕に強く、忍に強きなり、さるのみならで、遊藝の道こそうとけれ、物縫ひ手書く業も拙からねど、かくては共にはかりし教育の道にも天晴よき師ともなりなん、よき母ともなりなんと、師の君をはじめ、人々のより頼みてありけるに、定めなき世の習ひとはいひながら、おく露のはかなく消え給ひつといふは、さらでも悲しき秋の袂に、又村雨のかゝれとにか、あはれ草葉にすだく虫の聲々、そも／＼誰をか弔ふらむ、

君なくてなにつとめんはたおりの
　つゞれさせてふ音にながれて

古河隆美子

始めありて終りあるは、浮世のならひとはいへ、人のこの世に生れて、黄泉の旅路に行くことばかり哀しきものはあらじ。わらはが日ごろいとも親しく睦まじく、手に手をとりて遊び樂みし幸子の君は、去ぬる年の冬のはじめより、腦病とやいふになやまされ、病魔の勢猛く烈しく、かねて御こゝろよからぬとは聞きつれど、日數立ちなむ癒えなんものと、思ひ侍りしに、いかで鬪らん、終に相見ぬことにならんとは、あはれ哀しくも痛しきは、君の果てにし知らせに接せし事にこそ。生命を致すの病魔たりしとは、などて夢にだに知るべき、一たび君の訃音を聞きては、只なげきかなしみ、朝な夕なの食事のすゝまぬはもとより、其の他なにくれとなく、眼にふれ耳に聽ゆるもの、總て悲しからざるはなし。あゝ人誰れか死なからん、生けるものゝ死するは、疑ふべきにはあらねど、のぞみ多き年少の孃にして、空しく中ばに天折することこそ、げに天の下之よりいみじき憾みはあらざるべけれ。あはれ君が黄泉の客となられしを想へば、思ふほどなみだ泣たること限りなし、天道は是か非か、何ぞ情なきの極まれるや、昨日は心を同くし、今日は世を異にす、頭を垂れて既往を顧みれば、胸に浮ぶは哀しき事のみなりけり、今はわがみも望たえ、君がみはかのほとりを照りわたる月影の、いかに悽ごく寥しく、吹きくる風音のいかに哀れに悲しからんを想ふのみ、夢ならば過ぎし昔を夢にだに見て樂まんと思へど、窓の外なにとなくもの寂く、夢もならず、將に消えんとする燈火をながめては、黄泉眼にちらつき、君が此地に行かれしを咲み、袖の乾くひまもあらず、しかはあれど、君が勉めはげみて和歌の巧なりしは、のちのよまでも香ぐはしく、君が玉作の和歌集は、今よりなき人のふるき歌集に數へられ。人々覓めうつして、愈爭ひ見るに至らん、聊か蕪辭をならべたてて、君が世をさり給ひしを痛むなり。

御代忠子

人の世にありて、悲しき事いと多き中にも、死にまさる悲しみはあらじかし。まいて其齡二十歲にも至らでみまかりし者は、げに悲しみの中の悲しみとこそ云ふべけれ。過る十五日は、おのが幼き頃より、はらからも及ばぬ、いと親しき友の花子孃は、滋愛な

る父母君、親しき友達を殘して、千年かはらぬ靑山の芝生の床に永眠せられし日なり、嗚呼思ひ出だすさへ涙の種とぞなりぬ。花子の君は、幼きときより、學びの道に勵み給へど、未だ小學にありし頃より、他の人々に立ちこえて賢しうおはせど、師の君も、いたく愛で給ひしが、其後首尾よう小學校も卒へ給ひ、住みなれし古鄕を後に見て、都の方に物まなびし給ひき、されど、今まではらからにもまして親しみたりし花子の君に分れぬれど、いと心細うて、明け暮れ花子の君の事をのみ思ひつゞけ、互に文をやりとりなすを、こよなきことに思ひ、唯だ一日も早く、花子の君の、身に錦をきて歸らるゝを、指をりて待ちゐしも、仇となりて今は早や此世の人にあらずして、再び其美しき姿をさへ見ることかなはずと思へど、湧きくる涙とゞまらず、嗚呼何とて斯かる有爲多望なる才女のうせ給ひしか、世には妾ごときの用たゝぬ者もあるものを、何とて天は斯かる人に年をかさせ給はず、いそぎつれ行き給ひしぞと、ろゞろ花子の君の此世におはせし時の事ども思ひ出でに、涙と共に斯くなん、

降田まき子

あはれ我か友よ夏の夕には共に螢をかり冬の朝には互に雪をあつめて同じ窓に文机をならべ同じ師に同じ敎を受け春は手を携へて花をめで秋は袖をつらねて月を見つゝ二人が中の交りはいかなる事のあらんもいつの世にかはかはるべきと深くもちぎりしかひもなくかりそめの病にかゝりはかなくも世を去りし事ゆめか現かゆめならでさむる時もあらんを現なることそくちをしけれ。君はまだ年もやう十あまり九にて父上母君もいまなほすこやかにおはすをなどてかさきたちたまへるまして性質いとやさしく父母に事へて孝心深きのみか學のわざもあだし人に立まさりしかど敎の親達も末たのもしと賞め給ひあまたの友にもしたはれたまひしを何とてかくははかなく世をさりたまへる草葉の露のはかなきは浮世の習とはいひながらかくまでとは思はざりしを今よりは誰と共にか月花をめで誰と共にかものまなひせんげに悲しともいと悲しくたゞ涙に袂をうるほす外はなかりけり。

林　たい子

世の中に死といふ事、いづれ悲しからぬはなかるべけれどもわけて親しき友のみまかりしむかりかなしきはあらざりけり我友梅子の君學びの山の奥深くわけ入り給ふ間もあらで死出の旅路にいでたゝせたまふ身となり給ひぬ名もなき木々は生ひ立ち易く松、柏は枯れ果てゝ薪ともなる世の習ひなれと秋のはの下葉の露と消ゑ給ひしことのいかでか忘られぬべきあはれ世は梅子の君を顧みず月日の流れいとはやく一年の光陰も雪と花と過ぎゆきてけふしも殘る母君をとひ奉れど御聲さへ梅子の君にて同じやうなれど宛から梅子の君と語らふが如くていとゞ思ひのいやまさるもはかなきの世の中の習ひとは思ひまさりてなん。

林　久子

人生は朝露の如しとはまことなりけりげにうつせみのよはあちきなきものにてわか友なる君かねて學の道に志ふかくして東の都にもの學ひに上りしよりはたゞそのおとづれをのみこよなきたのしみとし歸りきまさん日をまちしかひなく其のわざをも得とげずしてなき人のかすにいりにしこそいたましけれ月はかけてもまたみち花は散てもまたこん春のたのまるるものをあはれ薬末の露と消ゑにし人の又歸りこぬこそなは夢こゝちしてなしけれなき人としもれもひさだめぬにはや三週のはるあきも過ぎて今日其のあとゝふ席につらなりぬ親兄弟のうちしをれたるさまを見るに付けてもそゞろにむかしのしのはれてさなきだに露けき秋の夕べに同じ心にかなしくむしの聲も身にしみて袖のしづくもかわきあへすなん。

故山本梅子の君を悼む

青木　春子

あな君よ、梅子の君よ、君は今、何れに行きたまへるか、何こに住みたたまへるか、むらさきの雲のあなたに行きたまへるか、わりときく、極樂とやらんに住みたまへるか、なづかしき親をのこしたき、したしき友をふりすてゝ、あないもなくに、たゞひとり〳〵。思へは、君をしりしは、今より七年以前(廿三年)琴の稽古を初めしとき、その師のもとにてあひたるがそも〳〵初めにて、君もへだてなく語らひ給ひ、わ

のれもなつかしく、何となく、はなれがたなき心地せしころ、あやしきことのかぎりなりけれ。

その比、君は、十あまり一歳の時なりしも、琴は、裏組をれへて、中組の末の松山の中ぞを、すきたまへるころにて、れのれは、君より、年かさなれども、ろのわざは、なか〳〵に及ふへくもわらさりき、ろの後は、日毎〳〵にしたしうなり、追羽根、まりつき、歌合せ、わるは、きしやごはぢき（れ國にてネユギヤアはじきと云ふ）などの遊びをなして、こよなきたのみとなせり。

君は、明治十三年十二月、牛込區南榎町に生れて、山本政德氏の獨り娘にして、八歳の時（廿年）愛日の學舍に入り、わひしりしころは尋常四年生なりと、語り給ひぬ、されど、筆のかきふり、文作るなどは、なか〳〵に、ろうとは、思はれざるほどにて、れのれは、よき友を得たるを、よろこびぬ。

君は、生れつき、いと麗はしく、彌生の花も色なく、十六夜の月も光を失ふむかりなるに、心ぞへさへ、いとやさしく、その双親に仕へて孝なる、友に交りて信なる、女の德、一としてそなはらざることなく、また才智人にすぐれて、世のきこえ、いとめでたく、ことに、文かき、歌よむわざをさへ好みたまひしは、後にをしまれ給ふのもとなりき。

君が文かき、歌よむわざを、好みそめられしは、三年生の比なりしとかや、ある師に就きて、初めて文を作りしは、犬てふ文題のにて「犬にはもッぱがわり云々」とものし、夏虫てふ歌の題にて「草むらをてうちんつけて、眺むれど……」とものして、師の君に笑はれたりと、語りたまひし君が、後には、見るもの、聞くもの、文となり、歌とならぬはなく、高等二年三年生（廿五六年）の頃は、さかんにものして、博文館の幼年雜誌てふものにか〻げ、不具者のために、わつき涙をそ〻ぎては、やさしき女の心をわらはし、鎌倉權五郎の武勇をめで〻は、世の同胞に、大和心をはげまし、わるは、女子の敎育を論じては、その局に當る敎育家の胸をさむからしめ、女學生をいましめては、よく生意氣の鼻を打ちをり、わるは、都の浮薄なるをなげきては、田舍の質朴のよろこぶべきをのべ、櫻の妖艶をにくみては、梅の幽靜めづべきものし、君がならずゐにたくはへらる〻

文のちからはおそろしきまでにすゝみ、君がむねにつゝまる、美妙のなさけは、はかられぬほどにふかくなか〳〵に、世の人の及びなんやうもあらず、されど、君を神女とよびしも、よもひがことにはあらずかし、

仝じをしへの庭にあそびながら、君は日毎〳〵にすすみてその名もいと高く、文もてその交りをもとめらるゝ人あまたあるほどなるに、おのれは、坂に車をのぼすがごとく、ともすれどさがりがちにて、何ごとも得せず、君とつれだつことの、はづかしかりけるを、君は、なか〳〵にすてさせたまはず、ねむごろに、教へみちびきつゝ、少しもいとひたまはず、そのまことある御心には、泣くより外はなかりき。

一樹の影の雨やどり、一河の流をくむ人すら、他生の緣と、佛はときたまへるに、おのれは、我が日の本の西のはてにて、三百あまり五十里の、海山を隔てぬる、佐賀に生れて、ゆくりなくも君にあひて、かくも忘たしうなり、かくもあつきなさけをうくること、思へど〳〵、いと〳〵ふかきえにしぞかし。

そのゝちは、君がゆくところにはかならずゆき、おのれが思ひたつことをど、君かならずこれをたすけらる、されど、君と、おのれは、さながら、影の形にそふが如く、春は所々の梅園をさぐるもともに、夏はそでふく風に涼を納るゝもとも〳〵に、秋のさやけき月をめづるもともに、冬のきよき雪をめづるもとも〳〵なりき。

月にむら雲、花にはあらし、このたのしき月日は夢とすぎつゝ、かなしき月日むかへたることそうたてけれ。

君は、人にすぐれて丈けたかく、なみのものより二年がほどはふけて、みえさせ給へるを、御兩親には、いと〳〵うれひたまひて「このわりにて丈伸んには如何なる大女とならんも知るへからず」、とのたまふほどなりしに、廿六年（十四歲）のころより、少しものびさせたまはず、また、これまでの、さわ〳〵しきに似ず、いとしづかに、ものやはらかに、なり給へり、これぞ、君がいたつきのみなもとなりしを、神ならぬみのしるよしなく、「としのせゐならん」と、見すごしたるぞ、うたてかりける。

君が、しづかなる、ものやはらかなるは、年々にす

すみて、末はふかくしづみがちになんなりゆきける、されどさはかりのやまひとてはなく、たゞ腸胃に少しあしきところありとて醫師の藥をのみたまへり。

廿八年の三月は、卒業試驗の期とて、朝ははやくより、夜はおそくまで、はげみたまひぬるを、御兩親にはあんじ給ひて、しばしばとゞめたまへるを、君がかちきの性、なかなかにきゝいれず、いよいよはげみたまひしものから、かねての如く、首席にてとこほらず卒へたまへり、されど、そがため、みけしきは、いたくかはらせたるぞかなしき。

かくて、他の卒業生は、高等女學校、あるは何々女學校と、それぞれ入學せしも、君は、れいのさかしき心に「とうとき人は格別、女子の智育のみすゝむるは、却りて身をあやまるものぞかし、女子はよろしく、當時の身分と、地位とをかへりみ、後來妻となりて、婦の道を全うし、また、幼兒をそだつるに、家庭の敎へに、不都合をかんぜざれば可なり。」とて、たゞひとりふみとゞまり、かたくまもりてうごきたまはず、裁縫を習はんとて神樂坂町の、さる裁縫店にかよひて、職人らと共に、店先にあひならびてつとめはげみ、少しもはぢともしたまはず、今に友がきのあさゆふ、學校へゆきかふさまを見ても、少しもうらやましとも思ひたまはず、そのむねむねしき心ばへにいたりては、古にも、今にもためしなく、げによろづ代のかゞみとこそ云ふべけれ。

かくの如く君は、ひるのあひだは裁縫をつとめ、夜は、家にありて、文作り、歌よみ、筆のはこびなど、學びたまへり、あな君が、やさしきうへに、すこやかならぬ身なれば、などか、とこしへに君を保たんや、十月頃よりは、腸胃殊の外あしうなり、十二月にいたりては、全く慢性腸胃加答兒となりて、病の床につきたまひぬ。

こゝに、そのとしもくれて、廿九年のはるをむかへて、世はのどかになり、何となく、にぎはしうなんなりぬ、君も、それにさそはれて、心もすがすがしうなりぬとて、さむからぬ日は、庭にいでゝ、追はねに、昔のことなどうちかたらひしこともありき。

一月の五日は、友どちうちつどひて、かるた遊びをものせしが、かねて、君はかるた會には、かならず

一方のかしらとして、なか〳〵に及ぶものもなきに、今日は君ゐまさねど、興うすくて、何となく、はづまぬこゝちせられしゆゑ、君をまねきしに、よろこびて參らせたまひ、いたつきの身をもわすれて、興じたまひぬ、十一日は、君が家の例なりとて、おのれもまねかれて、かるたに心うばはれつゝ、夜のふくるをもしらざりき、

一月は、世のにぎやかなりしゆゑにや、君もさしたるなやみもなくしてすぎ、いと〳〵うれしうなん思ひしに、こはたゞ夢のまにて、二月に入りては、またも、まくらにつきたまへるぞかなしき。

その月十五日は、ゆくりなく、友どちのあつまりたるに、かゝることはかずあらず、よきあそびもがなと、うち案じたるすゑ、ときおくれたれど、かるたあそびぞよからん、それぞよからん、されど梅子の君はいかゞあらん、せひ〳〵むかへむやと、とりいそぎて君をとひたるに、君は、「はやたへられず」と、のたまひて、うちしをれたまへるを、おのれは、「いな〳〵たとへ、あそびはなしたまはずとも、そを見るばかりにても、ふしどに、しづみたまふより、いかにかなぐさみたまはん」と、すゝめしに、君は、「そはもとよりこのむことなり、されど、かみみだれて、すがたいたくみすぼらし、このさまにては、なぞか人樣にあはるべき、いな却てしつれいなり」と、かゝるときにも、女のたしなみを、わすれたまはぬぞ、いとたふとし、おのれは、「いないな、そはひが事なり、病の身なれど何のしつれいなるべき、まして仝じ友どちの間に、いかなる姿なりとてたれとがむべき、かみもそのまゝ、衣もそのまゝにて」と、そゝのかしたるに、君も「さらば行かん」といさみて、共に來させたまひぬ、されど、ひねたまひてはあしかりなんと、ふとんなど、かず〳〵つみ、こたつをはとよくして、そが內に君をかこひしに、いたくよろこびて、他の人の笑ひそゞめくをみては、共に笑ひ、をり〳〵は、をかしき事どももものたまひぬ、十時頃にやあらん、母君のむかひに、こさせ給ひたるものから君もかへりたまひぬ、噫々、のちにて思へど、これぞ君が、我か家に來させたまひたる終りなりき。

（以下次號）

伯爵 東久世通禧 閲
伯爵 副島種臣 閲
西澤之助 編

高等女學讀本

全部十二册卷一、二、三、四、(第一、第二、學年用)既刊

高等女學校規程の昨二十八年一月を以て發布せられし以來各地方到る所女學校の新設を見るに至りしは實に女子敎育の爲に賀すべきことゝいふべし然るに其の六學年間の敎科に充つべき適當なる敎科用書の世に乏しきは當路者の常に遺憾とする所にして已むを得ず從來の國文讀本類を斟酌して之を課するもまゝ障礙なき能はず編者こゝに見る所ありてこの書を編し大に其の材料の撰擇に注意し主に婦女子の淑德美風を養成し兼ねて國語國文の正格なるものを練熟習得し德行學藝共に其の完全の域に達し良妻賢婦たるの基を固くせしめんことを庶幾したるものなり敎育家諸彥乞ふ本編を一閲して女學校國語科の用書に採用せられんことを

東京京橋區築地二丁目廿一番地
(電話番號一九四六)
發行所 國光社

大和心

●本誌毎月十日、廿五日、二回發行
●一部郵稅共金拾錢
●三ヶ月前金五十五錢
●半ヶ年前金壹圓
●爲替は芝口支局宛

和漢閨婉の精神もて日新の學物にあへしらひ大和ないみじく外つ國の文をも博く學ばんこと是本誌の女子教育に對する希望にこそ●倫理、教育、また社會上より婦人問題を究め且文學美術など人の性情を陶冶し世の文化を助く可きものより進んで材を採るところ[illegible]て弘く淑女諸子の寄稿を望む

[illegible]あり[illegible]社の[illegible]を紓べ●寄物取[illegible]課程[illegible]小[illegible]の[illegible]

第壹號九月十日發行●社説**人道女道及婦道**の二 には女界の立道興敎

上代の織物繍物は青丹よし奈良の寶庫の大觀を紹介し●櫻井時冬氏の**小堀遠州**は茶師にして[illegible]術界に富み遠州流の一派を開きたる茶博士を傳し●櫻井大學教授の**世界女盡し**は北極の奇秘を開き●棚橋絢子刀自の**[illegible]の説**[illegible]到なる其他家政學、衛生法、文庭等専門家の講義録●理學、文學、史談等を始め文彩離陳應接に暇わらざらしめ●殊に武島羽衣、大町桂月、與謝野鐵幹等の新體詩文、並に諸家の小說、及、插畫數葉の清勁なる有り

第壹號口繪は**跡見花蹊**女史高雅[illegible]潔の筆に成れる富岳圖、下村爲山氏の洋畫數葉あり

東京芝區新櫻田町十九番地

發行所 女教社

女學雜誌

第四百二十五號（每月二回發行）

明治二十九年八月二十九日發行

社說　家庭亂

女學　女學教師淸俗の感●ストウ夫人が半面の歷史●家庭の氣品●歐州諸國皇室の姻戚

隨感　情感の調べ如何にか響く●遞信書房の隱士●花散り行けむ花を忘る●寡婦未だ曾て多く訴へず

教育　教育語の徹底●天才と學校教育●學校教育は智育に偏するもの也●學校教育は普通教育也●大教育家を求むるの聲●ヘルバルト學說●華族教育の方針●臺民教育の方針●今日の學風●大隈伯國民の教育を論ず

評論　我同胞の弱點　中上次郎

雜錄　情なき世（花影子）●波上の明月に南洲を憶ふ（曲浦生）●人？惡魔？（至小きベッレヘム。ユートピア二ッ三ッ）靑柳有美●築山子廼舍社中詠草

批評（其四）

時文數件

投書　女學校の應接　日蔭者

發行所　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女鑑第百拾五號目錄

女鑑
吾人の希望

論說
女流か學者に望む……藤田止戈三
女子教育一斑(二十三)……三輪田眞佐子
愼言につきて……鹽井ふく子

史談
洛陽の貞女……鹽井ふく子
奴の小萬……山崎美成

家政
たちぬひ……西山たい子
造花……伏見藤三郎
だいどころ

學園
日本文典(十六)……鹽井正男

漫錄
古梅園大墨の辭 故人源信遍●あさせのしろべ 今藤井高尙●長崎の象女 今山崎美成●おきの玉藻 永石德文●しみのすみか 石椁千亦●雨月物語 上田秋成●克巳といへろこにつき 松下清風●紋帳圖式經目井上賴文寄贈●東京二十四景(五) 菊園の翁●朴平(三) 白魚女史

文林
歌 數十首 文 數章

雜報
御救恤金御下賜●東京府高等女學校の名譽●宮中御歌會●新田義貞と大石義雄當代の歌仙日蝕を詠ず●孝子●臺灣學生の赤穗義士談●世界第一の長壽者●松樹の天然晴雨計●普通裁縫書

敎の庭
懸題 歌 數百首
文 數十章

口繪 採蓮……高橋松亭
挿畫……仝

(明治二十四年八月八日内務省許可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價	一冊 十錢
	六冊(三ヶ月分) 五十五錢
	十二册(半年分) 壹圓
	全國無遞送料
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治二十九年九月四日印刷
同　年九月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)